
やさしい鍛冶師

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさしい鍛冶師

【Nコード】

N3589M

【作者名】

k u r o

【あらすじ】

両親を戦争で亡くし、両親の友人であるドワーフに育てられることになった少年トール。

トールは父の剣を打ったドワーフの鍛冶の技術に憧れ、ドワーフから鍛冶を学び始める。

数年後、トールが「青年」になった頃、『学院』と呼ばれる教育機関から入学の誘いが来る。

トールはその誘いを受け学院に入学することを決める。

そこでツールは自分の理想とする剣について学んでいく。

《注意》 作者は小説を書くのは素人なので、過度な期待はしないほうがいいです。

あと、タイトルと主人公の性格があってないです。わりとよくキレます。

記憶

俺の両親は戦争で死んでしまった。

そこそこ腕の立つ冒険者だった両親は、攻めて来た他国の兵隊に殺されてしまった。

その時、俺は町からだいぶ離れた父の友人であるドワーフの家に遊びに行っていたので命は助かった。

自国の兵隊がやってきた頃には、町は半壊状態だった。

町の多くの人は死んだ。

両親のいなくなった俺のことを不憫に思った慈悲深いドワーフは俺のことを育てると言って俺を養子とした。

だが、当時の俺は7歳児で両親が死んでしまった悲しみでずっと泣いていた。

ドワーフは友人の忘れ形見である俺のことを本当に気にかけてくれて、子供の好きそうなお菓子やおもちゃをたくさん買ってきては俺を慰めようとしてくれたが、俺は泣いてばかりだった。

泣いてばかりいた俺に、ドワーフはあるものを見せてくれた。

それは一つの「剣」だった。

当時の俺は剣を見たことなどほとんどなくて、両親からは剣は「

危険」なものだとしか教えてもらっていなかったので俺はその剣を見たとき驚いた。

なぜならその剣はあまりにも

「……きれい」

美しかった

見た目には派手な装飾もされてはいないし宝石もなにもない。

なのに目を惹きつける。

「…これはな坊、ワシが作った剣だ。」

「おじちゃんが？」

「そうだ。」

当時の俺は、この無骨なドワーフがこんな剣を作ること驚いて剣とドワーフを交互に見てしまった。

「…坊よ、ワシはな剣は殺しの道具だと思っておる。どんなに言葉を並べても人を傷つけるだけの物だ。」

そう言ったドワーフの顔はとても悲しそうだった。

「こんなにきれいなのに？」

俺は剣を指差して聞く

「そうだよ坊。そもそも剣は斬るためのものだ。」

当時の俺は、なんと言えれば良いのかわからなくて途惑ってしまっ
た。

そんな俺を髭もじやの顔でドワーフはさびしそうに笑いながら

「だがな坊、剣は傷つけるだけではない。人を守ることもできたよ
うだ。」

そう言って壁に立てかけてあった剣を俺の目の前に持ってくる。

「この剣の持ち主は剣で人を「傷つける」のではなく「守った」。ワ
シが殺しの道具でしかないと思って作った剣でな」

ドワーフは俺に剣を押し付けるように持たせて言った。

「全く大した男だよお前の父親は。」

俺の両親は剣を持って他国の兵隊に一步も退かず、援軍が来るま
で戦い続けたそうだ。

援軍が来た頃には、両親はもう助からないような重傷だったらし
い。

両親はもう一線を退いた冒険家だった。

いざとなれば逃げ出しても誰も責める事はしなかったはずだ。

なのに逃げなかったのは

「息子を助けるため」

息子が少しでも逃げる時間を作るため

そのための時間稼ぎをするために

最後まで戦い続けた。

気がつけば俺は剣を抱きながら泣いていた。

ドワーフがそんな俺の頭をなでながらぽつぽつと話し始める。

「なあ坊、お前がその剣を綺麗だと思ったのは、その剣が人を「守る剣」になったからだ」とワシは思うんだ。」

「え…?」

「ワシがお前の父親が持っていたこの剣をせめて墓に入れるときに綺麗にしてやろうと研いでみたら、信じられんほどの輝きを放ちおった。」

俺は涙に濡れた目でドワーフを見上げる。

「ワシは思ったよ。まるで剣が誇らしげに胸を張っているようだ。」

まるで仕事をやり終えた男の顔を見ているようだ、とドワーフは言った。

町の共同墓地く

俺とドワーフのおじちゃんは俺の両親の墓の前に来ていた。

「……。」

「……。」

周りにはほとんど人はいない。いるのは俺とドワーフのおじちゃんだけ。

ずるずる

俺は父親の剣を引きずりながら両親の墓の前までやってきた。

墓は二つ並んでたっており、まるで肩を寄せ合っているようだった。

「……。」

ザシュッ

俺は無言で剣を父親の墓の前に突き立て、母親の墓にはここに来る前に摘んできた野の花を添えた。

そのまま俺は両親の墓をじっとみつめたままドワーフのおじちゃんに聞こえるように、大両親の墓の前で、天国の両親にも聞こえるように、大声で叫んだ。

「俺に剣の作り方をっ！……！！」

天まで届けと叫んだ。

「教えてくださいっ！……！！」

記憶（後書き）

感想評価まっています。

特に感想まっています！

すごい衝動的に書いてしまったので反応が気になります。

もうひとつの小説も頑張って書いていくつもりなのでよろしく願います。

理由（前書き）

一話の補足です。

理由

子供の頃に見た親父の剣の輝きが綺麗だった。

育ての親であるドワーフは、それは剣が自分の仕事を全うしたからだ、といった。

子供の俺はそのとき思ったんだ、

もっと「人を守る剣」を作りたいって

たくさん「人を守る剣」を作れば

「人を傷つける剣」は無くなるんじゃないかって

俺の「人を守る剣」が「人を傷つける剣」より頑丈で強ければ、

親父のような人間は生き残って、俺みたいな寂しい思いをする奴はいなくなるんじゃないかって思ったんだ。

俺みたいな人間は少ないほうがいいに決まってる。

だから、俺は鍛冶師になって「人を守る剣」を作ると決めた。

今思えば、馬鹿な子供だった。

そんな言葉で飾らなくてもただ一言、ドワーフのおっちゃんに言えばよかったのだ。

「俺もこんな綺麗な剣を作りたい!」と

だって、それが俺が鍛冶師になることを決めた一番の理由なのだから。

成長

ドワーフのおじちゃんに俺のことを鍛冶師にしてくれ、と頼んでの最初の数年は俺は何かによかれたかのように槌を振ってきた。

まるで悲しみをすべて叩きつけるように槌で金属の塊を叩いてきた。

ドワーフのおじちゃんはそんな俺に厳しく、時には優しく、ドワーフの鍛錬の技術のすべてを教えてくれた。

「人間ではありえない鍛冶の腕」

それが、俺が12歳のときに作った護符入りのペンダントをおじちゃんに贈った時のおじちゃんの台詞だった。

おじちゃんの誕生日に贈ったそのペンダントには、俺ができる限りの技術で持ち主を怪我や病気から守るまじないを刻んだ。

それを見たおじちゃんは、次の日から俺にドワーフの技術の真髄を教え込んだ。

それから五年間、俺はひたすら鍛冶の腕を磨いてきた。

すべては「守る剣」を作るために。

現在~~~~~

「トール、お前に客がきておるぞー!!」

しわがれた声が熱気に包まれた工房に響き渡る。

「んー？ 町の娘の誰かがまたペンダントでも作ってくれと頼んできたのか？」

やれやれといってどこか年寄り臭い掛け声で立ち上がったのは細身だが服の上からでもわかる筋肉質のがっちりとした体格の青年だった。

灰でくすんだ様な金髪と赤茶色の瞳のやさしげな顔立ちをした青年。

彼の名はトールⅡグラノア。

それが、ドワーフから技術の真髄をすべて学んだ人間の鍛冶師の名前。

成長（後書き）

ちよい書きたいところまで書きます。

E G Gのほうを待っている人ごめんなさい。

感想と評価待っています。

勧誘

俺がおっちゃんに呼ばれて自宅の玄関に向かうとそこには軍服をきた大男がおっちゃんと話していた。

（でけえ人。二メートルぐらいあるんじゃないのか）

「おっ！来たなトール」

そういったのは髭もじゃの一メートル半ほどのドワーフだった。

ヴォガスⅡザール

俺の育ての親にして鍛冶の師匠。

そして、親父達が死んでからの十年間、厄介者の俺をここまで育ててくれた俺の命の恩人。

大男は俺のことを見て驚いた後に、おっちゃんの方を向いて何か話し始める。

「ヴォガス殿、…で…こち…噂…ですか？」

「そう…ワシ…の…だ」

声が小さくてよく聞こえなかったが、どうも俺のことを話しているように聞こえる。

「おっちゃん？それで俺に客って言うのはこの人のこと？」

「んん？ああそうだ。この人がお前のことを訪ねてきたんだ」

おっちゃんはどこか歯切れが悪そうだった。

「ふーん、まあいいや。それで軍人さん俺に何か用かい？」

俺は軍人さんのことを見上げながら尋ねる。

軍人さんは俺のことをじろじろ見て俺に「トール君と言ったね？君は「学校」に興味はないかね？」と突然聞いてきた。

自宅くくく

今自宅のダイニングでは俺とおっちゃんと軍人の大男がテーブルを挟んで話し合いが行われていた。

「学校ってどういう意味？」

「王都の学院は、若くて才能ある若者を欲しがっていてね。風の噂でこの街には若い腕の立つ鍛冶師がいると聞いてね、是非勧誘しよう」とこの町に寄ったわけだ」

「へ」

俺は、思わず気のない返事をしてしまう。

「…あまり気乗りしていないようだね？」

「いまさら俺に何を学べと？」

「それはもちろん未熟な自分の腕を磨くために――」

「ツールにはその必要はないな」

そのときおっちゃんが口を挟んできた。

「それはどういう意味ですか？」

大男は意味がわからないとおっちゃんに尋ねる。

「鍛冶の技術で、こいつに物を教えられる者などいないということだ。」

「…信じられませんな。自分達の技術には絶対の自信を持っているあなた達ドワーフが人間の若者をそこまで評価するとは…」

「それだけツールの鍛冶の腕は人間離れしておる」

ドワーフが認めた人間の鍛冶師。

おっちゃんの言葉で相手の大男を黙ってしまった。

だが

「だが、鍛冶以外のことならこの坊主はほとんど無知でな、そういったことも教えてくれるというのならその学院に行くべきだな」

おっちゃん言葉にはつづきがあり、それには俺が驚いてしまった。

あわてておっちゃんの顔を見る。

そこにはまじめな顔をしたおっちゃんの顔があった。

「トール。お前が鍛冶師を目指した理由を忘れたわけでないだろう？お前の目指している剣を作るためには鍛冶の知識だけでは足りないと思う。だから、王都へ行けトール」

俺は真剣な顔のおっちゃんを見て思い出す。

「守る剣」

人を傷つけるのではなく、人を守る剣

俺が目指す「剣」

鍛冶の腕は確かにあがった。

でも、俺の作った剣は本当に人のことを守ることができるのか？

最近ではそればかり考えていた。

（…おっちゃんに見抜かれてたか）

「…おっちゃんは俺が王都の学院に行けば俺の目標が叶うと思うか？」

「わからん。だがこの小さな町ではお前の才能が潰れていくだけだ
ということとはわかる」

「……………」

「……………」

俺とおっちゃんは二人で黙り込んでしまった。

「トール君。返事なら急がなくても構わないのでゆっくりとヴォガス殿と話し合って——」

大男は黙り込んだ俺達二人に気をつかってくれたが

だけど、俺はもう決めていた。

「……………いや、決めたよ」

子供の頃の夢を叶えるため、走り出すことを。

「王都の学院に行って、俺は「守る剣」を作るよ」

勧誘（後書き）

なるべく話の内容がかぶらないよう頑張ります。

でもどこか似てしまったら大変申し訳ありません。

そのときは一度消して書き直すつもりです。

感想、誤字脱字の報告待っています。

到着（前書き）

結構、話が飛びます

到着

「…これが学院。」

そこにはくすんだ金髪の青年が背中に皮のバッグを背負って目の前の建物を見上げていた。

（思っていたよりでかいな）

「トール君、そんなところに立っていないで早くこちらに来てくれ！」

青年がボーっと立っていると、その彼を大声で叫ぶ大男がいた。

ダランⅡコードリス

それが、大声で青年を呼ぶ大男の名前であり、青年をこの学園に勧誘した人物である。

「…今行くよ。ダランさん」

大男の声に耳をキンキンさせながら、トールは学院の敷地内へと足を踏み入れた。

トールは学院に行くことを決めてから、驚くほどの速さで町を出た。

育ての親であるドワーフからは、保存食の干し肉や乾パンを大量

に持たされて、最後に犬が一匹入りそうな道具入れを半分押し付けるように渡された。

道具入れの中身は長年使っていた鍛冶や細工をするときに使う道具だ。

そして、次の日にはダリスさんと長年住んでいた町を出た。

家を出たときドワーフが涙目になっていたことに気づいていたが、トールは知らないふりをして元気に手を振ってから家をでた。

道中はダリスが道案内をしてくれ、そして、トールは今王都の学院にいる。

学院には、どうやら「学部」と言うものがあって学部によって受ける授業も生徒の格好も変わってくる。

「武術学部」

主に、剣術や体術を学ぶ学部で将来軍属や騎士になる人間が多い。

「魔術学部」

魔術を学び研究する学部。将来は魔術研究か「魔道院」に入るものが多い。

「一般学部」

平民が多く、主に手に職を持ちたい生徒や資格を取りたい生徒が

在学する。

実家の家業を継ぐ者や文官になる者など卒業後の生徒の職業は一番幅広い。

学部のほかにも「学科」が存在して進学することで自分がなりたい職業に必要な勉強をそこで学ぶことができる。

学院は16歳から入学可能で、卒業は在学する学部で必要な「単位」と「成果」を見せれば何時でも卒業ができる。

ただ、留年を2回連続繰り返すと問答無用で退学。

ちなみに、トールは二年生から編入することとなった。

その理由は、一応の入学試験としてトールは一般的な読み書きと自分の得意なことをしてみせる面接の様なものを行ったのだが

トールはそこであることをやった。

彼は、おもむろに針金をポケットから取り出すとグニャグニャと針金を曲げ始めた。

面接官である学院長もそれぞれの学部の学長も、彼が何をしているのかわからなかった。

しばらくすると、彼が手を止めて何かを学院長に差し出す。

「「ん？」」

「お近づきの印に差し上げます」

トールが差し出したのは、針金で作った梟が本を咥えるこの学院の紋章だった。

それは見た学院院长は驚いた。

他の教師達も驚き、みんな目を丸くしていた。

学院にまだ通っていない青年がこんな技術をもっていることにまず驚き、次に彼が今まで作っていた作品も見たがった。

彼がベルトのバックルや護身用の短剣を見せると、学部長達は顔色を変えて猛烈な勢いで彼のことを勧誘し始めた。

学部長達は、彼の能力を「一年も腐らせるのは惜しい」といって二年からしか在籍することのできない「研究室」に入れるために、彼を強引に二年生からの編入とした。

到着（後書き）

少し編集しました。

く部をく学部に変更しました。

こちらのほうが語感がいいと思いましたので申し訳ありませんが変更しました。

後もう一つタイトルを鍛冶屋から鍛冶師に変更しました。

重ねて申し訳ありません。

作者がこちらのほうがタイトルとしてふさわしいと思い勝手に変更しました。

こういったことがあまりないように今後気をつけます。

男子生徒

「学院」

正式名称はジュノ王国王立特別教育学院だが生徒も教員達も普段はただ「学院」と言っている。

設立から長い歴史を持ち、そこで行われる教育は高度で国の重要な役職の人間は大抵そこで勉学を学んでいる。

歴史のある学院だが、その学院の校風は堅苦しいものでは決してなく、平民も貴族も身分の上下関係はなく生徒達はいつも笑いながら勉学に励んでいる。

「勉学に必要なのは優秀な教師でも知識の詰まった本でもなく、隣にいる友人の励ましの言葉だ」

それが、この学院を作った国王の言葉だ。

何代か前の国王ですでにこの世にはいないが、その大らかな性格と慈悲深さで臣民には親しまれていた。

そんな国王が作った学院の校風を、一言で言えば「自由」

日々、どこかの研究室では色鮮やかな煙が出ており保健室では人が毎日のように運び込まれ、たまにどこかの教室で爆発が起きていることは日常の光景だ。

そして、そんな学院では今新入生の入学式と歓迎会の準備が行わ

れている。

新入生は、学院の敷地の中にある講堂で学院長からの学院での心構えを眠くなるほど聞かされる。

二年から上の学院の生徒達はそんな新入生達のために講堂とは別の建物の中で歓迎会の準備の仕上げを急ピッチで仕上げていた。

「料理が出来上がったらじゃんじゃんもってこい!!」

「手の空いてる奴は皿並べてろ!!」

「クラッカーとくす玉の準備はいいか!？」

「おいこれはどこに置けばいいんだ!？」

そんな生徒達のあせった声が、そこらじゅうから聞こえる。

彼らが焦っているのは理由がある。

他の学部 of 生徒達がすでに昨日のうちにすべて部屋の飾り付けが終わっている中で、彼らの学部だけは徹夜で朝方までかかってしまったのだ。

「…なんでこんなことになったのかしらね」

「その理由はみんなが徹夜で作業しているときに誰かが酒を持ち込んで酒盛りになったからだろ。」

「気がつけばみんな疲れと眠気で寝てたな」

「教師にばれないように薬術学科の先輩に酔い覚ましの薬をもらってくるまでホントみんな死んでたわね」

徹夜での作業でテンションがあがった状態での酒盛り、そして二日酔いをごまかすための工作に時間がかかりすぎて彼らの学部はまだ完全には準備が整ってはいなかった。

そんな中、彼らの焦りをさらに焦らせる事件が発生する。

新人生の歓迎会で使うはずのくす玉の最終点検中に、それは起こった。

なんと、最終点検をしていた女生徒の一人が誤ってくす玉を引く紐をおもいっきり踏みつけて、くす玉の中身をばらまいてしまった。

中身をばら撒いてしまった女生徒は、顔を真っ青にして自分のしてしまったことに呆然としてしまう。

そんな彼女に、今まで作業をしていた生徒達は焦りもあってか彼女に暴言を吐いてしまう。

「何してんだよっ!! もうすぐ式も終わるって言うのに!」

「ふざけんなっ!!」

「お前なんてことしてんだよ!!」

「どうすんだよこれ!!」

彼女を責める声が部屋の中に人間の口から飛び出してくる。

女生徒は、真っ青な顔で何度も何度も頭を下げて謝るが彼らの耳には届かない。

疲れと焦りでイライラしていたせいで、彼らの言葉には容赦がなかった。

女生徒はもうほとんど泣きそうな顔で謝るが、彼らの怒りは収まらない。

彼らは「くす玉を直せ」と彼女に言うが、くす玉は紐が千切れてしまい中の紙ふぶきや色のついた紙テープも飛び出してしまっている。

とてもではないが彼女一人では新入生が来るまでの間には直すことはできないだろう。

それでも、彼女は泣きそうな顔で「わかりました」と言って、壊れたくす玉を直そうとくす玉のほうを見た。

「え？」

だが、くす玉の方を振り返ると、そこに何故か「見知らぬ男子生徒」が居た。

男子生徒は、なにが楽しいのか壊れたくす玉の中を見たり、中の

紙吹雪を手にとって笑っている。

その男子生徒は女性の方を見ながらこういった。

「なんか壊れてるみたいだから、ちょっと直させてもらっていいか？
大丈夫、十分ほどで直ぐ済むから」

そのときの男子生徒の顔は、とても無邪気な笑顔だった。

男子生徒の笑顔に毒気を抜かれてしまった彼らは、ただ呆然と首を縦に振っていた。

それを見て男子生徒は、先ほどまで泣きそうだった女生徒に「糊と鋏を貸してくれ」と頼み嬉々として作業に取り掛かる。

女生徒は男子生徒に言われるがままに、彼が必要と言う道具を鋏と糊以外にも色々と集めて彼に渡す。だが彼女にはそれがくす玉の修理に必要なものだとは思えない。

思い切って男子生徒に聞いてみても「後のお楽しみ」と言って、教えてはくれなかった。

くす玉を壊してしまった負い目があったため、それ以上は聞くことはできなかったし、なにより彼女は先ほどから男子生徒の手の動きに驚いていた。

千切れてしまった紐は、紐と紐を複雑な結び方でつなぎ合わせ玉を開くときにゴツゴツとスムーズに開かなかった不具合を直してしまった。

他にも、彼は紙で作った動物の紙細工をどんどん入れていたりして、彼は楽しそうにくす玉を直していた。

最後には、くす玉の中に料理が置いてあるテーブルから菓子を紙でくるんで入れていった。

気がつけば、くす玉は壊れる前の状態に戻っていた。

「…すごい」

女生徒は呆然と、くす玉をみるがそこには先ほどよりも煌びやかに飾り付けをされたくす玉が置いてあった。

「いやゝ楽しかった！」

振り向けば、男子生徒が笑顔で直したくす玉を見ている。

その様子を見ていた周りの生徒は、くす玉が今まで以上に派手に飾りつけのされて直った事に驚き、くす玉と二人に群がる。

「うおっ！俺達で作った奴より豪華になってる」

「すごいな。よく短時間でこれをなおしたな」

「…つか、これ見たあとで前の奴を思い出すとすごい複雑」

「確かに、壊れる前より壊れたほうが出来がいいのは結構傷つくな」

くす玉を見る生徒達の評価は上々で、後は天井に吊り下げるため

に紐を引っ張るだけだ。

女生徒は今度こそ失敗しないようにくす玉のほうに向かおうとするが、それを直してくれた男子生徒が止める。

「ちょっと俺にやらしてくれる？」

くす玉をひっぱって吊り上げる作業が面白そうなのでやらせて欲しいらしい。女生徒は直してくれた御礼にその役を譲った。

男子生徒は楽しそうに他の生徒と一緒にくす玉を天井に吊り上げる。

「完成だ!!」

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」」

そして、完璧にセッティングが終わると大声で完成の合図を告げると部屋の中から生徒達の声が響く。

新入生が来るまであと数十分。

後は、ただ新入生が来るまでただ待っていればいい。

生徒達はほっと胸をなでおろすが、先ほどの女生徒がさっきの「男子生徒」がいないことに気がつく。

「あれ？」

さっきまで周りの生徒とハイタッチをしてはしゃいでいた筈なのだが、見当たらない。

（お礼まだ言っていない！）

近くにいた生徒に慌てて聞くと「トイレ行ってくる」と言って部屋からでていってしまったそうだ。

仕方ないと思い、女生徒は部屋の入り口の近くで彼を待つが、彼は結局最後まで帰ってこなかった。

結果的に言うと、歓迎会は大成功だった。

部屋の真ん中に置いたくす玉は、新入生達のだ真ん中で開き彼らは舞い落ちる紙吹雪や落ちてくる焼き菓子の包まれた袋を手にとつてはしゃいだ。

たまに悲鳴があがるのは「彼」がいたずらで入れたこんにやくが誰かの背中や頭に当たったからだろう。

新入生はこのいたずらに腹を抱えて笑って、その後も歓迎会を大いに楽しんだ。

男子生徒（後書き）

感想待っています。

クラブ

学院では新入生の入学式が終わると、その日から学院では「ある行事」が行われる。

まず、学院には「クラブ活動」というものがある。

スポーツや創作活動をするのを、学院が推奨していて、学生達が健やかな学園生活をすごせるように学院側が予算を出して彼らの活動を支援している。

これには理由があり、クラブ活動を通して競争意識をもって欲しいという意図と生徒達の才能を様々な活動をさせることで開花させようという意図がある。

その「クラブ活動」だが、学院には様々なクラブがあり、年に一度行われる学院祭でどのクラスも「出し物」をするわけだが、そこで高評価を受けたクラブは予算を優遇されるのだ。

そのために、学院では新入生が入学した次の日は想像を絶する勧誘合戦が行われる。

「その君！！いい体してるね！だったら是非わが体術部へ！！」

「初心者でも大歓迎です！私達と一緒に園芸をしてみませんか！？」

「おいしいお菓子はいかがですか！今、体験入部でケーキを作っています。もちろん作ったケーキは持ち帰って結構です！」

「あなたの若い感性で筆を取ってみる気はありませんか！美術部はあなたを待っています！！」

どこのクラブもあの手この手で新入生を確保しようと必死だ。

そして、そんなクラブの中で中庭に一際目立つクラブがあった。

そのクラブの生徒は、全員が防具をつけて木製の模擬剣をもっている。

また、彼らの背中には張り紙がしており墨でこう書かれている。

「剣術部。ただいま新入生歓迎中！」

「模擬戦闘を見たい方は是非中庭に！！」

「女性でも歓迎！自分の身は自分で守りましょう！！」

彼らはこの学院でもかなり大きなクラブの部員で、毎年新入生の勧誘では「ある事」をするので大変目立つ。

その勧誘では、部員が体のあちこちに風船をつけて、それを新入生が剣で割るといったものだ。

もちろん、部員も剣を持つが絶対に防御ししないと条件でやるために腕に覚えのある新入生が山ほど参加する。

そして、部員の体についた風船を割った人間には賞品があり、割った数により豪華さが段違いとなっている。

ちなみに、時間制限として五分ほどで砂が落ちる砂時計が設置されている。

毎年この行事は参加者が列をなして並ぶのだが今年は少しだけ違った。

「なぜ私だけ相手がいない？」

そういつて首を傾げるのは、女性としては長身の髪を後ろでしばった赤い髪の凛々しい少女だった。

そんな少女が目の中の体格の良い男子生徒に向かって文句を言うが、それを聞いた男子生徒がため息混じりに女生徒に

「お前さっき自分が何したか忘れたのか？」

「忘れた」

「相手の男子生徒に向かって金的蹴りかましてよくそんな台詞が言えるなっ！」

「あれはあいつが悪い。あの新入生がふざけて私の胸を触ろうとしたのでお灸をすえてやっただけだ」

「その泡をふいて倒れた奴をみて、新入生が怯えてお前とやりたがらないんだよ。少しは反省しろ」

「…だが私だけ相手がいないと暇だ」

「だったら自分で相手を引っ張ってくればいいだろ。あの惨状をまだ見てない奴なら参加の可能性があるぞ」

その台詞を聞いた少女は人垣の中をじーっと見つめる。

ほとんどの男子生徒が怯えて顔をそらす中、ある男子生徒がこちらをきょとんと見ていることに気がつく。

「その君。ちょっとこちらに來たまえ」

それを見た少女はその男子生徒を指差してこちらに來るように指図する。

指を指された男子生徒はキョロキョロと周りを見渡すが、指を指されたのが自分だと気がつく。と女生徒のほうにノコノコと近づく。

それを見ていたほかの生徒の中からは、同情の声が上がる。

「ん？」

それに首を傾げる男子生徒を見て赤髪の少女は笑みを浮かべた。

「ルールはわかるな。時間内に私の体についた三つの風船を割れば、あそこにある商品がもらえる。武器はそこにある好きなものを使え」

そういつて少女が木箱に入った長さの違う模擬剣を指指す。

男子生徒は何だか妙なことになった、と思いながらも言われたとおりガチャガチャとちょうどいいものを選ぶ、そして良さそうなものを手に取る。

「決めました」

「ん。では始めるか」

「でもいいんですか？俺入部する気なんて全くないですよ」

「気にするなこんなのただの客寄せだ」

「…客寄せ」

「それに私だけ相手がいないのは退屈だ」

「…退屈」

「そんな顔をしないで君も楽しみたまえ。風船をすべて割ることができるぞ？」

「へー、例えばどんなものが？」

「皮製のポーチやそこそこ使える鉄板入りのブーツなどまあ色々だな」

「おー、意外と豪華」

男子生徒の好反応な様子に少女が今度は賞品の並ぶ棚の上においてある物を指差す。

「そして今回はなんとだな！顧問の教師が高価なミスリルの原石を風船をすべて割ることのできた者への賞品として「なぜか」くださったのだ！」

それを聞いた男子生徒の反応は劇的だった。

男子生徒は目を輝かせて少女に「すぐ始めましょう！」とものすごい勢いで少女を急かす。

腕を引かれるようにして、男子生徒と一緒に中庭の一角へと急ぐ。

白いチョークで線の引かれたコートの中で二人が向かい合って対峙する。

それを見た周りのギャラリィが騒ぐ。

「では始めるか」

二人の間には、審判役の生徒が来て用意はいいかと聞いてくる。

「俺はいつでも大丈夫です」

「いつでも」

それに二人が答える。

「では両者構えて」

審判の号令で、両者が構える。

少女が模擬剣を、中段に真っ直ぐと構える。

その姿は長年剣を持っていた人間の、完成された「形」があった。

対して、男子生徒は

「なんだあれ？」

「なんかの冗談か？」

ギャラリィの中から、ざわめきが聞こえる。

それは男子生徒の構えが理由だ。

男子生徒の構えには、審判の生徒も少女も驚いた。

男子生徒は、剣をまるで「担ぐ」ように構えていた。

剣を持つ手の「握り」の部分が、ほぼ後頭部のほうにあり、剣術を多少知っている人間からしたら常識はずれもいいところだろう。

だが、やっている本人の顔は真剣で、これが悪ふざけや冗談ではないことがわかる。

審判は少女がなにかアイコンタクトをとる。

おそらく怪我しないように手加減しろ、とでも目で合図したのだ

ろう。

『コクン』

それにうなずく少女を見て、審判が手を高く上げ、

「では始め!!」

振り下ろした。

瞬間。

『ドッゴーーーーン!!』

とんでもない音が中庭に響く。

審判もギャラリイも驚いて爆音の原因を見る。

原因は男子生徒だ。

男子生徒が開始の合図とともに、少女に接近して上段から恐ろしい速度で剣を振ったのだ。

少女は避けることはできたのだが、避けたことによって目標を失った男子生徒の剣は石畳を叩き割った。

まるで爆発のような一撃だった。

だが、それをした男子生徒は石畳に当たった拍子に壊れてしまっ

た模擬剣を見て審判に向かい、

「タイム」

と言って、模擬剣のたくさん入った木箱に向かい中から剣を取り出していった。

先ず、腰のベルトで左右で四本の剣を差し、最後に左右に一本ずつ剣を握る。

その様子を周りの人間は無言で見っていた。

「お待ちせしました」

そして、コートの中に戻り、審判に頭を下げて試合の再開を頼む。

「そ、それでは再開!!」

審判の焦った声で試合は再開される。

男子生徒は、また剣を「担いで」構えるが今度は両手の手で二本の剣を握っている。

その様子をギャラリーは息をのんで見つめる。

もう誰も彼を笑うものはいなかった。

じりじりと、今度はゆっくり少女との間合いをつめていく。

そして、コートのライン限界まで来たところで

ダンッ！！

男子生徒は左足を踏み込み剣を振りかぶる。

ドゴツ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ン
!!

しかし、それを避ける少女。

だが、飛んできた石畳の破片で風船の一つが割れてしまう。

男子生徒は、壊れた模擬剣を後ろに放り捨て、また二本の剣を両手で握る。

風船はまだ一つしか割れていない。

残り時間は、まだ後二分も残っている。

「…あと「つ」

男子生徒はそうつぶやき、それを聞いた少女は背筋を凍らせる。

「∴しやれにならん」

すでに、少女は手加減するなど考えてはいない、ただどうやってこの死地を抜け出すかを考えていた。

考えている間に、また間合いをつめてくる男子生徒。

まるで悪魔のようだった、と少女は後に語る。

「うーん？」

しかし、そんな少女の考えとは裏腹に、男子生徒はのんきにゲームを楽しんでいた。

彼はなかなか風船が割れない事と、地面が意外に「柔らかい」ことに疑問を抱いていた。

彼はもう時間が残っていないことであせり、三度目の攻撃は剣の間合いを計り間違えてまた地面を殴ってしまった。

幸いにも、また破片で風船が割れたが偶然は三度も続かない、と彼は悩んだ。

「あつ、そっか。なんか違和感があるとおもったらそういうことか！」

だが、突然彼が叫ぶ。

彼は残りの二本の剣を束ねるが、今度は片手を柄を握ってもう一方の手で剣の真ん中を握る。

「よし！いつもどおりだ」

そして、彼はまた剣を「担ぐ」。

残り時間はもう一分もない。

だが、勝負は次の一撃で決まる。

相手の少女もギャラリーも、それがわかり緊迫した空気が漂う。

しかし、そんな空気などお構いなしに彼は力強く足を踏み込み、

「ふんっ!!」

今までで一番速く剣を振った。

『ドガンッ!!』

爆音が響き、その際に巻き起こった土煙が晴れた後、男子生徒の手には柄だけになった剣があり。

少女がその横で無傷で立っていた。

胸には無傷の風船。

どうやら、最後の一撃は少女には届かなかったようだ。

そして男子生徒は、手に持った剣と少女の割れていない風船を見て、がっくりと肩を落として剣を放ってどこかに歩いていく。

その姿をほとんどの人間が呆然としていたが、今まで戦っていた少女だけが我にかえり彼に声をかけた。

「き、君、名前はなんていうんだ！」

「ん？」

男子生徒はその声に振り返る。

そして、赤錆色の瞳に無邪気な笑顔を浮かべ、

「トールだ。トールⅡグラノア」

名を名乗り、どこかに消えた。

クラブ（後書き）

長いですかね？

もうすこし短く投稿したほうがよかったら感想で意見を書いてくださるとうれしいです。

本当に感想お待ちしています。

噂

入学式の終わった次の日からは、新入生は授業のガイダンスや健康診断が始まり、二年生以上の学年の生徒達は新学期の授業が始まる。

これには三年生以上の生徒は不満をこぼすのだが、一年と二年だけは別だった。

一年生は、これから始まる学院での生活に期待を膨らませる。

二年生は、それぞれ自分の選んだ「学科」の授業を受けたくてうずうずしてる。

例年通りだと、いまごろ一年生は自分の所属するクラスで、これからともに過ごす級友たちと親交を深め、二年生は去年の終わりに決めた、自分がこれから所属する「学科」について期待と不安を隠せずにいるはずだ。

しかし、今年は若干雰囲気が違う。

二年のあるクラスではある噂話で持ちきりだった。

その噂話とは「二年に編入してくる謎の男子生徒」についてだった。

通常学院では、必ずどの学部 of 生徒でも一般教養を一年学んでから、二年に進級するはずなのだが、その「謎の男子生徒」は何故か一年生を飛ばして二年生に編入するらしい。

そして、今日からこのクラスで一緒に授業を学ぶらしい。

そのことを朝のH Rで^{ホームルーム}クラスの担当教師から言われて、クラスの生徒達は騒然となった。

だが、クラスの生徒達がざわめく中でマイペースに談笑しているグループがいる。

「それで部員は何人ぐらい入りそう？」

気の弱そうな黒髪の女生徒が赤髪の女生徒に話しかけている。

「多分五、六十人ぐらい入るだろうが残るのはその五分の一ぐらいじゃないか？」

頬杖をつきながら赤髪の少女は答える。

「つーかお前らよくこの騒ぎのなかでそんな暢気な話ができるな」

それに、浅黒い肌をした男子生徒がため息をついて二人の女生徒をみる。

「私にはあまり関係ないしな」

「…私も噂とかあんまり」

「俺は女は噂好きだと今まで思っていたが、お前ら見て少し考えが変わった」

そんな雑談を、周りで騒いでるクラスメートを無視して三人は続けた。

三人ともこの学院で一年の頃から一緒のクラスのくされ縁三人グループだ。

長いストレートの黒髪が特徴のおとなしい感じのする女生徒は、ニアⅡシュリオン。一般学科の学生で二年では美術学科を選択した。

赤髪のポニーテールの少女は、サリアⅡフージリア。

彼女は、武術学部 of 生徒で選択学科は剣術学科だ。

そして、浅黒い肌の男子生徒はディースⅡダリオン。

サイアと同じ武術学部の生徒だが彼は弓術学科を選択した。

性格も性別も違う三人だが、なぜか気があい大抵三人で固まることが多い。

そんな三人は「噂の男子生徒」にはあまり興味がないのか、のんびりと雑談を続けている。

教師の話では「噂の男子生徒」は少し遅れてくるらしく、それまで「噂の男子生徒」について色々と憶測が飛び交う。

それを聞いていたサリアが、ふと思いついたようにニアに話をふる。

「なあ、ニアは下級生や同級生の知り合いは多いか？」

それにニアが頭に疑問符を浮かべながら答える。

「うーん。同級生ならそこそこ知り合いはいるけど下級生はちょっと…。でもどうしてそんなこと聞くの？」

ニアの疑問にサリアが顔を上げて腕を組み答える。

「うむ。実はな昨日の新生勧誘の模擬戦でとんでもない奴がいてな」

「とんでもない人？」

「ああ。私はあんなでたらめな人間を初めて見た」

「…でたらめ」

「ニアもあの現場にいれば多分同じ事を思ったはずだぞ」

「おいおい。一体そいつは何をしたんだサリア？」

二人の話をそれまで聞いていたディースが、話しに参加する。どうやら「噂の男子生徒」より面白い話だと思ったようだ。

「ふむ。実はな私はそいつと模擬戦をしたんだが…」

「ちょっと待て。それってあの風船つけてするアレか？」

「そうだ」

「今年はサリアもアレに参加することになったのか」

「ああ。部長に「女性部員確保の為」と言われて強制参加させられた」

「それはご苦労様」

「サリア女の子に人気あるからね」

苦笑いのデイスと笑顔のニアを見て、話がどうにもずれそうだと思ったサリアは一度咳払いをする。

そして、サリアは話を再開する。

「私は模擬戦で私と戦った男子生徒を探しているんだ」

「へー、めずらしいなサリアが人探しか」

「「アレ」を見て奴に興味を持たない人間がいたら私が見てみたいよ」

「おいおい。そいつは本当に何したんだよ？」

「私もすごい興味がある。だってめったに人に興味を持たないサリアがこんなに興味を持つなんて」

サリアは二人の真剣な顔を見て、ゆっくりと話し始めた。

「私が相手をした男子生徒は木刀で」

昨日、サリアが見た冗談だと思ったあのふざけた光景を。

「石畳を「ぶっ飛ばし」たんだ」

「信じられねえな。そいつは本当に人間か？　つーかそんな奴とやってよく無傷だったな」

「ホント怪我がなくてよかったよ」

「全くだ。下手をすれば今頃私は病院のベッドの上だ」

話を聞き終わった二人は、まず驚きそしてサリアが無傷だったことを喜ぶ。

だが、突然ディースがサリアに疑問をぶつけた。

「それでそいつの特徴は？」

「ん？」

「いやだから特徴」

「人を探しているんだろ？ だったら特徴を言えよ。俺もそいつに興味がわいた。一緒に探してやる」

「それは助かるな。それで特徴だが実は名前を…」

サリアが何かを告げる前にニアが机から身を乗り出す。

「あっ！ ちょっと待って私も人を探しててできればその人も一緒に探してくれる？」

「ニアもか？」

「うん。ちょっと助けてもらった人がいて、お礼が言いたい」

「ふーん。まあいいや。ついでに探しておくよ。じゃあ二人ともそいつらの特徴を言えよ。」

ディースがポケットから手帳を取り出してメモを取る準備を始める。

だが、二人はどちらが先に話の人物の特徴を話すか譲り合いが始まる。

「では、ニアから話せ」

「いいよ私は後で、サリアが先にいいなよ」

「いや、ニアが」

「サリアが」

「…お前らホントに仲良しだな」

『ガラッ』

二人が譲り合いをしてディースが呆れていると、教室のドアが開いて男子生徒が教室に入ってくる。

それを見た教室にいた生徒達は、彼が「噂の男子生徒」だと気がつき隣の生徒と囁きあう。

担当教師がそんな生徒達の様子を見て、教卓を手でバシバシ叩いて静かにさせる。

そして、静かになった教室の中で男子生徒について説明する。

名前はトールⅡグラノア。

一般学部の生徒だが学科はまだ決まっておらず、しばらくは色々な学科を体験授業するというのであるべく助けてやるようにと担任教師から説明を受ける。

担当教師が男子生徒についてまだ説明をしている間、サリアとニアは男子生徒を見て驚いていた。

「あいつは」「あの人…」

つぶやくような二人の声を聞いたディースはまさかと思いながら

「アレがもしかしてお前らの探し人？」と聞く。

それにうなずく二人を見て、啞然とするデイス。

話の当人は、マイペースに教室の天井や教卓の机をキョロキョロ眺めていた。

噂（後書き）

感想をたくさんいただきありがとうございます。

これからも頑張ります。

授業開始。

俺は、初めて学校と言うものに通ったが、想像以上に面倒なことが多いことがわかった。

先ず、俺は二年からの編入なので学科が決まっていなかった。

学部の方は俺には魔術の才能はないし、剣術に関しては剣を作るのが専門で剣を振って戦うのは専門外だった。

なので消去法で一般学部に決まったまで良かったのだが、学科を決めることで問題が起きた。

「何故か」俺の所属する学科を決めることで教師達が言い争いを始め、教師達が自分の担当する教科が如何に素晴らしいのかを説明してきた。（そのせいでHRに遅れた。）

結局、教師達の話し合いの末に俺は一週間ほど色々な学科の授業を見学してその中で「これだ!」と思った学科を選択することになった。

正直「俺に選択権は?」と言いたかったが、目の前のエキサイトした教師達には何を言っても無駄そうだったので俺は彼らの話し合いが終わって職員室を出て行くまで完全に無言を通した。

そして、俺がこれから一年間は世話になるクラスでは担任教師が俺の紹介をしている。

教師の口から俺の紹介が終わり、最後に俺がクラスの面々に軽く挨拶をする。

「トールⅡグラノアです。辺境の町から出てきた田舎者ですがどうかよろしくお願いします」

ぺこりと軽く頭を下げてからゆっくり顔を上げると、こちらを凝視してくるクラスメートの視線が突き刺さる。

それに怯える俺。

（何この空気？明らかに警戒されてるけど）

その緊迫した空気の中で、担任教師に「空いてる席に着け」と言われてしまう。

この空気の中で、俺は誰かの席の隣に座るほど肝が据わってはいない。

なので、なるべく人の視線がこない様に窓際の後ろの席に座ろうと教室の机と机の間を人の視線を気にしながら歩いていく。

（俺なんかしたか？）

「おい、そこの新顔！」

俺が頭に疑問符を浮かべながら歩いていると突然窓際のほうから

男子生徒が声をかけてきた。

窓際を見ると浅黒い肌の男子生徒が手を振って「こっち、こっち！」と俺を呼んでいる。

先ほどのこともあり、俺は声をかけられたことがうれしくて少し早足で彼の元に行く。

「おっ！来たな。とりあえずここに座れ」

そういつて彼は自分の机の隣の席をバシバシ叩く。

彼のいわれるがままに、彼の隣に座る。

「まず自己紹介だ。俺の名前はディースⅡダリオンだ。呼ぶときはディースでいい。これから一年は一緒にクラスな訳だからよろしくな！」

そういつて彼は右手をこちらに差し出して握手を求めてくる。

俺はそれに「よろしくディース。」といい右手を差し出す。

どうやら悪い奴じゃなさそうで安心した。

そして、彼と握手をすると彼の手に大きな胼胝たぐがあることに気がつく。

俺はもしかしてと思い、「武術学部の人？」と聞いてみる。

ディースと名乗った男子生徒は、俺とつないだ手をじっと凝視し

ていたが、俺が声をかけると驚いて顔を上げた。

「お、おう。そうだ！お前の言うとおり武術学部だ」

「やっぱり！すごい胼胝ができてるからそうだと思ったんだ。武器は何を使うんだ？」

「弓矢だ。今年からは弓術学科に通うことになったから最近その練習のしすぎで胼胝ができちゃった。」

「へー、すごいな」

「いやいや。お前の胼胝もすごいぞ」

「ん？」

「俺も今まで結構すごい胼胝を見てきた事があるが、正直お前のを触った後だと大したことないと思っちゃった」

「大げさだな」

「大げさじゃねえよ。どんなことしたらそんな手になるんだ？」

「ガキの頃から金槌振ってたら、いつの間にかこんな手になった」

「金槌？」

「ああ」

そうやって頭に？マークをつけたデイスに俺ははにかみながら

こう言った。

「俺は「鍛冶師」なんだ」

その後、俺とデイスはそのままHRの時間が終わるまで雑談を続けていた。

授業開始――

一限目

学院では、授業は自分の受けたい物を選択するためにクラスの全員が同じ授業になることはない。

それでも、クラスがあるのは学生達に共同生活と仲間意識を強く持つてもらいたいという学院側の意思だ。

ところで、ツールはまだ自分の受けたい授業がほとんど決まっていない。

進級に絶対必要な必修の課目だけは受けられるように担任に受講

申請を提出したが、それ以外の授業はどんな授業なのかすら科目名を見ても、トールにはわからなかった為はまだ申請はしていない。

さらにトールはまだ学科すら決まっていなかった。そのことにトールは焦りを感じていた。

そんな彼を助けてくれたのが、ディースとその友人の「二人の少女」だった。

一限が始まった時から席を立とうとしない彼を見て、「どうかしたのか？」とディースが聞くとは「まだ受講申請をしてない」と言っただけを驚かせた。

それを聞いた彼が二人の少女を呼んできて彼女たちのどちらかの授業について行けと言われた。

なぜディースではなくこの二人なのか聞くと赤髪の少女のほうが「こいつは去年落とした授業の再履修だからだ」と答えてくれた。

そしてディースは「そういうことだから」と手を振ってトールを置いていってしまった。

残されたトールはお世話になる赤髪の少女と黒髪の少女に軽く自己紹介をした。

次に二人の内のどちらの授業に参加するかトールが迷っているとサリアと言う赤髪の少女のほうがトールの腕を取って「ついて来い」と言い、トールはどこかに連れて行かれた。

トールが連れて行かれたのは、大きな建物の室内で、そこでトール百人近い生徒が剣や槍を持って動いていた。

「なにこれ？」

「剣術学科と槍術学科の合同授業だ」

「ごめん。帰ります」

「待て」

逃げようとしたら、サリアにすごい力で肩を掴まれたトール。

トールは肩からの激痛に耐えながら、相手を説得する。

「いや、無理だからね？俺、武術とか初心者だから絶対怪我する」

「面白い冗談だな。昨日は私を殺しかけたくせに」

「ハハッ」と目が座って表情を全く動かさずに笑い声を上げるサリア。

はつきり言ってトールすごく怖かった。

なにやた彼女を怒らせてしまったようだが、トールに覚えがない。

そして、そのことが彼女をさらに怒らせてしまったようだ。

彼女はどこからか防具と木刀を持ってきて、トールに投げた。

「さ、サリアさん？　なんだか怒っているようですが、俺には身に覚えがなくてですね…。多分俺達の間には何か誤解が」

トールはとにかく彼女を宥めようと、必死の説得を試みるが彼女は聞いてはくれない。

彼女はものすごいドスの聞いた声で

「…問答」

いつの間にか剣を構えて

「無用っ！！」

トールに向かっていった。

トールはその日の合同授業は、ずっと彼女の剣を受け続けた。

ちなみに、教師はトール達のことを無視していた。

サリアの形相を見て、痴情のもつれとでも思ったのかもしれない。

もしくは、面倒ごとだと思って普通に無視したのか。

とにかく、トールは授業の最後までボロボロになるまでサリアにしごかれた。

最後に、サリアがトールに向かって「借りは返した」と言ってい

たが、トールには何のことかさっぱりわからず授業の終了の鐘と一緒に倒れた。

ちなみに、二限目の授業はサリアが「サボってはいけない」と言
ってトールのことを足を掴んで引きずっていき、ニアとデイスに
まるで絞めた鶏でも渡すようにして足を持って手渡した。

授業開始。（後書き）

とりえず授業開始。

鍛冶はまだ少し先です。

早く書きたいと思っていてもなかなか書けないでいます。

申し訳ありません。

二限目

あれから俺は、ディースとニアに支えられるようにして二限目の授業に出席した。

ちなみに、体に深刻なダメージを負っていた俺は二限目はニアが受講している「美術」という平和そうな響きの授業を体験することにした。

ディースは俺のことを「美術室」まで運んでくれた後、自分の授業に遅れないように走ってどこかに行ってしまった。彼はこの時間違う授業を取っていたようだ。

「…体が痛い」

「だ、大丈夫？ トール君？」

俺が机に上半身を寝そべるようにして言った言葉に、ニアが優しく声をかけてくれる。

その優しい言葉に、俺は思わずつぶやいた

「…やばい。泣きそう」

「ええっ！！ そんなに痛いの！」

俺の言葉をニアは木剣で殴られたところが痛むと勘違いしたようだが、違うのだ。

痛んだ心に優しい言葉がほんの少し沁みただけだ。

俺が一眼目のダメージから回復する頃には、担当教師が教室に入ってきて今学期の授業の日程について教師が黒板に書いて説明していく。

教師の説明によると春の間は外に出て草花のデッサンをして、夏休みに入るまでの授業はずっと油絵を描いていくそうだ。

そして、説明が終わると教師が生徒達に画用紙を一枚一枚渡していき全員にいきわたると教師は声を張り上げた。

「とりあえず、皆さんがどれだけ描けるのかを見たいと思います。モデルは何でもいいので授業終了まで何か描いて下さい」

教師の言葉に生徒達はそれぞれ外に出たり、隣の生徒に声をかけてモデルになってくれと声をかけたり、スムーズに行動する。

「何か皆行動がはやすぎない？」

ほかの生徒の様子に疑問を持ち、隣のニアに聞いてみる。

「それは多分みんな去年の内に「美術基礎」を取ってたからだと思う」

「何それ？」

ニアに聞くと言葉の中に聞いたことのない単語が出て来た。

「えっとね、一年の内からもう自分がどの学科に進むか決めてる人たちの為に専門的な事の基礎だけでも教えてくれる授業があるの。美術科だったら美術基礎っていう風に」

俺はニアの言葉に驚く。どうやらこの授業はすでに自分の将来を決めた人間が受講するものだったようだ。

「つまり、ここにいる人の殆どが去年それを取ってるから絵を描くのは楽勝だど？」

「…えっと、楽勝かどうかはわからないけど。多分それなりに描ける人が集まってるはずだよ」

「……ニアも？」

「…うん」

まさかと思い聞くと、案の定ニアも自分の将来をすでに決めてる人間だった。

これには正直困った。

俺はこの授業をまだ受講申請していないので、絵を描く必要はない。

だが、周りの人間が作業をしているのに自分一人が何もしていないのは心苦しい。

そんな俺のことをニアがおどおどと見ている。

「ニア？俺のことは気にしないで描きたいものがあったら描きに行きなよ」

そんなニアの様子が見えていて可哀想なので一応気を利かせてみた。

「あっ、でも…それだと」

「俺のことは気にしないで」

俺はニアの言葉を遮った。そうしないと、いつまでもニアが描けない気がしたのでなるべく強い調子で声を出した。

「うん。…わかった」

「うん。いつてらっしやい」

なんとか納得してくれたようでニアは画用紙と鉛筆を持って、教室から出て行く。

俺はそれを手を振って見届ける。

絵を描く気もしくなくて机の上に寝そべると、まだ前の授業のダメージがまだ残っていたのか机に体を預けると、途端に眠くなってしまった。

（…ねむい。課題は…もういいや。…とりあえず寝よ。）

俺はそのまま目を閉じた。

目を開けると、教室から出て行っただけの生徒が帰ってきて、教師の言葉を聞いている。

どうやら俺はかなりの時間寝ていたようだ。

教師のほうを見ると、教師はなにやら一枚の紙を手に取り、それに描かれている絵を褒めているようだ。

俺はまだ寝ぼけている目をこすって、どんな絵なのかを見ようと目を凝らす。

「ん？」

教師の手にある絵をじーっと凝視していると、違和感を覚える。

そして、そんな俺の事を周りにいた生徒がくすくす笑っている。

「ん？」

俺は頭に疑問符を浮かべる。

生徒の笑い声に気がついた教師が、喋るのをやめてこちらを見る。

「おお、モデルが目を覚ましたか！ 残念だなもう少しこの絵の素晴らしい出来を褒めたかったのだが」

そういつて教師は、名残惜しそうに絵を俺の隣に座る生徒に渡す。

隣を見るとニアが恥ずかしそうに絵を受け取っていた。

「ニアⅡシュリオン、この調子で頑張るように。ただし、今度はモデルには先に許可を取っておけよ？」

「は、はい。すみません」

俺はもうわけがわからなくて、教師とニアとの間で顔を交互に見た。

教師は明らかに俺のことをモデルと言っていたが、俺には身に覚えがない。

「あー、ニアⅡシュリオン。モデルが混乱気味な様なので教えてやりなさい」

「ご、ごめんね。ツール君」

俺がまだ混乱しているとニアは頭を下げて両手に持った絵を、俺に差し出してきた。

俺は絵を受け取って見て、やっとすべて納得した。

ニアが差し出した絵。そこには、気持ちよさそうに寝ている俺の絵が描かれていたのだった。

二 限目（後書き）

今回はニア、次はデイスです。

トールまでもう少し時間が掛かりそうです

なるべく早めに書けるよう頑張ります

三限目

三限目

今日の午前中の授業は、これで最後となる。

後は昼食をとりそれから午後の授業を二つ受ければ帰りだ。

三限目はディースの受ける授業に参加してみたい、と言うとニアが「だったら、二年の弓場ゆみばの方にいるかも」とアドバイスをくれた。

俺はニアと一度別れた後、なれない校舎をぐるぐる回って何人かの生徒に道を聞きながら弓場に着くと、見たことのある浅黒い肌をした生徒を見つけたので声をかける。

「お〜い！ディース！」

「おっ！ツールか！この時間は「弓術」の見学か？」

「そうそう。サリアとニアの受ける授業にはもう参加したから今度はディースが受ける授業に参加してみようと思って。」

「なるほどな。校舎の施設の場所とかもう大体わかったか？」

「それなら大丈夫」

ディースの言葉に俺は頷く。午前中の間にあれだけ引きずられたり迷ったりしたので道は大体わかった。

「だったら午後からは自分の興味のある授業を探しに色々なところを見てみるのはどうだ？」

俺が頷いたのを見て、ディースがそんな提案をしてくる。

確かに、このまま一時間ほどある授業をずっと見学していたのは効率が悪い。

「そうだね。そのほうが面白そうだし」

だから俺はディースの提案にのることにした。

それにいい加減、この学院の「あの」授業がどんなものなのか早く知りたかった。

「弓術」の授業はすでに始まっていたらしく、ディースは弓場のスペースが空くのを待っていた。

その暇そうなところを俺が声をかけたというわけだ。

弓場のほうを見ると、弓場にはいくつも鶏の卵ほどの丸い玉が置かれていてそれを生徒達が自分の持っている弓矢で玉を狙っている。

だが、ほとんど矢は的にかすりもしない。

「あんな小さな的当てられるものなのか？」

隣にいる欠伸をかみ殺しているディースに聞いてみる。

「ん？ あゝ、まあ無理だろ。つーかあれは殆ど遊びみたいなものだよ」

「遊び？」

「そう、別に当てる必要はないんだよ。今日はただの授業説明と少し生徒に弓を引かせてやるのが目的だから」

本格的な授業が始まる前のちよつとした息抜き、ディースはそういって腕を伸ばして欠伸をする。

初めから授業が堅苦しく始まってしまうと、生徒達はやる気を徐々になくしていく。それを多少でもなくすために最初は緩めの授業をする。

「なるほどな」

これが話に聞く「飴と鞭」かとツールは感心する。

「おっ！ 空いたな」

ツールが一人感心していると、ディースがさっきまでだるそうにしていたのが嘘のようにさっさと空いた場所に弓を持って走って行ってしまう。

「…まあ弓矢なんて殆ど触ったことないから見てるしかないんだけど」

置いてけぼりを食らってしまい、しかたないのでトールはおとなしく見学することにした。

だが、トールはディースの弓の腕前がどのくらいなのか興味があったので、彼のことを見ることにした。

今、ディースは真剣な顔で弓を構えている。すでに何度かの玉を外しているがそれも本当に惜しいところで外している。

それを見て、ディースの腕が他の生徒達に比べると大分上だということがトールにはわかった。

ビュンッ

ディースのはなった弓が的めがけて飛んでいく。

そして、そのまま的を射抜くかと思ったが矢は的から数センチ離れたところに刺さる。

ディースは次の矢を弓に番えようとしたが、木筒に矢がもうないことに気がつく。

それを悔しそうな顔で見た後、他の生徒に譲るためにスペースを空ける。

「お疲れ様」

「おう」

トールはディースにねぎらいの言葉をかける。

ディースは笑いながらそれに答えて、トールの隣に座る。

「惜しかったね」

「そうか？ 的にかすつてもないぞ」

「それでも他の人たちより命中精度が段違いだったよ」

慰めでもない本当に思ったことをトールは謙遜するディースに言った。

「ま、まあ子供の頃から獵師の真似事をしてきたからな！」

トールの言葉に少し照れたのか、ディース頬を掻いて笑う。

そしてそのまま、トールとディースはずっと授業が終わるまで話し続けた。

三限目（後書き）

さあ次は主人公活躍する話を書こう。

でも正直言うと鍛冶するところをしっかりかける自信ない。

なのである程度はファンタジーだと思ってくれるとうれしいです。

昼休み（前書き）

今回は少し短いです。

昼休み

三限目が終わり、俺とディースは一度自分たちの教室に戻りサリアとニアと合流した。

そして、今俺達は学院の食堂にいる。

四人で学院の食堂で昼食を食べながら親睦を深めようということになったからだ。

親睦を深めるということで、俺は趣味や好きなものなど色々と聞かれた。

それが終わると、今度は全員が何でこの学院に来たのかを順番に説明していくこととなった。

先ず、ディース

「俺は昔から弓が好きだったからそのまま獵師でもよかったんだけど、家族や村の連中から「もったいないからやめろ！」と言われて今学院にいる。将来は軍の弓兵团に所属希望だ」

次に、サリア

「家が貴族なので、箔をつけるために入学させられた。だが、卒業したら結婚させられそうなので、卒業後はすぐに軍に入る予定だ。できることなら近衛隊に入隊したい」

そして、ニア

「絵が描きたくて。私の家はそんなにお金持ちじゃないから、絵を描くのにお金のかからない学院に入学しました」

最後は俺、

「変なおっさんが来て、育ての親に行って来いと言われて入学した。将来の目標はあるけど色々と学ぶためにここに来た」

俺がこの学院に来た理由を話すと、俺の説明が変だったのか三人が何かいいたそうにしていた。

四人の座る席に微妙な空気が流れるが、俺はそれを無視する。俺は三人に聞きたいことがあったのだ

「この学院の「鍛冶」の授業はどこでやるんだ？」

「あー多分校舎の西にある建物だな、そういやお前「鍛冶師」なんだっけ？」

俺の質問に、ディースがあっさりと答えてくれた。そして、今度はディースが思い出したように俺に聞いてくる。

「「鍛冶師?」?」

そして、サリアとニアは「鍛冶師」という言葉に驚いたように俺の方を「どういうこと?」といった顔で見えてくる。

俺は簡単に故郷の町で鍛冶師として、色々と仕事をしていたことを教える。

その話に、なぜか三人は納得したような顔で頷いていた。

俺はなぜ三人が納得したのかわからないが、鍛冶の授業がどこでやるのかわかったので良しとする。

昼休みが終わると、俺は三人と別れて校舎の西にある建物を探す。

「ここだな」

目の前には二階建てほどの建物がある。中からはカンカンと高い金属を叩く音がしているのでココで間違いはないだろう。

その音を懐かしいと思いながら、俺は建物の中に入っていく。

（さてと、学院の鍛冶の技術がどんな物かしっかりと見させてもらうか）

昼休み（後書き）

誤字脱字報告と感想待ってます。

鍛冶の話はもうちょっとだけ待ってください。色々と案を考えているんですがなかなか決まらないんです。

嵐の予感

俺が建物の中に入ると、真っ赤に熱した金属を金槌で叩く生徒やドロドロになった金属を鋳型に流し込む生徒の姿が見える。

俺がその姿をもう少し近くで見ようと、足を進めた瞬間。

数人の上級生らしき生徒が後ろからいきなり俺の肩を掴んで「お前がツールⅡグラノアだな？」と聞いてきた。

俺が振り返り「そうだけど。あんた達誰？」と答えると上級生は俺の肩を掴んだまま、俺の疑問には答えず建物の奥に連れていった。

俺が奥に連れて行かれると、そこには一人の男が手に一本の剣を持っていた。

男は俺とは違い光沢のある金髪で青い瞳のいかにも「貴族」らしい男だった。

「そいつが「例の二年生」か？」

「はい。話に聞く特徴と一致しますし、本人が認めました」

俺を連れてきた上級生の一人が、剣を持った男と何かを確認するように話し始める。

どうやら剣を持つ男も上級生のようだが、俺を連れてきた奴よりも立場は上のように敬語を使われている。

俺はだんだんとよくない予感がしてきた。

「おい貴様」

そんなことを思っていると、剣を持った男が俺を見下ろすようにして話しかけてきた。

「貴様がツールⅡグラノアか？」

「そうですけど」

「ふん。どんな奴かと思えば…」

「？」

男はなんだか拍子抜けしたように俺を見た後、いきなり剣を鞘から抜いて俺の目と鼻の先に突き出すように見せ付けてきた。

「見てみる。そして何か言え」

剣を突き出したまま、男は俺を見下ろして命令する。

とりあえず、俺は言われたまま剣を見てみる。

剣は、鞘や柄などに細かい細工や宝石が散りばめられた豪華なものだった。

俺はそれを細かいところまで、じっくりと見る。

「……………」

その様子をどう思ったのか、男は「ふん。言葉もないか!」と言って得意顔だ。

だが、俺は男の言葉など聞こえていなかった。

ただ衝撃を受けていた。

俺は、肩を掴まれたまま一言つぶやいた。

「…ひどい」

「「は?」」

俺の言葉に、俺を掴んでいた上級生も剣をまだ突き出したままの男も、俺の言葉に間の抜けた声を出す。

俺はそれに気づかず、思ったことを次々と言ってしまふ。

「なんだこれは?　なんだコレ?　なんで剣をこんなに宝石や細工でいっぱいにするんだ?　これだとまるで女の子の持つ宝石箱みたいじゃないか。それに剣もひどい。こんな鑄造で作った剣に最高級の玉鋼使ってる!　なんてもったいない!　今すぐ剣は溶かして宝石や細工は剥ぎ取って売れ!」

俺は目の前の剣を持った男が実は王都でも有名な鍛冶師の息子で、俺が散々にこき下ろした剣がその息子の作った作品だとはこの時は思いもしなかった。

「んで、お前はそのままぼこられそうになった所を教師に助けられて、鍛冶の授業は受けられず教室に帰ってきたわけか」

「まっ、そういうこと」

俺が教室に帰ってきて鍛冶の授業で起きたことをディースに話すとディースに呆れられてしまった。

今は五限の授業の最中なのだが俺はなんだか授業を受ける気が起きなくて五限はサボることにした。ディースはそんな俺に付き合っ
て同じくサボった。

「つーか、なんであいつは俺に自分の剣を見せたんだろ？」

「多分、昼に話したお前が鍛冶師だと言う話に尾ひれがついて上級生に伝わったんだろ。それでそれを聞いた上級生がちょっとへこましてやろうとも思ってた……」

「いや、でも噂が早すぎないか？」

昼休みにその話をして授業に行くまでの時間など間は三十分もなかったはずだ。

「お前は自分が思ってるより有名人なんだよ」

異例の二年生からの新入生。

「話題の人間の情報ってのはみんな知りたがるものなんだよ」

「…そんなもんか？」

「そんなもんだ」

俺はディースの言葉にとりあえず納得する。

だが俺の悩みはまだ解決はしていない。

「これからどうすっかなあ」

「ん？」

「いやだって、このままだと俺は鍛冶の授業に参加できない」

「ああそれなら大丈夫だ。すぐ解決する」

「…なんで」

俺が悩み事を話すとディースは俺の悩みは直ぐ解決すると言う。

俺はそれに疑惑の目でディースを見るがディースは笑いながら「放課後になればわかる」と言って教えてくれない。

放課後――

授業が全て終わり放課後になると生徒達が教室からどんどん出ていく。

「なあまだか？」

「まあもう少し待てって」

俺は、デイスに言われた通り放課後まで教室に残っている。

だが、いい加減に何もせずに座っているのも飽きてきた。

欠伸をかみ殺しながら言われたまま待っていると「そいつ」は来た。

「そいつ」は学院の生徒が着る指定の白い制服とは違い、黒い制服を着ていた。

「そいつ」は俺の名前を呼ぶと、手に持っていた封筒を破って中に入った紙を取り出して抑揚のない声で読み上げる。

「トールⅡグラノア。四学年一般学部武器鍛冶学科所属クードⅡフオセスが貴殿に決闘を申し込む。日時は明日。勝負方法は両者が作った剣の出来で決める」

黒い制服の「そいつ」はそれだけ言うと、教室を出て行ってしまった。

俺がぼけーっとしていると、隣にいたデイスが俺の肩を叩く。

「なっ解決したろ？」

「何アレ？」

意味がわからなくて、先ほどのことをディースにたずねる。

「決闘の申し込みだ」

「決闘？」

ディースの話を纏めると、この学院では問題があると問題のあった人同士で決闘をすることが出来る。

日時や方法は生徒会が決めて両者が争う。

敗者は勝者に揉め事を起こしたことを謝り、二度と同じ事で決闘することはしないと誓う。

「つまりはさっきの黒いのは生徒会の人だったわけか」

「そうだ。多分お前に突っかった上級生が生徒会の人間に決闘の使者を頼んだんだろ」

「へー」

「決闘で負けた奴は勝った奴に二度と文句なんて言えないから、これに勝てば鍛冶の授業に参加したってもうあの上級生に文句は言われないぞ」

その言葉に、まさかと思う。

「…もしかして「すぐ解決する」ってこれのこと？」

俺の疑問にディースは笑顔で頷く。

対して俺は面倒なことになった、と教室の天井を仰いだ。

嵐の予感（後書き）

誤字脱字の報告、感想を待っています。

次は主人公鍛冶するところ書きます。

ちょっと超展開っぽいけど許してください。

文才が本当に欲しい…

若干訂正しました。刀剣鍛冶学科を武具鍛冶学科に変更しました。

誇り

「そもそも決闘ってというのは学院側が作った制度で、生徒達があまりに問題を起こしすぎるって言うんで作ったんだ。『そんなに暴れたいのなら暴れる場所を作ってやる。ただしルールには従え』って感じでな」

「ずいぶんと荒っぽいな。ところでそのルールって何だ？」

「さっきも話したが、決闘者同士が戦う勝負の方法だ。これは生徒会の人間が決める。決闘者同士は生徒会の決めた勝負方法に従って勝負をする。勝負方法は両者に公平なように生徒会の人間がそれらのプロフィールなんかを見て決める。」

「今回は相手も俺も鍛冶に覚えがある者同士だから『鍛えた剣の出来で決める』なんて事になったわけか。」

「そういう事。」

「決闘を拒否するとか出来ないのか？」

「出来るが、ただし学院に在籍中は『決闘から逃げた臆病者』と言われ続けるぞ。」

「…それは男として嫌だな。」

「まあ明日頑張って勝て。」

俺は学院寮の自室で学校の帰り道の途中で、デイスに決闘につ

いて聞いたことを思い出す。

そして、わかったことは決闘からは逃げられないという事だった。

俺は憂鬱な気分のまま、決闘当日を迎えることになった。

決闘当日

俺は、昨日鍛冶の授業を受けようとした建物の中にいる。そして建物の前には授業が一段にもかわらず決闘を見ようとするギャラリーが大勢いた。

さらに、俺の隣には昨日見た金髪の男がこちらを敵意満載で睨んでいる。

朝のHRが終わると、黒服の生徒がいきなり教室に入ってきて、そして俺は黒服の生徒にここまで連れてこられてしまった。

俺がげんなりしていると、黒い制服を着た生徒会の人間が喉に指に当てて何かぼそぼそ呟く。

おそらくギャラリーにも聞こえるように魔術で声を大きくしているのだろう。

そして、何度か咳払いをしてから生徒会の人間が喋り始める。

『えー、これより二学年一般学部ツールⅡグラノアと四学年一般学

部武具鍛冶学科所属クードⅡフォセスの決闘を始めます。両者にはこちらで用意した材料を使い剣を作ってもらいます。勝負は両名がつくった剣の出来によって決まります。』

そういつて布をかぶせた箱を指差す。

そこに剣を作るために必要な材料や道具が一式が用意されているようだ。

『それでは両者質問はありますか？』

「ない。」

「ありません。」

生徒会の人の質問に、俺とクードという上級生が同時に答える。

『わかりました。それでは両者鍛冶を開始してください。』

そして、決闘は開始された。

「おい。貴様」

「……。」

開始の合図がされてから、俺とクードは生徒会の人間が持ってきて

た箱から素材を選んでいた。

俺が色々と素材を手にとって見てみると、隣から声をかけられた。

「…なんですか先輩？」

「貴様は私に勝てると思っているのか？」

「…どういう意味ですか？」

言葉の意味がわからなくて彼に聞き返す。

クードは俺のことを見下したようにしてフンと鼻を鳴らして自慢げに喋り始める。

「決まっている！ どこの誰ともわからない馬の骨が、王都でも有数の高級武具店の跡取り息子である俺に鍛冶の技術で勝てるわけがない！」

「そうですか。」

俺は彼の話を聞き流しながら、次の素材を見ていく。

そして、彼はさらに大きな声で俺に向かって喋り続ける。

「そもそもだ。ほんの少しだけ鍛冶の腕に覚えがある程度でちやほやされていい気になっている貴様に私が負けるはずがないのだ！ だいたい――」

「……………」

俺は彼の言葉にだんだんと腹が立ってきたが、まだ我慢できる程度だった。

彼がその後に、続けて言った言葉を聞かなければ、「まだ」我慢できた。

彼の次に言った言葉を聞いた瞬間。

トールは、自分の体の血が沸騰するのを感じた。

「田舎で学んだ鍛冶の技術など、お前の髪と瞳のように錆びてくすんでいて役に立つはずがない！」

死んだ両親からもらった、髪と瞳。

俺を育ててくれた養父に学んだ鍛冶の技術。

それら全てを侮辱された。

「……………」

俺は素材を手を持ったまま、怒りで体が動かなくなった。

それを見ていたギャラリーは、様子が少しおかしいことに気がつき始めるが、喋り続けるクードは気がつかない。

だから、クードはさらに俺に向かって暴言を吐く。

「どうせ鍛冶などろくでもない親方に教わったのだろう？ 酒びたりの――」

「口を閉じろ。クソ野郎」

クードの暴言は俺が言った一言によって、それ以上続けられることはなかった。

「なっ！」

クードは先ほどまで殆ど無反応だった俺が喋ったことと、その口から出た言葉に驚く。

「き、貴様！ 私を誰だと――」

「うるさい」

「お前はさっき俺の鍛冶の技術を虚仮にしたな？」

俺はクードの言葉を再び遮る。クードがそんな俺のことを睨むが、俺の雰囲気は先ほどと違うことにそこで初めて気がつく。

「だったら見せてやる。」

――そこにいたのは、どこか気の弱そうな男子学生などではなく、

「お前が虚仮にした。俺が学んだ鍛冶の技術を。」

一人の職人だった。

俺は呆然とするクードをおいて、建物の中に入る。

まず、炉に火を入れる。

炉の燃料は燃石だ。

これは燃焼時の発熱量が高いので、鍛冶にはなくてはならない。

燃炭石が十分に熱を持ったら、次に材料である「鉄」と「鋼」を炉に入れる。

そして、真っ赤になったら二つを取り出す。

取り出した金属二つに、ホウ砂や鉄粉などを混ぜた鍛接剤を振りかける。

鍛接剤が熱で溶けたら、ハンマーで二つを叩く。

鍛接剤が接着剤のような役割を果たしてくれるので、これで鉄と鋼は接合した。

普通の剣を鍛造で作るのだったら。材料は一つで十分だ。

だが、俺の作る剣は「普通」ではない。

接合して倍近くの長さになった金属の塊を、ハンマーで薄く延ばすため叩いていく。

金属を伸ばしたら、今度は伸ばした金属を折り返す。

そして、また伸ばしては折り返す。

これを何度も何度も繰り返して、最後には剣の形にしていく。

すでに額からは汗が滝のように噴出している。

腕は鉛のように重い。

しかし、休むわけにはいかない。

ここで休んだら剣は、なまくらになる。

そして、何より

俺は俺の「誇り」を侮辱された。

勇敢な両親からもらった「髪」と「瞳」

命の恩人である養父から学んだ「技術」

俺は、彼らの名誉を守らなければならない。

「守る剣」を作るために学院に来た俺は

今、学院で「誇り」を守る剣を作っている。

ガツンッ

ハンマーを持つ手に力が入り目の前で火花が飛ぶ。

剣の鍛錬が終わり、先ほどまでの金属の塊は今では殆ど剣の形をしている。

後はヤスリ等で剣を荒く形成して、次に仕上げとして砥石などで形を徐々に綺麗にしていくだけだ。

幸い、ここには魔力で動く研ぎ機がある。

手で行うよりも数倍早く研ぐことの出来る優れたものなので、ツールはそれを使って剣を研ぐ。

仕上げの作業をツールは、一人でもくもくと続ける。

仕上げ作業が終わると、 Toolの手には一本の剣が出来上がった。

Toolは最後に何かの液体を刀身に振り掛けた後布でふき取り、今度は水に浸してもう一度布で水気をふき取る。

そして、目を細めて刀身に映る「模様」を見つめる。

「…完成だ。」

その「模様」を見つめた後ツールは出来上がった剣を手にとって建物の外に出る。

外はすでに夕方で見ると、すでに鍛冶の終わっていたクードと生徒会の人間が椅子に座って俺のことを待っていた。

俺の姿を見た生徒会の人間は、こちらにやってきて「完成しましたか？」と聞いてきたので俺は布を巻いた剣で指で差す。

「わかりました。ではこれよりどちらの剣が優秀なのか試し切りな
どを行ない勝敗を決めます。剣の製造者はそのままお待ちください。
い。」

「わかった。」

俺は地面の上にじかに座って用意が出来るのを待つ。

誇り（後書き）

やばい疲れた。

剣の性能は明日で。

でも励ましの言葉があれば頑張って深夜に書き上げるかもしれない。

あと感想を読んで剣って一日で出来ないと始めて知った。

殆ど漫画で見た知識しかないのがここで浮き彫りになりました。

今後気をつけるので許してください。

勝敗

「えー、長らくお待たせしました。準備のほうが整いましたので剣の製作者の方はこちらに来てください。」

その言葉に俺とクードが生徒会の人所に、剣を持って歩いている。

周りには、多くのギャラリーが勝負の行方を見ようと集まっている。

俺とクードが剣をもって生徒会の人の前まで行くと、生徒会の人が魔術で声を拡大してギャラリーにも聞こえるよう話し始める。

「これより決闘の勝敗を決めるために両者の剣で試し切りを行います！と思っています！」

生徒会の人ギャラリーに向かってそう宣言すると、ギャラリーからは歓声上がる。

「それでは製作者は試し切りをする剣士をギャラリーの中から選んでください。」

俺は生徒会の人間の言葉に驚いた。

何しろ試し切りも自分がやるものだと思っていたのだ。

だが、驚いていたのは俺だけでクードはあっさりギャラリーの中から巨漢の男子学生を選ぶ。

それを見てクードはこうなることがわかっていてギャラリーの中にサクラを紛れ込ませていたのだと理解した。

おそらく生徒会の中にクードの息のかかった人間がいるのだろう。

俺は剣を握る指が白くなるほど剣を握り締めた。

この上さらに勝負まで汚された。

そのことが、俺をさらに怒らせる。

「おい！ トール！」

俺が激怒しているとギャラリーの中から、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

声のほうを向くと、ディースとニアとサリアの三人が何かをいいたような顔でこちらを見ていた。

俺はそんな三人のところに剣を持って歩いていくと、突然サリアが俺の肩を掴んだ。

「トール。それがお前の作った剣か？」

サリアの目は布で包んだままの俺の剣を見つめる。

俺はサリアの言葉に頷いて剣に巻いた布を取る。

布を取るとそこにあったのは、ぱっと見れば普通のロングソード

だ。

だが、目を凝らしてみれば普通のロングソードにはないものがそこにはあった。

「模様」だ。

剣の刀身に、模様が浮かんでいるのだ。

まるで切り株に浮かぶ「木目」の様な模様が、剣の刀身にはつきりと浮かんでいる。

「…美しい剣だな。」

俺の作った剣を見て、サリアは感動したように呟いた。

だが、次の瞬間サリアは表情を引き締きしめてこう言った。

「私にお前の剣を使わせてくれ。」

正直言えば、俺は迷った。サリアがどれほどの剣士なのか知らなかったし、彼女がこの剣の「特性」を扱いきれかわからなかったからだ。

だが、俺は彼女の瞳に宿る強い感情をみた時には、剣をサリアに渡して彼女に向かって頭を下げていた。

「頼んだ。」

俺の言葉に彼女は真剣な顔で「任せろ」と頷く。

試し切りの為に俺は彼女にこの剣の説明をしていくと、説明を聞いていたサリアは徐々に呆然としていった。

そして、彼女は俺にこう尋ねた。

「…一体この剣は何なのだ？ 私はこのような剣は聞いたことがない。」

俺はその疑問に、剣に浮かんだ模様を見ながら答える

「錆びることがなく、鉄を斬っても刃こぼれを起こさない、独特のしなりを持った剣。名前は」

養父から教わった鍛冶技術で作った、剣の名前を。

「ダマスカス刀」

そして、試し切りは始まる。

「では、両者が選んだ剣士はこちらに来てください。」

生徒会の人間がそう言って、サリアと巨漢の男を呼ぶ。

「両者の剣士にはこちらで用意した木材や石材を切っていただきませう。」

今度は台車によって木材や石材が運ばれてくるが俺はそれを見て、もしかしたら細工がしてあるのではないかと疑う。

だが、それは杞憂で終わる。

サリアが突然クードの剣を持つ巨漢の男に向かって、突然「剣を構えろ。」と言った。

巨漢の男はわけがわからなかったが、一応剣を両手に握り構えた。

サリアはそれを見て頷くと

全身のバネを使って、俺の剣で相手の剣に斬りつけた。

観客も巨漢の男も呆然として、その様子を見ていた。

ガランッ

巨漢の男の手から剣が落ちた。

だが、巨漢の手は剣の柄をしっかりと持っている。

先ほどの音はサリアが刀身を「斬り落とした」音だ。

「これで勝負は決まったな？」

啞然とする生徒会の人間に、斬りおとした相手の剣を指差して聞くサリア。

生徒会の人間はコクコクと何度も頷いた後、大声で叫んだ。

「勝者は見事相手の剣を斬りおとした剣を作ったトールルⅡグラノアに決まりましたっ!!」

生徒会の人間の声に、観客の声が爆発した。

勝敗（後書き）

短くてすみません。頑張ったけどここが限界のようです。続きはまた明日

ちなみにダマスカスでできたナイフは普通に錆びるそうです。

作中に出てきたのは「伝説の」ダマスカス刀の話です。

資格

「ふざけるなっ！」

歓声に沸く声の中でその怒声は響き、あたりはシンと静まる。

声の主はクードだ。彼は鬼の様な形相で俺に近づき、胸倉を掴む。

「貴様っ！さては魔術で剣を強化したなっ！この卑怯者がっ」

「……………」

俺の胸倉を掴んだクードは俺に唾を飛ばしながらそんな台詞を吐く。

「俺の作った剣は最高級の玉鋼を使っているんだぞ！それがあんな容易く斬れる筈がない！」

正直、俺はもう我慢の限界だった。

この思い上がりの餓鬼がこれ以上喋るのは、我慢が出来ない。

俺は胸倉を掴む相手と周りの観客にきこえるように、こう言った。

「あんたが作ったあの剣。铸造だろ？」

「「！？」」

目の前の男と周りの観客は俺の言った言葉に驚く。

「おかしいんだよ。ダマスカス刀は確かに鉄だろうと斬れるが、鍛造で作った剣をあんなにあっさりと斬れるわけがないんだよ。」

「そ、それは貴様が魔術でっ！」

クードは取り乱したようにわめき始めるが、俺はそれに冷静に答えてやる。

「剣の切れ味を強化する魔術なんて一般学部の俺に使えるわけがないだろ。」

それに、と俺は続ける。

「あんたは最高級の玉鋼を使ったと言ったけど、俺に用意された素材の中にそんな物はなかったぜ。これはどういうわけだ？」

クードは俺の言葉にしまったと顔をしかめる。どうやら怒りで我を忘れて不正をした証拠を自分から喋ってしまったのに気がついたようだ。

「どうやら卑怯者はあんたのほうみたいだな？だがおかしいな、それだけいい素材があったなら鍛造で作れば良質の剣が作れたはずだ。それをしなかったのは……」

俺はそこで言ってやる。

「もしかして…」

彼が鍛造で剣を作らなかった理由を

「!?!。 貴様やめろっ!?!」

クードが何かに感づき、俺の言葉を遮ろうと大声を出す、俺は無視する。

そして、観衆に聞こえるように言ってやった。

彼にとっては、とても残酷な言葉を。

「あんた、鍛造で剣を作れないな?」

俺の言った言葉にクードは泣きそうな顔で俺を睨んだ後、力尽きたように俺の足元に崩れ落ちた

鍛造の剣を作るには、通常は何年も鍛冶の師匠の下で製法を学び、修行を積まなければならない。

四学年のクードなら、すでに学院にいる教師から鍛造の技術を教わり、剣も作れるのだと俺は思っていた。

だが彼は最高級の素材を持ちながら、鍛造の剣を作らなかった。

その理由は間違いなく、彼は鍛造での剣を作れないからだ

辛い修行から逃げたのか、プライドが邪魔をして師匠から師事するのを放棄したからなのか理由はわからないが、とにかく彼には「鍛冶師」としては完全に半人前だ。

にも、かわらず。

「…あんたは自分が未熟な腕にもかかわらず俺だけではなく、俺に鍛冶を教えてくれた師匠まで馬鹿にしたのか」

俺は頭を抱えているクードを侮蔑の眼差しで見つめる。

「ひいっ」

自分を恐ろしいほど無表情に見下ろされ、クードは引きつった声を上げて距離をとる。

だが、虫のように逃げるクードを俺は制服を掴んで逃がさないようにする。

そのとき、クードの制服にある学院の校章と学科を示す紋章が見えた。

校章は本を啜えた梟。そして、クードが所属する武具鍛冶学科を示す「剣を叩く金槌」の紋章。

俺はその「剣を叩く金槌」をじっと見つめた後、クードの胸倉を

掴み片手でそのまま彼を持ち上げる。

クードは俺の腕から逃げようと、必死に腕を剥がそうとするが、腕はビクともしない。

俺はそんなクードを無視して、ダマスカス刀を持つサリアに向かって「剣を渡してくれ。」といった。

サリアは渡すかどうかしばらく迷ったが、俺の「殺すつもりはない。」という言葉聞き剣を渡した。

サリアから剣を受け取り、もがくクードに剣を向ける。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひい!!」

間違いない。殺される、クードはそう思って絶叫を上げる。

ビツ！！

だが、クードの想像した衝撃は来ず、代わりに何かを切り取った音が自分の制服の胸の辺りからした。

クードはおそろおそろそこを見ると、制服の一部が切り取られていた。

「^?」

よく見ると、そこにあったはずのクードの所属する学科を示す紋章がなくなっていた。

俺がダマスカス刀で紋章を切り取ったのだ。

足元を見れば、彼のつけていた紋章が落ちている。

ガッ！！

だが、その紋章の中心を俺の持つ剣が貫く。

「……あんたに、これを身に付ける資格はない」

俺は、ダマスカス刀で「剣を叩く金槌」の紋章を剣で二つに切り裂いた。

「あんたが鍛冶の道具を一つでも身につけていると思うと、反吐が出る。」

俺はクードを持ち上げていた手を放した。

咳き込むクードを殺気を込めて見つめ、

「次に俺の師と、両親から受け継いだこの髪と瞳を侮辱したら――」

腹の奥からどす黒い感情を引き出しながら、

「必ず殺す」

最終宣告をした。

資格（後書き）

誤字脱字の報告と感想を待っています。

あとお気に入り登録が100を超えました。

皆さんありがとうございます。

これからも頑張って書いていきます。

気晴らし

怯えるクードに最後の忠告を与えた後、トールはギャラリーの視線や生徒会の人間の制止を無視して、寮の自分の部屋に帰った。

部屋に帰ったトールは、手に持っていたダマスカス刀を机の上に置いてからベッドに横になった。

そのまま寝てしまおうと思ったが、夕食前のこの時間ではさすがに眠気はやって来ない。

そして、ただベッドに横になってボーっとしていると、どうしても今日のことを思いだしてしまう。

思い出すのは、クードとのやり取りや奴の台詞だ。

先ほどあれだけ脅したのに、まだ腹の虫は収まらない。

「…くそ、一発殴っとけば良かった。」

このままではイライラは収まりそうもない。

ガバッ

とりあえず、ベッドから起きる。

そして、何か気を紛らわせるものはないだろうかと部屋の中を物色する。

だが、まだこの寮にやってきたばかりのトールの荷物はそれほど多くはないので、それほど時間はかからずトールはソレを手取る。

「…やっぱりこれしかないか。」

トールが手に持っているのはかなり大きな道具箱だ。それは、トールが故郷を離れる際に養父のドワーフから持たされたものだった。

パカンッ

道具箱を開けると中には、金槌、木槌、彫刻刀、錐、ヤスリ、ブラシ、他にも様々な道具がみっしりと箱の中に入っている。また道具の中には素人では一体どう使うのかわからない物まである。

これはトールが故郷で、養父の仕事を手伝ったり自分で鍛冶をしていたときに使っていた道具だった。

養父が気を使って、トールの愛用の道具を全てまとめて入れてくれたのだろう。

「…ありがと、おっちゃん。」

養父の気遣いに先ほどまでの苛立ちを忘れて、故郷にいる心やさしいドワーフに礼を言った。

「これなら気晴らしに何か作れそうだ。」

トールは道具箱の中を確認してから、嬉しそうに笑った。

さすがに鍛冶は無理だが軽い彫刻なら素材さえあれば大丈夫そう
だ。

（落ちた木の枝とかなら寮の傍に落ちてそうだな。…探してみよ。）

トールは素材を探しに部屋から出て行く。

暫らくしてから、トールは手になかなか太い木の枝を持って戻っ
てきた。

だが、目的のものを見つけたにもかかわらず、トールの顔は暗い。

その理由は、

「…木の枝を掃除中の寮母さんからもらったのは良かったけど、何
に使うか聞かれて「できたらちようだい」と言われるとは思わなか
った」

トールが寮の外で落ちた木の枝を捜していると、掃除中の寮母さ
んがいたので木の枝が落ちていないか聞いてみた。

すると、「なぜそんな物を探しているの？」と聞かれてしまい、
トールが「木の枝を使って、彫刻細工でもしようと思った」と答え
ると寮母さんはにんまり笑ってトールに取引を持ちかけた。

内容は簡単で、「落ちた木の枝を渡す代わりに、その落ちた木の
枝で作った作品を自分に渡すこと。」と言ったものだった。

トールはその取引を受け、落ちた木の枝を寮母さんからもらった。

寮に帰るとき、寮母さんから満面の笑顔で「かわいいのお願いね
〜！〜！」と手を振って言われてしまい周りの男子寮生から殺気を
込められた目で見られた。

トールの住んでいる男子寮の寮母さんは、若くて美人なので寮生
達から大人気なのだ。なので、抜け駆けをすると後でとんでもない
目を見るらしい。トールが寮にやってきた初日に先輩の寮生から聞
いた情報だ。

トールはその視線から逃げるようにして、慌てて寮の自分の部屋
に戻った。

「まさか、ただの気晴らしのつもりがこんな事になるとは。」

そういつてトールは手に持った彫刻刀で表面の木の皮をとる。

そして、カリカリとゆっくりと木の枝を削っていく。

作るものはすでに頭の中で決まっている。あとは目の前の木の枝
を頭の中のものに近づけるだけだ。

トールはただもくもくと手を動かす。

故郷にいた頃は、町にいる子供や自分と同じ年ぐらいの女の子に
動物の置物などを何度も作ったことがあるのでその手先は慣れたも
のだった。

もくもくと削っていると時間の経つのも忘れていく。

そして、嫌なことも徐々に考えていなくなり、目の前のものにただ夢中になっていく。

トールの作業は深夜まで続いた。

翌朝――

「おい、寮母さん。」

「ん？なに？」

トールは学院に行く前に、寮の前で掃き掃除をしている寮母に声をかけた。

「はい、これ。」

そして、彼女の手になかを手渡した。

「え？」

「それ、約束のやつね」

寮母が手のひらを見ると、彼女の手には小さな木彫りの梟が乗っていた。

梟はリアルに彫られたものではなく、女性受けしそうな、かわいくて愛嬌のある梟だった。

寮母は手のひらにあるものと、目の前の少年を見て驚いた。

「こ、これ、君が作ったの？」

「そうだよ。」

寮母は目の前の少年がこのかわいらしい置物を作ったことに驚きを隠せなかった。

目の前の置物は殆どお店で売っているような物で、とても学生が作ったものだとは思えない。

だが作った当の本人は眠そうに欠伸をしている。

「んじゃ、俺学校行ってくる。」

トールは寮母の驚愕をよそにスタスタと学院に向かって歩き出してしまふ。

それを寮母は呆然と見送った。

気晴らし（後書き）

誤字脱字、感想を待っています。

今回は次の話につなげるために少し閑話っばいです。

後、一応こちらでも報告しておきますが、自分のもう一つの商品「E G G」はちょっと問題が起きて感想を受け付けなくなりました。詳しくは作者の活動報告を見てください。

「やさしい鍛冶師」のほうは問題なく感想を受け付けています。

研究室

「……………なんだコレ。」

俺は自分のクラスの教室で、黒板に書かれたものを見てそう呟いた。

黒板には様々な色のチョークで文字が書かれていた。

黒板に文字を書くことは別に不思議でもなんでもないが、その内容が問題だ。

黒板にはこんな事が書かれている、

「ツールⅡグラノアよ、よくやった!!」「二年の誇り!!」「ざまあ四年ざまあ」「完全勝利」「オッズ五倍の大穴!! お前に賭けて本当に良かった!」「懐が潤いました。」「よくぞかました。」「男の中の男」「お前ならやれると信じてた」「あの剣くれ」「私も欲しい」「ツール最高!!!」

こんな言葉が黒板いっぱいに書かれているのだ。

「本当になんだコレ?」

なにやら昨日の自分のことを書かれているようだが、だがここまで持ち上げられる理由が分からず黒板の前で呆然とする。

そして、それを見ていたクラスメートがツールに気がつき彼の元にやってくる。

「昨日の決闘見たぞ」「お前すげえな」「よくやった」「四年のあの先輩によく勝てたな」「かつこ良かった」「お前の御蔭で儲けた」

自分の周りに同級生が来て、肩やら背中を叩いて口々に褒める彼らにツールはわけが分からずされるがまだ。

「おいおい、昨日の英雄をそんなに乱暴にすんな。」

そんな彼を助けてくれたのはデイスだった。

彼はツールをに向かって「よう」と声をかけてから、彼の傍に来る。そしてこの騒ぎの説明をしてくれた。

「昨日決闘を見てた奴が結構いてな、それでこの騒ぎだ。まあ軽い戦勝気分だな。」

「…それにしたって騒ぎすぎじゃね?」

「上級生と下級生との決闘なんてめったにないからそのせいだ。」

「へー、そうなのか」

「決闘は大抵が同じ学年の生徒同士だからな。上級生と下級生が決闘なんてやった日には、まず間違いなく下級生が負ける。」

「なんで？」

「上級生のほうが学院にいた日数が長いから、学んだことが多い分有利だ。」

「…なるほど。」

例えば、武術部同士が決闘したら、長いこと修練を積んだ方が勝つということだろう。

ガラガラッ

トールがディースの言葉に納得していると教室のドアが開いてクラス担任がやってきた。

「あー、お前ら座れ座れ。これからH R始めるぞ。」

担任が教卓までやってきて、騒いでる生徒達を注意する。

教師からあんまりハメを外すなという小言と、そろそろ部活や委員会が本格的に始まるから所属している人間は頑張るようだという投げやりな激励をもらった。

教師が最後につけ加えるようにして

「ああ、あとそろそろ教師達が自分の「研究室」に人員を募集し始めるようだから、掲示板とかよく見て置くように。」

といってから教室から出て行った。

「研究室か」「掲示板見にいかないよ」「俺一年の後期で何個か単位落としたけど入れるかな」「さっそく薬学の先生に聞きにいかないと」「私は魔術学のところに」「人気の先生のところはすぐ締め切るらしいから早くしないと」

教師が出て行った後、生徒たちは隣の席の人間と先ほど教師の言っ

ていた「研究室」という物について話し合っていた。

（何の話だ？）

そんな彼らをトールは首を傾げて見ていた。

「「研究室」ってのは、教師が自分の専攻している学問を研究している部屋のことだ。教師は自分の研究ために人員を募集する訳だ。」

「ようするにパシリが欲しいのか。」

「いやいや、生徒側にもメリットがあるぞ。まず、自分の欲しい知識を「研究室」に入ることにより多く学ぶことができるし将来の役にも立つ。あと、教師の授業はそいつの「研究室」に入っていれば、

授業は受けなくても単位がもらえる。」

「両方にメリットがあるわけか。」

「そういうことだ。」

「へー」

「高名な学者なんかもこの学院には教師として在籍しているから、皆我先にと自分をアピールするためにレポートや研究成果を教師に見せたりなんかもする。」

「すげーな。そんなにいいものなのか研究室って」

「まあ、「上」を目指すんだったら入っておいて損はない。」

「…………「上」か。」

俺はディースに「研究室」について色々話を聞いていた。

そして、ディースとの話の中に出てきた「上」という言葉を聞いて考えた。

皆が研究室に入るのは、自分の将来のためだ。

俺にだって将来の目指すべき夢がある。

人を「守る剣」を作ること。

そのために俺は学院に来た。

だが、俺は昨日の決闘の時からあることを考えていた。

確かにこの学院の授業は高度なものだ。

しかし、昨日決闘をしたクードはその授業を何年も受けたにもかかわらずその鍛冶のレベルは低かった。

その理由は、この学院では鍛冶を教えることのできる教師が少なく、うまく技術を生徒に還元できていないからではないだろうか？

その予想が確かだったとしたら、俺が鍛冶を教えている教師の研究室に入ることの意味はないだろう。

なぜなら間違いなく俺のほうが鍛冶の腕が上だからだ。

これは自惚れでもなんでもなく、ただの事実だ。

この学院には「ドワーフ」はいないのだ。

「人間」しかない。

俺に鍛冶を教えることができるのは「ドワーフ」だけだ。

武器や装飾品を作ることに長けたあの種族でないと、俺に教えることは不可能なのだ。

教わる意味がなければ研究室に入っても意味がない。

自分の目標とする、「守る剣」を作れる日は遠い。

ならばどうするか？

実は一つだけ考えがあった。

ディースから「研究室」について話を聞いていた時からずっと思っていたことだ。

ディースに話によると「研究室」というのは実に便利なもので、研究室用に学院側が研究費用としていくらか費用を出してくれるのだ。そして、研究に役立つことは「研究室」同士が情報のやり取りをして、研究に役立てていく。

これは俺にとって実に最適な環境だった。

例えば、剣の材料の高価な鉱石が費用でタダで使えるし、他国の武器の情報などを他の学部の実験室から知ることだってできるだろう。魔術部に剣に魔術で何か付加してもらうのもいい。この他にもまだまだおいしい「特典」がありそうだ。

そこまで考えていると、隣にいたディースが俺のことを不思議そうに見ているのに気がついた。

俺はそんなディースに笑顔で声をかけた。

思いついたアイディアを聞いてもらうために

「なあ、デイス。」

「ん？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだがいいか？」

「まあ、俺に答えることができる範囲ならなんでもいいぞ。」

「それじゃ聞くけど」

「研究室」って生徒でも持てる？」

研究室（後書き）

誤字脱字、または感想を待っています。気軽にどうぞ

成果

俺の質問を聞いたデイスはしばらくポカンとした後、呆れた顔で「あのなあ」と言ってから説明を始めた。

説明の内容は「なぜ学生が研究室を持てないのか？」だ。

「まず学院を造ったこの国の王家は、学院に資金援助をする代わりに何らかの「成果」を要求してる。まあ「成果」ってのは育った「人材」や「発明」だな。」

「ここまでは理解できるな？」という顔でデイスが俺を見てきたので俺は頷く。

ここら辺の学院と王家との関係は、故郷から学院に来るまでの道中でダランさんから色々聞いていたのよく知っている。

あの人は軍人の癖に酒を飲むと酔ってべらべらとよく喋るのだ。

例えば学院を造った理由が、昔は教会の人間が国の重要な役職に就きすぎていて政治がしにくかったので、学院を造って教会の人間にも負けない優秀な人材を育てて、国の重役に就かせる為だったとか。

他にも過去の王家の話だとか他国の話を耳に胼胝ができるほど聞かされた。

「問題がないようだから続きを話すぞ。」

そんなことを思い出しているとディースが続きを話し始めようなので真面目に聞く。

「次に王家からは毎年かなりの額の金が学院に援助されている。学院はそれを止めて欲しくないから、「成果」を出すために、優秀な人材を集めて「研究室」で研究させる。そうすれば何らかの発明ができるだろうし、人材も育つ。ちなみに言うておくと学院は「成果」を出せる見込みのない「研究室」は躊躇なく潰すぞ。…厳しいかもしれないが、それだけ学院も真剣なんだ。…だからツール」

ディースがそこで話を説明を一旦止めて、真剣な顔で俺を見ながら。

「学院がただの学生に「研究室」をくれるわけがない。ましてや資金なんて寄こすわけがない。…だから諦めろ。」

と、俺に諦めるよう諭した。

だが、俺は諦めるつもりはない。

だから俺は。

「絶対に嫌だ。」

と、答えてやった。

放課後の食堂にて――

放課後、俺は三人を食堂に連れて行って、考えたアイディアを聞いてもらった。

学生が研究室を持ってない理由は学生には「成果」を出せる見込みが全くないと学院が思っているからだ。

ならば、「成果」を出してそれを認めさせれば、これからも研究して欲しいと研究室をくれるのではないか？

「実は金が欲しい学院と、教会と仲の悪い王家が欲しがる研究「成果」の当てがある。それは道具や資料が殆ど必要ない。まあ材料に関しては希少なんだけど、俺に当てがある。」

「……………」

俺の台詞に目の前にいるディース、サリア、ニアの三人は呆然とした。

「一体その「成果」とは何だ？」

最初にそう言ったのはサリアだった。

「この学院には国中から集められた専門家がいるんだ。その彼らを出し抜いて学院に認められる研究「成果」とはなんだ？」

彼女は真剣な顔で俺に聞く。

他の二人もジッと真剣な目で俺を見ている。

俺は真剣な顔をしている三人に「成果」について教える。

「ミスリルって金属は知ってるだろ？」

「あの高価な、聖なる金属とか言われてるミスリルか？」

「そうそれ」

「加工するにはかなり高い技術が必要で、ドワーフじゃないとまともな物ができないって言われているアレか？」

「そうそう、そのミスリルの強度を上げる方法と軽量化が「成果」だ。」

「「は？」」

三人は俺が言った言葉に驚いて顔を見合わせていた。だが俺はそれを無視して続ける。

「つまり、ミスリルの加工技術の向上が俺の考える研究「成果」だ。」

成果（後書き）

誤字、脱字の報告と感想をお待ちしています。

ミスリル

「まあ、そんなに難しい話でもないんだ。だって、今出回っているミスリル製の道具って殆どが人間が作った粗悪品だし。だからそれを上回るものを作れば……」

「ちょっと待て。」

俺がこれからミスリルの加工技術の向上の説明を始めようとしたところ。ディースとサリアから横槍が入った。

「ん？　どうかした？」

「いやいやいやいや！　お前今すごい事言っただろ！　何だ粗悪品で！」

ディースが身を乗りだすようにして俺の先ほど言った「粗悪品」といった言葉の意味を聞く。

サリアは口には出さないが目で「どういふことか説明しろ」と言っている。武術部でないニアはいまいちピンとこないのか首をかしげて俺達を見ている。

「あー、それか。まあ簡単に説明すると、ミスリルに色々と薬品を混ぜて作ったインゴットを加工して作ったのが、今出回ってるミスリル製の道具なんだ。これなら普通の人間でもミスリルの加工が出来る」

俺は三人になるべくわかりやすく、「人間の作る」ミスリル製の道具の作り方を教えた。

「それがなんで粗悪品なんだ？」

「さっきディースが言ってただろ？『ドワーフじゃないとまともな物ができない』って、つまりこの方法だと不純物が多いからその分だけ魔力の通りが悪くて耐久性も低い『まがい物』なんだ。純正のミスリル製のものと比べると明らかに粗悪品なんだよ」

「ああなるほど」

「ふむ」

ディースとサリアの二人が納得して、ニアが「へー、そうなんだ」と感心する。

三人が納得したので説明の続きを再開する。

「今、出回っている粗悪品を上回るものを作ることが出来れば、学院からは間違いなく「研究室」がもらえる。」

「なんでそこまで確信を持ってるんだ？」

「教会だよ」

「教会？」

「そっ。教会の人間は聖なる金属って言われるミスリルをよく身に着けてるんだけど、大抵は人間が作った粗悪品なわけ。教会は他種族の作ったものは絶対に身に付けられないから」

なんでも教会のお偉いさんが厳しく禁止しているらしい。理由は多分つまらないプライドだろうと俺は思っている。

「だから、人間が作るもので今までより品質がよければ教会は絶対欲しがる。」

「だがそれがどうした？別に教会が欲しがろうが意味ないだろう？」

今度はサリアが質問する。その質問に俺はニターっと笑った。

「いや、教会と仲の悪い王家はそうでもないだろ？　こんな教会に対して優位に立てそうな情報を見逃すはずがない。なにより教会から金を筆り取るチャンスだぞ？」

俺の言葉に三人は「あっ」と顔を見合わせる。

どうやら俺の考えがみんなわかったようだ。俺はそれに満足しながら三人にわざとらしく聞く。

「そんな王家に受けのいい、こんな研究成果を学院が無視するか？」

「確かにその研究成果は学院も認めるな。」

サリアは俺の考えに納得してくれた。残りの二人も首を縦に振って頷いている。

「だろ？」

「だが」

そこでサリアが俺のことを疑わしそうな目で見る。

「ん？」

「お前は本当に今までよりより質のいいミスリル製の道具が作れるのか？確かにお前の鍛冶の技術は大したものだが…」

彼女はどうかやら俺が本当に作れるのか疑問に思っているようだ。

なのでその疑いを晴らすために俺は力強く答えた。

「作れるよ。だって俺、普通に薬品なしでミスリル加工できるから。」

さらに、「つーかドワーフと同じものが作れる」って言ったら「はあ!？」と三人に驚かれた。

ドワーフはミスリルを加工するときは薬品など全く使わずに、ただのミスリルのインゴットから見事な剣や杖を作ることが出来る。

ドワーフの作るミスリルの剣は比べ物にならないほどの強度と切れ味を持ち、杖は魔術師の魔力の流れをスムーズにして、魔術の発動を素早くしさらに威力を向上させる。

さらにここからがミスリルという金属の特性の一つだが、ミスリルは持ち主の魔力に反応して「軽く」なる。

これは別に重さがなくなるわけではなく、ミスリルという金属が持ち主の魔力と同調することで、まるでミスリルが体の一部になったかのように重さを感じなくさせるのだ。

だが、ここまでミスリルの特性を発揮させるのは人間ではまず不可能。

せいぜい頑丈で魔力のよく通う道具が出来る程度で、同調も起きない。

ドワーフの並外れた鍛冶の技術があつてこそ、ミスリルはその特性を発揮する。

なのに、あろうことか人間のしかも十代そこそこの若造がドワーフと同じものが出来ると言った。

彼の名はトールIIグラノア

それがドワーフに育てられた、ドワーフの技術を身につけた人間の鍛冶師の名。

ミスリル（後書き）

すごい疲れました。特に設定を考えるのが

話はまだすこし続きます。

誤字の報告や感想を待っています。

材料

長い時間話していたので、外は真っ暗だった。

俺は、それを理由に「ミスリルの無薬品加工ができる」という話の追求をしてくる三人から逃げる事にした。

ドワーフの鍛冶技術は人間には不可能だというのが世の中の常識だ。それなのに、俺みたいな奴がドワーフと同じものが出来ると「聞いても」信じられるはずがない。

だから、「見て」信じてもらうことにした。

そして俺は寮に帰って、用意を始めた。

次の日の早朝、トールの右手には布を巻いた棒状の物があり、背中には大きな籠を背負っていた。

「まず材料がなければ話にならないからな」

そう言って、トールは朝早くに王都から出た。

王都から歩いてしばらく歩いたところには深い森がある。

トールはその森の中にズンズンと入っていく。

そして、森の一番奥まで入るとつぶやいた。

「…ここら辺なら『いそう』だな。」

トールは籠を置き、次に大きな声で叫んだ。

「土の精よ！！あなた達に用がある！！どうか現れて俺の話を聞いてくれ！！」

普段使うことの少ない敬語を使ってトールは何度も呼びかけた。

静かな森にトールの声がこだまする。

深い森の中で大きな声を出すことは大変危険で、下手をすればモンスターが現れる可能性だってある。

だが、トールはそんな事はお構いなしに大声で尚も叫んだ。

「俺の名前はトールグラノア！土の民であるドワーフに育てられた人の子だ！今日はあなた達と取引をするためにここに来た」

叫んだ後、今度はトールは目を閉じて耳をすませた。

すると、

「一体、何の用だ？人の子がワシ達に」「人間など追い返せ」「じゃが、ドワーフに育てられたと言ったぞ。」「同じ土の民が育てた者ならワシ達にとっては同胞じゃろう」「嘘かも知れんぞ？」「そうじゃそうじゃ」「人は平気で嘘を吐く」

小さな、しわがれた老人の声が複数聞こえた。「彼等」の姿は見えず声だけが聞こえる。

そして、「彼等」の声の大半はトールのことを疑っている。

「嘘ではないです！俺は確かにドワーフに育てられました！」

その声に、トールは必死に自分の言葉が嘘ではないと返した。

その言葉を聞いた「彼等」は

「証拠を見せてみろ」「そうだ証拠だ」「ドワーフに育てられたなら何か作ったものが在るだろう」「それを見せろ」

と言ってきた。

トールはその言葉を聞き、籠の中に入れてあった布に巻かれた棒状の物を取り出した。

トールは巻かれた布を取り、よく見えるよう頭上にかざした。

「これは俺が先日鍛えた剣です！養父から学んだ技術で作った剣です！これが俺がドワーフに育てられた証拠になるはずです。」

どうか御覧ください！」

布から出てきたのは先日、トールが決闘の時に鍛えたダマスカス刃だ。

その剣を見た「彼等」は

「おお！！」「ダマスカスじゃ！」「あの木目はまさしく！」「素晴らしい！」「アレを作るのはドワーフが得意だったはず」

「あの人の子の言葉は正しかった！」「うむ。間違いなくドワーフの子じゃ！」「ワシ達の同胞じゃ！」

そう言って、口々にトールのことを認めた。

そして、

「人の子よ、今までの非礼を詫びよう。お主は確かにドワーフの子じゃ。」

「彼等」は姿を現した。

トールはその姿を見て笑いながら言った。

「いいえ気にしないでください。『ノーム』の人嫌いはよく知っていますから。」

それを聞いた「彼等」はしわがれた声で楽しそうに笑った。

『ノーム』

土の精と呼ばれ、彼等が土の中によくもぐり鉱石や宝石を掘ることからそう呼ばれる。

ドワーフが鍛冶を得意なように彼等も鍛冶を得意とする。ただしドワーフが剣や鎧を得意なことに対して、ノームは指輪などの装飾品を作ることが得意だ。

彼等は老人のような小人の姿をしていて、主に鉱山の深くや森の奥

の土の中に住んでいる。

ノームは人嫌いで有名で、まず人間の前に姿を現すことはない。

土の民という言葉は、鉱山など土に馴染み深い種族の者達のことだ。ドワーフもそれに含まれる。

他にも、エルフやニンフなど森に馴染みのある種族は森の民と呼ばれる。

トールがノーム達に接触を試みたのは、ある取引をするためだ。

「この剣とミスリルの原石を交換してもらいたいです。」

トールは自分の膝ほどしか身長のない彼等の前で膝を突いて、頭を下げてそう頼んだ。

彼等は珍しい鉱石を土にもぐって手に入れる。その中にはミスリルの原石も含まれる。

トールは彼等のその習性を頼って、彼等取引を持ちかけたのだ。

「ミスリル？」 「なにか作りたいのか」 「いいのでないか？ 先ほどの非礼の詫びとしてくれてやれば」 「それに貴重なダマスカスの剣をもらえるそうだしのお」 「では、持ってこよう」 「どれくらい必要だ」 「こんな珍しい客は久しぶりなんじゃから、あるだけくれてやれ」 「そうだ。そうだ。」

正直ここまで来るまでの間、ノームが頼みを聞いてくれるかわからなかった。

しかし、トールの頼みごとはノーム達にとってそれほど大したことではなかったようで、あっさりと取引は成立した。

そして、ノーム達はどこからか銀色に輝く塊を次々に運んで来てくれた。銀の塊はミスリルの原石だ。

気がつけば持ってきた籠いっぱいミスリルの原石が手に入った。

「こんなにいっぱいもらっていいの？」

トールが籠を見て思わず敬語を忘れて、足元にいるノーム達に聞か、みんな口を揃えて「「気にするな」」という。

「…それじゃ、お言葉に甘えてもらっていきます。」

トールは頭を下げてから剣をノーム達に渡した後、籠を背負った。

そして、なごり惜しむノームと手を振って別れ、もと来た道に戻り王都に帰って行った。

ノームに渡した剣はおそらく彼等が細工をするときの道具にするために錆潰されるだろう。

せっかく鍛えた剣がなくなるのは寂しい気もするが、防護策もない今の状態では剣を盗まれる可能性もある。

俺の剣で誰かを傷つけられるかもしれない、それならば争いごとに関心のないノームに渡した方が何倍もいい。

そう考えてからトールは、今度は背中に背負った籠の中身を見た。

「んー、それにしても。これだけの量のミスリルは買えばいくらぐらいになるんだ？」

おそらく、王都に着けば門番や街の人間から驚かれることだろう。

なにせ背中に金貨を背負っているようなものだ。

「…まあ、どうだっていいか」

だが、ドワーフに育てられて鍛冶にしか興味のないトールには背中のミスリルの原石はただの「材料」に過ぎず売って儲けようなどとは考えていなかった。

材料（後書き）

誤字脱字の報告と感想を待っています。

今回すごい書くのが疲れました。変なところが在るかもしれません
がどうか笑って許してください。

次の話から主人公が本格的に研究室を手に入れるために動き出します

前兆（前書き）

タイトルが思いつきませんでした。

前兆

俺は先ず、ミスリルの原石を持って街にある製錬所に行き、ミスリルのインゴットを作ってもらったことにした。

もちろん薬品は入れない純粋なミスリルのインゴットだ。

だが、製錬には時間がかかるそうなので出来たら連絡をもらえるように寮の連絡先を教えた。

製鉄所の人に連絡先を教えた後、空になった籠を背負って寮に帰った。

寮に戻って借りていた籠を返してから朝食を食べて学院に向かった。

そして。

昼休みの食堂――

「材料が揃った」

今、見の前にはデイス、サリア、ニアの三人がいる。

その三人に材料を揃えた事を教えた。

「というわけで、これから俺が無薬品でのミスリル加工が出来ることを見せてやる」

俺は三人に向かってちよつと偉そうに胸を張ってそう言ったら、三人から予想外の言葉が帰ってきた。

「俺（私）達はツールなら出来ると思ってるから作らなくていいよ」

その言葉を聞いた俺は。

「へっ？」

と間拔けな声を出してしまった。

話をきくと、

三人は別に俺が今まで以上の質の良いミスリルを作れることを疑っていなかった。

サリアも本当は「こいつならやれそうだ」と思っていたようだが、でも確信が持てなくてあの様に聞いてしまったそうだ。

だが、まさか新しい薬品の調合や鍛錬方法ではなく、単純な鍛冶の技術で加工するとは思わなかったそうだ。

そのことに驚いていた三人を、俺は「信じてない」と誤解してしまった。

「あー、何かごめん。」

俺はバツが悪くなり三人に謝った。

「気にすんな。誤解されるような反応をした俺達が悪い」

「私もだ。お前の腕を疑うような真似をして済まない。」

「わ、私もごめんね？ ちょっと驚いちゃって…」

今度は三人が同時に謝る。

そして、お互いに顔を見合わせた。

するとなんだか恥ずかしくなってみんなで笑った。

「それにしてもツール。いつ研究成果を学院に提出するつもりだ？」

「あー、それなんだけど、まだ作「いったーーーー！！！」みんなこっちに居たわよ！！」

質問に答えようとしたら誰かに声を遮られた。

声のしたほうを見ると背の低い女生徒がこちらを指差しながら背
後の数人の女生徒に「早く来い！！」と手でジェスチャーをしてい
る。

「なんだアレ？」

俺は彼女がなぜこちらを指差しているのかわからず、誰かに聞こ

うとするとディースがテーブルに顔を突っ伏して腹を抱えて笑っているのが見えた。

「ディース？」

ガタッ

「……。」

そして今度はディースの隣にいたサリアが無言で席を立った。

その顔はなんだか苦虫をかんだような顔だった。

気がつけばサリアは背の低い女生徒がいる方向とは反対に走り出してしまった。

「あっ！！ 逃げた！！！！ 追いかける！！！！！！」

すると、それを追いかけるように女生徒達は去っていった。

「ん？」

俺はもう、何が何やら訳が分からなかった。

彼女達が走り去った後、笑い転げるディースは無視してニアに今の出来事を説明してもらった。

「あれはね、花祭りでサリアに馬に乗ってもらおうと頼んでるのよ」

「花祭り？」

「あっ、トール君は王都に来て日が浅いんだったね。えっとね、簡単に説明すると、花祭りって言うのは王都で有名な行事の一つで、国花の「アスメア」がこの季節に国中に咲き誇るからそれを祝福するお祭りなの。露天商や馬に引かれた山車^{だし}なんかも出てすごく盛り上がるんだよ。」

「それでサリアはその馬に乗るように頼まれてるのか？」

「そうなの。サリアは女子に人気があるから多分「騎馬」に乗って騎士の格好とかされるんじゃないかな？」

（騎馬かあサリアも大変だなー、…そういうえば故郷で^{あぶみ}鐙とか結構馬具とか作ってたな）

主に商人が乗る馬の鞍やハミだが頼まれて色々作った記憶がある。
瞬間俺の中にあるひらめきが生まれた。

「……………」

「トール君？どうしたのそんなに今の話面白かった？すごく楽しそうな顔をしてるけど…」

「ああ「すっごく」面白かった！　おかげで「いい事」思いついた」

二アの戸惑うような視線を感じながら頭では色々なことを考え始めていた。

そして、俺は下準備を始めるべく動き始めた。

前兆（後書き）

これからちよつと主人公動き始めます。

誤字や脱字の報告、感想をお待ちしています。

計画

一日目

まず、友人Sのファンの一人だと言う背の低い女子に声をかけた。
彼女はいきなり声をかけてきた俺のことを「なんだこいつ？」という目で見てきたが、俺の計画を聞くと手のひらを返したように態度を変えた。

二日目

「なあサリア。防具が欲しくない？」

「なんだいきなり？」

「実は今度研究成果としてミスリル製の防具を作るんだけど、それを着て学長『とか』に着た感想を言ってくれる人を探してるんだ」

「それはミスリル製の防具を装備した人間がどれほど防具の重さを

感じないのか言ってもらうためか？」

「そうそう。できれば見た目が華奢な人がいいんだ」

「それで女の私か…」

「協力してくれたら作った防具はサリアにあげてもいいよ」

「何!?!」

「防具の管理って大変だし欲しかったらサリアにあげる。」

「是非協力しよう!」

「じゃ、当日はよろしく」

「ああ! 私に出来ることなら『なんでも』しよう!?!」

三日目

「すみませーん。事務の人いますかー?」

「はいはい、なんの御用ですか?」

「実は来月にある『花祭り』の出し物に参加しようと思っていて、その了承を学院にもらいに来ました。」

「ああ有志でお祭りに参加するのね？それならここにサインをして頂戴。」

「はい」

「作業するのにどこかの部屋を使うならここにもサインして。」

「はい、これでいいですか」

「うん、それでいいわ。はいこれで放課後なら学院の工房を使ってもいいわよ」

「おお！」

「それじゃ頑張って祭りを盛り上げて頂戴。」

「はい！頑張ります！」

四日目

俺は学院の馬術部に向かって、計画の「主役」に会いに行った。

馬術部の部長さんに話を通して、計画当日だけ「彼」を貸してもらうことにした。

そして、部長さんに頼んで「彼」の使っていた道具の一部を借りて、最後に「彼」に挨拶して俺は馬術部を後にした。

五日目

「なあニア」

「なにサリア？」

「花祭りで馬に乗って街を練り歩くことになった。」

「えっ!？」

「実は最近、下級生の女子生徒から何度も『花祭頑張ってください!』と言われた。…最初は何のことを言っているのか全くわからなかったが」

「……。」

「今日、トールの奴が私の前にやって来て『花祭りで俺の作った鎧を学長”とか”に見せるからよろしく』と言われてやっとな理解した。つまり祭りのパレードで私のことを仮装させて馬に乗らせるつもりだ」

「……。」

「私が必死に『そんな見世物のようなのはしたくない』と言った

ら、『なんでも』するんだろ？』と言われて。…逃げ場がなくな
った」

「…………。」

「なあニア私はどうすればいい？」

「…サリア」

「なんだニア」

「…応援してるね」

「…ああ」

計画（後書き）

本当、文才が欲しいと思う。

次はツールが防具を作る話を書く予定です。

誤字脱字の報告、または感想を待っています。

感想を書いてくれると作者はすごく喜びます。

関係ないけど、この前交番の前を原付で二人乗りした親子が通り過ぎるのをおまわりさんが素通りさせるのを見ました。（しかもお回りさんが二人とも）

それを見た時の私の感想を一言ここに書きます。

「アレはない」

製作（前書き）

前回は短くてすみません。

今回は前回よりも長めに書いたんでこれで許してもらえとうれしいです。

製作

まず、木の棒に針金をぐるぐると巻きつける。

次にその巻きつけた針金を一つ一つ切っていく、すると輪が出来る。

これで下準備完了。

後はひたすら出来た輪を組み合わせて編みこんでいく。

これが鎖帷子の作り方だ。

カチャツカチャツ

「……………」

教室の一角でツールが何か作業をしていた。

トールの机の上には小さな金属の輪が大量にある。

金属の輪には切れ込みが入っており、それをツールは指で広げては輪と輪をつなげていく。

単純な作業だが「雑さ」や「荒さ」はなく、実に丁寧の一つ一つの輪をつなげる。

それを見ていたクラスメイトは彼の指先の滑らかさとその繊細さに目を奪われた。

だが、作業をしている本人はそんな周りの目など関係なく、ひたすら作業を続ける。

キンコーンカーンコーン

ピタッ

トールの作業が止まったのは朝のHRの開始の鐘が鳴った時だ。

その時には、手元の輪と輪を繋げたものはかなりの長さになってお

り、人の頭ぐらいなら包めるほどの物になっていた。

「…この調子なら一週間もかからずに完成しそうだ」

それを見てトールは何かを考えるようにして呟いた。

だが、呟いた次の瞬間

「トールそれ何だ？」 「ずいぶんと熱心に作業してたけど…」 「素材は銀か？…でも」 「ああ、銀より光沢があるな」 「ちよつと触らせて」 「あつ私も私も」

周りで作業を遠巻きに見ていたクラスメイトがトールの手が止まったのを見計らって一斉によって来た。

「うおっ」

いきなり声をかけて来たクラスメイト達にちよつとビビったトールだったが、彼らが自分の持っている物に興味があることがわかると気を取り直して持っている物について説明を始める。

「ああ、これか？これは鎖帷子だ。」

「「鎖帷子？」」

「そう、まだ作ってる途中だけだな。」

そう言ってトールはまだ製作途中の鎖帷子を一人の男子生徒に手渡した。

「ん？」

受け取った男子生徒は手渡された鎖帷子にちよつとした違和感をもった。

重さを感じなかったのだ。

金属の塊を持った時のあのずっしりとした感触はなく、まるで羽毛の様だった。

思わず鎖帷子を形作っている金属の輪を指で弾けば金属独特の「キン」という音が聞こえる。

これで張りぼての可能性は消えた。つまりこの羽毛のような軽さの鎖帷子は間違いなく本物の金属で出来ており、そんな金属はこの世に一つしかない。

「…嘘だろ」

そこまで考えて男子生徒は顔が引きつった。

その様子を少し離れたところから見ている三人組がいた。

「あー、かわいそうにあいつ固まったぞ」

「アレが何で出来ているか気がついたのか」

「もしかして製造関係の学科の人なのかな？」

デイス、サリア、ニアはそれぞれ固まってしまった男子生徒を気

の毒そうに見ていった。

「俺も最初は目を疑ったぜ、鎖帷子の素材にミスリルを使うなんてな。どんだけ高性能な物ができるんだってーの」

「羽毛の様な軽さで鋼より頑丈な金属で出来た鎖帷子か、値段をつけるとしたらとんでもない額になるだろうな」

おそらく手間や素材費を考えれば軽く100万以上はするだろう

「そんでそれをお前はタダでもらうわけか」

「ん？」

「あれってお前の祭り用の衣装だろ？」

「いやあれは私の物ではない」

「は？」

「アレは馬用の衣装だ」

放課後

学院の馬小屋にて

「おお、こいつが今回貸してもらおう馬ですか。」

トールは目の前の馬を見ていった。

目の前の馬は学院の馬術部が飼っている馬の1頭で今回祭りに参加するトール達の為に貸してもらったことになった。

馬は長い鬣たてがみと尾が美しい白馬だった。

よく手入れがされており毛並みも実に艶やかだ。

「いい馬だろう？ちょっと神経質だが大人しくて扱いやすいぞ」

馬術部の部長が自慢げにそう言った。

「いやホントにありがとうございます。こんなにいい馬を貸してくれて」

そんな気前よく馬を貸してくれる部長に感謝するトール。

「いいって、いいって気にするな。それよりもすることがあるんだろ？」

「あつ、そうでした。じゃ、ちょっと手伝ってもらっていいですか？この馬の体の詳細なサイズが知りたいんで」

「お安い御用だ。」

二人はしばらく馬の胴の周りや首周りのサイズを詳しく測った。

「こんな感じで良かったのか？」

「ええ十分です。」

「そうか。また必要な事があれば何でも言えよ？俺もお前の作る作品には興味があるからな」

「はい！その時はまたよろしくお願いします。」

「おう！頑張れよ。」

「はい！」

トールはそう言って部長に別れの挨拶をした後、馬のサイズを測った紙を持って学院の端にある建物に向かった。

製作（後書き）

現在鎖帷子はスポーツタオルほどの長さ、目標はバスタオルぐらいの長さです。

誤字脱字の報告と、感想をお待ちしています。

感想は作者のやる気につながるので書いてくれると作者はやる気を出します。

登場人物紹介

トールⅡグラノア（17）

幼い頃に両親を戦争で亡くしたが、父親の友人であるドワーフに育てられる。

幼い頃から育ての親のドワーフから鍛冶の技術を教わり、その腕前はドワーフ並み。

くすんだ金髪と赤茶色の瞳の青年。

明るい性格で、好奇心が旺盛。

ヴォガスⅡザール（？）

トールの養父にして、鍛冶の師匠。トールの父親とは友人関係だった。

町外れに工房付きの家を持ち、そこで鍛冶をしながら生活している。

年齢はドワーフは長命なのでかなり曖昧。

髭もじゃのずんぐりした体格。

ディースⅡダリオン（17）

故郷では獵師の真似事をしていたので弓が得意。

浅黒い肌で、体格はがっしりとしている。

よく人に頼られる事が多く、面倒見のいい人物。

サリアⅡフージリア（17）

女性としては長身で赤い髪 of 凛々しい少女。気が強く剣術が得意。

下級生の女子に人気がある。

ニアⅡシュリオン（17）

黒髪の少し気の弱い心優しい少女。サリアと仲が良い。

絵を描くのが得意で、夢中になると周りが見えなくなることがある。

どこかマイペースな少女。

ルシア（10）

王国の第3王女。

髪は綺麗な銀色の長髪。

小さくて人形の容姿なので、周りから溺愛されて育つ。

上に優しい姉と気の強い姉がいる。

ユリア。

気の強そうな目と、長い赤い髪が特徴の女性。

近衛師団所属。王女の側近騎士として、いつもそばに居る。

主な武器はレイピア。性格は生真面目でお堅い人だと思われがちだが、女性らしい面もある。

リース。

ユリアと同じ近衛師団に所属。

魔術が得意。かなり大雑把な性格だが、意外と義理堅い。

『魔術と魔術師についての補足』

トール達の世界は魔力^{マナ}で満ちています。

魔力^{マナ}は人間や動物だけではなく草や木にも宿っており、魔術師達はこの魔力^{マナ}を利用して魔術を使います。

魔術師は体に宿る魔力^{マナ}を体内で操作して放出する事が可能です。

魔力^{マナ}は生物にとって生命力に近いものなのでコレが減ると疲労がたまります。

最後に、

魔力^{マナ}があるからと言っても、全ての人間が魔術師になれるわけではありません。

魔術師に必要なのは体に宿す魔力量ではなく、体内の魔力^{マナ}を自由に操作する強い魔力制御力です。

体内に宿る魔力^{マナ}を集めて、練り込んで、変化させて放出する。

これが出来た者だけが「魔術師」と呼ばれる人間です。

王都の設定

王都の中心には王達が住む王城があり、その周りを囲むようにして貴族が住む貴族街がある。（王都で一番大きな教会もここにある。）

そして、さらにそれを囲むようにして一般市民が住む市民街がある。

市民街は主に四つのエリアに分けられる。

東にある学院エリア

南にある商業エリア

西にあるギルドエリア

北にある軍事エリア

以上の四つだ。

そして、この市民街を守るようにして城壁が存在して王都を守っている。

さらに王都の正門には大きな門があり、王都に入る人間を厳しくチェックしている。

登場人物紹介（後書き）

この登場人物紹介でなにか要望があれば感想に書いてください。で
きるだけ書きます。

この人物紹介はどんどん追加していく予定です。

魔術と魔術師について補足説明を書きました。

特性

カーン カーン カーン カーン

何度も規則正しくハンマーで金属を叩く音が部屋に響いている。

ハンマーを持つのはくすんだ金髪に赤茶色の瞳が特徴の青年。

青年の正体は花祭りの出し物の製作の為に「工房」にやってきた
トールだった。

馬術部の部長に協力してもらい詳細な馬のサイズを測ったトール
は一直線にこの「工房」にやってきた。

普段ならばこの「工房」と呼ばれる施設は研究室に所属する生徒
が実験の為や研究の為に使う施設だが、来月に控える花祭りの影響
で研究室に所属しない生徒もこの施設が使えるようになっていた。

トールはその工房の一角でハンマーを片手に金属の塊を叩いてい
た。

だが突然トールはハンマーを叩く手を止めた。

——そして、次の瞬間。

その金属の塊を、素手で掴んだ。

鍛冶では高温で熱した金属の塊を使う。だから、そんなものに触ってしまえば火傷どころではすまないはずだ。

だが、トールは熱がる様子もなく金属の塊を両手で掴んでいる。

何故トールが熱がる様子を見せないのか？

その理由は実に簡単だった。

初めからトールはその金属を熱してはいない。

代わりににトールは「ある事」を掴んだ金属に行っていた。

それはミスリルという金属の特性が関係する。

まず、ミスリルは人の魔力の流れをスムーズにする事が出来るほかに人の魔力に同調もするが、それは違う捉え方をすればそれだけミスリルが魔力に「敏感」だということだ。

そのミスリルがもしも長い時間ずっと強い魔力を流し込まれた場合一体どうなってしまうのか？

答えは簡単だ。

壊れる。

過度の魔力を流し込まれたミスリルは徐々に形が歪んで行き、最後には碎けて砂となる。

こうなってしまうてはもうミスリルの本来の機能は失われてただの砂粒と変わらなくなる。

これはミスリルのあまり知られていない特性だ。

そして、この特性を鍛冶に応用して見せた種族がいた。

ドワーフだ。

彼らは程よく加減して魔力をミスリルに注ぎ込み、加工しやすい「硬さ」にしてから鍛冶の材料として使った。

これはドワーフが人間とは違い魔力量が豊富な事と、卓越した鍛冶の技術があつて初めて出来る芸当だ。

人間でも魔力の量が多い者はいるが、ドワーフのように卓越した鍛冶の技術を持つ者はいない。

逆に鍛冶の技術が一流でも、長時間魔力を注ぎ込めるだけの魔力量をもった人間はまずいないだろう。

だが、ここに例外が一人いた。

「はあはあはあ…」

母親は魔術師だったため、その魔力量「だけ」を受け継いだ。

魔力はあるが魔術の使えない魔術師。

それがトールだ。

そして魔術の使えない魔術師は今、ミスリルに魔力を注いでいる。

額や首筋からは滝のように汗をかき、顔からは血の気が失せて今にも倒れそうになりながらも、

「…はあはあ、はあはあ」

手からはミスリルの塊を離さずに

ひたすらに魔力をミスリルに注ぎこんでいる。

「っ！」

そして、何十分もミスリルに魔力を注ぎこんだ後は、ハンマーを片手に持ちミスリルを理想の形へと変えていく。

気を失わぬようにトールは歯を食いしばる。

時には唇を噛み、血を流しながらも、

ハンマーを打つ手を、

魔力を注ぐその手を、

ツールは止めない。

只ひたすらに、

懸命に、

叩き続ける。

特性（後書き）

誤字と脱字の報告と感想をお待ちしています。

今回の話は補足が必要だと思うので後で「登場人物紹介」のほうに追加して書く予定です。

他にも書いたほうがわかりやすいと思う事がありましたら感想に書いてくれると助かります。

最後に感想をくれたみなさん本当にありがとうございます。

おかげでやる気が出て予定よりも早く投稿出来ました。

今後もしよろしくお願いします。

製作終了

ツールが工房に通い続けて数週間。

鎧の製作は順調に進んだ。

まず、授業中にも作っていた鎖帷子は十分な長さに仕上がった。

次にサリアに着けて貰う予定の鎧も問題なく完成した。

そして今

ツールは最後の鍛冶に取り掛かっている。

「馬鎧」と呼ばれるものがある。

騎兵などが馬に乗って戦う場合、馬が狙われる可能性がある。

「馬鎧」はそんな馬を守るために作られた馬専用の「鎧」だ。

馬の頭を守る「馬面」。

胸を守る「胸甲」。

馬の尻の部分を守る「尻甲」。

「馬鎧」は大きく分けて以上の三つの部位に分かれる。

馬が負傷するのを避けるために「馬鎧」は頑丈に、しかし機動性を損なわないように可能なだけ軽量に作る。

それが「馬鎧」を作る上での鉄則だ。

だが、鎧というものは防御を重視すると機動性が犠牲になり、逆に機動性を重視すると防御が犠牲になる。

なので「馬鎧」を作る時は防御と機動性を上手くつりあわせて作らなくてはならない。

防御と機動性の両方を完璧に兼ね備えた「馬鎧」。

そんなものは存在しない

と思われていた。

だが、とある国の学院の工房で「ソレ」は完成しようとしていた。

鍛冶師の血と汗と魔力を大量に吸って

「ソレ」は作られていた。

カンカンカンカン

学院の工房の一角でツールは鎖帷子と白銀に輝くかなりゴツイ「お面」の様なものを止め具で固定していた。

ぐいっぐいっ

そして何度か引っ張って不備が無いか確認する。

「んー、大丈夫そうだな。」

固定が完璧だと確認すると大きな布でそれを包んで部屋から出て行った。

学院内の馬小屋――

「部長さん」

「ん？ おおツール」

「…『例のアレ』ついに完成しました」

「っ！！ついに最後のパーツが出来たのか！！」

「ええ。これが最後です。」

「よし！これで祭りに間に合うな。」

「はい。」

「では祭り当日までこいつは俺が預かろう。」

「お手数をおかけします。」

「なーにコイツが見つかって騒がれるのを防ぐためなら仕方ないさ。幸いここは物が多いから隠し物をするときは便利だからな。祭りまでの数日間は余裕で隠せるさ」

「よろしくお願いします。」

「おう任せておけ!!」

そんなやり取りが学院の馬小屋であつた事など大抵の人は知らず

時間は緩やかに流れる。

王都は祭りを前に徐々に活気づき、人は期待で胸を膨らませていく。

そして

花祭りが始まる。

製作終了（後書き）

次回花祭り当日

誤字脱字の報告と感想をお待ちしています。

パレード（前書き）

今回の話が一番書くのが難しかったです。

言葉で表現する事の難しさを改めて知りました。

パレード

「パレード」

毎年、花祭りで行われる祭りの目玉だ。

仮装をした人や山車が街の大通りを行列をなして練り歩くイベントで、王都に店舗を構える多くの洋服店や防具屋がこのイベントに製作者として参加しているため、毎年豪華な出し物を見る事ができる。

数ヶ月かけて作った山車や騎士などの仮装をした者達が大通りを練り歩く姿は迫力があり、

パレードが行進する大通りでは毎年その様子を見ようと大勢の人が集まる。

そして、人の歓声と拍手で毎年耳が割れそうになるのがこのイベントの恒例だ。

だが、今年はすこし様子が違った。

その「騎士」が大通りに入った瞬間、

それまで騒いでいた見物客の声が完全に止んだ。

それは普通の騎士ではなかった。

「白銀」

騎士の鎧がすべて白銀に輝いていた。

いや、鎧だけではない。

騎士が着けている手甲、そして騎馬が装備している馬鎧も全て白銀に輝いていた。

その姿は

言葉を忘れるほどに衝撃的で、

鳥肌が立つほどに美しかった。

「「………………。」」

そして、その騎士の姿に、全ての観客は心を奪われた。

大通りの片隅でトールはその様子を見ていた。

「よし。掴みは上々だな」

彼は周りの反応を見ながらそう呟いた。

だが、

「ん？」

そのまましばらくパレードの様子を見ていたツールだったが、視界の片隅でおかしなものを見つけた。

「ん
ゝ
！
ん
ゝ
！
ん
ゝ
ゝ
！
！」

年はおそらく10歳ぐらいだろうか、小さな少女が一生懸命背伸びをしている。

ツールは初め、その少女が何をしているのかわからなかった。

だが、よく見ると少女の前に大きな人垣がある事に気がつく。

（ああ、背が低くて見えないのか）

少女の低い背ではパレードの前に並んだ人垣は高すぎて、パレードの様子を見る事が出来ないのだろう。

それに気がついたツールは

「：ちよつと肩でも貸してやるか。」

気まぐれに少女の方へ向かっていった。

「なあ、そこのちびっこ。」

「わっ!」

「あつと、驚かせちゃったか?」

「い、いえ大丈夫です。そ、それで私になにか御用ですか?」

「肩、貸してやろうか?」

「え?」

「あれ見たいんだろ? だったら俺が肩車してやるよ。」

「え? え?」

「あー、もしかして余計なお世話だったか？」

「い、いえ、そうではなく。い、いいのですか？」

「は？何が？」

「か、肩を貸してもらってください！」

「別にいいぞ。」

「ほ、本当に？」

「ああ」

「で、ではよろしく願いします。」

「…早くしないとパレード終わっちゃうぞ。」

「あ！」

「…しゃがむから、しっかり掴まっとけよ。」

「は、はい！」

そのまま俺は少女を肩に乗せてパレードを見た。

とあるカフェの店内――

「…パレードは楽しかったか？」

「はい！凄く楽しかったです！」

「…そうか、そりゃよかったな。」

なぜか俺は大通りで出会った少女と一緒にカフェにいた。

その理由は、あの後、パレードを最後まで見た俺は少女を肩から下ろし、これから祭りを楽しもうと少女に別れを告げようとしたのだが、

そこで俺はあることに気がついた。

「…なあちびっこ。お前親はどこだ」

「…………。」

俺の問いかけに沈黙する少女。

迷子確定。

言葉使いが見た目に反して大人っぽくて、しっかりしてると思ったがどうやら俺の勘違いだったようだ。

おそらく祭りの騒ぎに浮かれて親とはぐれたのだろう。

そして、そんな迷子を一人で放り出すほど鬼ではない俺は、仕方なく目の前の迷子の世話をする事にしたのだ。

「まあ、それは置いておくとして、」

「？」

「お前、家どこだ？」

「……………」

「まさか住所がわからないのか？」

「……………」

俺の質問にすべて無言で答える少女。

「……………」

「……………」

俺はそんな少女を見てどうすればいいのかわからず途方にくれた。

パレード（後書き）

変なところで切れて申し訳ありません。

続きをなるべく早く書けるよう頑張ります。

誤字脱字の報告と感想をお待ちしています。

急展開

(…どうしよう。)

私は今、男の人と一緒にカフェにいる。

こんな事、今まで経験がないのですごく緊張する。

だけど、もっと緊張するのは、

いつ私の『正体』がバレてしまうかだ。

私の『正体』はバレてしまうと色々とまずい事になってしまう。

だから目の前の男性はもちろん、他の人にも絶対にバレる訳にはいかない。

でも、幸運なことに目の前の男性は私をただの迷子だと思っているようで、私の『正体』に気がつく様子はない。

それに私は少し安心した。

だけど、

「あー、番所でも行ってみるか？」

「え？」

「迷子になった娘を探しにお前の両親がいるかもしれない。」

突然、目の前の男性がぶっきらぼうに私にそう言った。

家の住所を質問され、答えられなくて黙ってしまった私を心配そうな顔で見ながら、

ぶっきらぼうに、でも優しい声でそう言った。

本当は迷子でもない私を、本当に心配して

その事に私はすごい罪悪感を覚えた。

目の前の彼にはパレードで助けてもらい、この喫茶店ではお茶をおごってもらい、さらには迷子の心配までさせているのに、

自分は迷子の振りをして彼を騙している。

「…っあ。」

その事実には私は我慢できなくなった。

「っあ…、うっ…、ひっく」

喉から嗚咽が漏れ、目からはボロボロと涙が零れた。

「うおっ、ど、どうした!? ど、どっか痛いのか?」

すると、突然泣き出した私に驚き、目の前の彼が心配して椅子から立ち上がり駆け寄ってきた。

「は、腹か？それとも頭か？ど、どこが痛い？」

彼は私の椅子の近くに膝を突いて、凄く動揺した声でどこが痛いのか聞いてきた。

「えっぐ…ひつく、…だ、だい、じょうぶ、です。」

私はそれに、これ以上彼を困らせてはいけないと思い、言葉に詰まりながらもなんとか大丈夫だと答えた。

「ほ、本当か？我慢してないか？」

でも彼は、私の言葉を聞いてもまだ心配そうだった。

私は彼を安心させようと、彼に「本当に大丈夫です。」と声をかけようとしたのだけど、

ガッチャン！！

「失礼！！こちらに貴族のご令嬢が迷い込んではいないだろうか！」

突然、私達がいるカフェに鎧を着込んだ騎士が飛び込んで来て、その言葉を彼に言うことは出来なかった。

突然店に入ってきた騎士が店内を見渡していたら俺のほうを見ていきなり叫んだ。

「貴様っ！そこを動くな！！」

「は？」

突然の出来事に間抜けな声が出た。

いきなり泣き出した少女をあやしていたら、今度は厳つい鎧を着込んだ騎士に突然怒鳴られる。

多分、俺じゃなくてもこの展開には誰もついていけないと思う。

「あー、よく状況がわからないんで説明してくれませんか？」

展開についていけない俺は、間抜けな顔のまま騎士にどういうことが聞いた。

「白々しい！それで言い逃れができているのか！」

「あー、いや、別にいい逃れとかじゃなくて、ホントに意味が」

すると、目の前の騎士が顔を真っ赤にして怒り出してしまった。

なぜ騎士が怒り出すのか分からず、俺はさらに混乱した。

何とか激怒する騎士をなだめようとするのだが、全然効果がない。

そして、

最後には騎士が腰にある剣に手をかけてしまった。

「貴様っ！いい加減にしろっ！」

そう言って騎士は腰の剣帯からスラリと細身のサーベルを抜いた。

「あっ！」

私はそれに見て流石にまずいと思い、騎士を止めるべく声を出そうとした。

「仕舞え」

だけど、隣から聞こえたその声に、私は声を出せずに固まった。

その声は私の隣にいる『彼』からした。

声も確かに『彼』の声だった。

でも、その声は今まで聞いた『彼』の声とはかけ離れすぎていた。

その声には私を心配してくれた時の優しさも、泣き出した私を見たときの動揺もなかった。

まるで別人のようだと思い、私は『彼』の横顔を見た。

(え?)

そして、私は驚いた。

私は『彼』はすごく怖い顔をしていると思ったのだ。

でも違った。

『彼』の横顔は、

まるで、泣くのを必死に我慢している子供のようなだった。

「今すぐ『ソレ』を仕舞え。」

俺は目の前に騎士に剣を仕舞うように命令する。

「な、なにを言っている！自分の状況が分かっているのか！」

でも、騎士は喚くばかりで俺の命令を聞こうとしない。

仕方がないので俺は強攻策に出る事にした。

コッコッ コッコッ

一歩一歩、俺は騎士に近づく。

「ひっ！」

ピタリ

そして、騎士との距離が殆どなくなったところで立ち止まった。

「な、な、」

「黙れ。」

まだ何か喋ろうとした騎士に向かって俺は黙るように命令した。

「うっ」

今度は少しは命令を聞いたようで騎士はただ呻くだけだった。

俺はそれに満足しながら騎士の持っている剣を素手のまま片手で掴んだ。

「っ！」

「…俺は子供の前で剣を抜くような奴が大嫌いなんだ。」

そして、剣を掴んでいる手とは反対の手を手刀の形にする。

「なにより、俺の前で意味もなく剣を抜くな。」

そのまま俺は手刀を剣の峰に向かって振り下ろした。

ガンッ！！

カラン カラン

「っ!？」

「…この国の騎士は騎士の癖に剣をただの道具としか思っていないのかよ。」

俺は折れた剣を驚愕の目で見つめる騎士を横目に、元いたテーブルに戻った。

「悪いなちびっこ。店にいられなくなったから外に出よう。」

「え、あ、は、はい。」

俺はなるべく優しい声で目の前の少女に声をかけた。

やっと泣き止んだのに怖がらせてまた泣かせたら可哀想だと思ったからだ。

幸いにも少女は泣かずに椅子からスッと立ち上がった。

そして、俺はお茶の代金をテーブルに置いてから啞然とする客と騎士を無視して店を出た。

だが、

バチンッ

「ぐあ!？」

店を出て一步踏み出した瞬間、いきなり後頭部に激痛が走った。

そして、なんだか目がちかちかして体に力が入らない。

気がつけば俺は地面に膝を突いていた。

(なにが起きた?)

「…まだ気を失わないのか。ずいぶんタフな誘拐犯だな。」

混乱する俺の頭の上からは大人の女性の冷ややかな声がかすかに聞こえた。

「まあ、結局最後は変わらないんだがな。」

バチッ

「があっ!？」

そして、冷ややかな声と一緒にさらなる激痛が走った。

俺はそれになす術がなく、一瞬で、意識を手放した。

急展開（後書き）

最近お気に入り登録と評価点をくださった方、ありがとうございます
期待に応えられるよう今後も頑張ります。

誤字脱字の報告と感想をお待ちしております。

牢屋（前書き）

少し暗いです。

牢屋

目覚めたとき、俺は全く知らない部屋にいた。

いや、部屋というところ少し語弊がある。

その部屋の壁や床はすべて硬い石で出来ており、ドアの替わりには鉄格子が嵌めてあった。

：誰が見ようとそこは立派な牢屋だった。

そして驚く事に、俺の両手にはゴツイ鉄枷が嵌められていた。

「：なんでこんな事になってんだ？」

俺はあまりの事にただ呆然とする。

だが、そんな俺を無視して状況は目まぐるしく変化していった。

突然やってきた看守に牢屋から出されたかと思ったら、今度は狭い個室で二人の一般兵に尋問をされた。

尋問が始まると、驚く事に俺は誘拐犯だと勘違いされていた。

その理由が俺と一緒にいた少女に関係する。

実は俺が「ちびっこ」と呼んでいたあの少女は、この国でもかなり上の身分の貴族だったのだ。

だが、その少女が朝から突然の行方不明。

慌てて街中を搜索すると、少女と一緒にいる不審者をとある騎士が発見。すぐさま追跡し一緒にカフェに入る所を目撃。

不審者が少女をかどわかしていると思った騎士はすぐさま応援を呼び、カフェの周りを包囲をしようとする。

だが、それよりも早く別の騎士がカフェに少女を探しに入ってしまう。

最悪な事に不審者を刺激しまい店内があわただしくなるが、その間にカフェの周りの包囲が完成。

そして、不審者が運よく店内を出た瞬間、魔術で不審者を気絶させた。

以上が俺を尋問している兵から聞いた情報だった。

そして、それを聞いた俺は

「ふざけんなっ！！何で迷子の貴族の子供の面倒見てただけで誘拐

犯に間違われるんだよっ!!」

あまりにも酷い濡れ衣に若干キレていた。

「だが、お前はその少女を泣かした挙句に、やってきた騎士に暴行を加えたそうじゃないか」

「だからそれはっ、その子がいきなり泣き出して!」

「…お前が脅したんじゃないのか?それで少女は怖がって泣」

「違うって言ってんだろっ!」

「「……………」」

「はあっ、はあっ、」

俺は何度も続いている問答に疲れて肩で息をする。

さっきから目の前の二人に同じ事を何度も質問されて、それを俺が否定するのを何度も繰り返している。

俺はこのなれない状況と叫び続けて疲れたせいで、どんどん体力を消耗していった。

だが、そんな俺のことを無視して目の前の二人はまた同じ事を聞いている。

「…彼女に近づいたのは目的があったからじゃないのか？」

「違う。ただパレードを見ようとしてたのを手伝っただけだ。」

「騎士の剣をへし折ったのは？」

「…あいつが、子供の前で剣を抜いたからだ。」

何度も続いたこの受け答え。

…俺はもう考えるのを止めて、ただ感情のままに答えることにした。

だからだろうか、二人の兵が俺の様子が変わった事に気がついて、しつこくその事を質問してきたのは

「それはあまりにも攻撃的過ぎないか？」

「ああ？」

俺は兵の一人の質問にかなり乱暴な言葉で答えた。

すでに俺の堪忍袋は我慢の限界で、今すぐ暴れだしたいのをわずかな理性で押さえている状況だ。

だが、そんな事を知らない目の前の兵は俺の神経を逆撫でする。

「『たかが剣』を目の前で抜いたからと言って、そこまで過剰に反応するのは攻撃的過ぎると言ったんだ。」

「……………」

兵はそう言って、俺をまるで諭すかのように上からの目線で話し続ける。

「それでは、まるでやましい事が」

…俺が我慢できたのはそこまでだった。

「…黙れよ。」

目の前の兵の言葉を遮って、俺は静かにそう言った。

「…頼むから、…もう黙ってくれ。」

怒りで我を忘れそうになりながら、目を閉じて、祈るようにそうつぶやいた。

だが、そんな俺の願いは届かない。

目の前の兵は俺がなにやら観念したと思ったようで、さらにしつこく尋問を続けた

「どういう意味だ？ なにか聞かれないわけでもあるのか？」

「……………」

「おい！ なんとか言ったらどうなんだ！？」

「……………」

「おいっ！！！」

俺が完全に喋らなくなると、先ほどまで俺を尋問していた兵とは別の兵が若干キレ始めた。

俺はそれをすぐ冷めた目で見ながら、ゆっくりと喋り始めた。

「……剣って言う物は人を傷つける物だ。」

「おっ、やっと喋る気になったか？」

「……でも剣は守る事も出来る物だと俺は信じてる。」

「???。何を言ってるんだ？」

「剣の使い方は使う人間の心次第だ。剣をただの人斬りの道具にするか、剣を『人を守る』道具にするのかは、剣の持ち主の心次第。」

「……だから何を」

「俺は剣を『人を守る』為に使う奴に剣を作りたい。いや、それだけじゃない。俺が作った剣を見た奴が『ソレ』を見て何かを守りたいと思うような、そんな剣を俺は作りたい。」

「……いい加減にしろっ!! さっきから訳のわからんことをベラベラと」

「……だからむやみに剣を抜く奴や、守んなきゃいけない弱い子供を剣で怯えさせる奴が俺は大嫌いなんだ。」

そこまで喋った後、俺は二人の兵を虫けらを見るような目で見てからこう言った。

「そしてなにより、剣をただの道具だと思ってる奴が俺は反吐が出そうなほど大嫌いだ。」

「「っ!!」」

今度は俺が二人の兵を見下す。

「貴様あっ!!!!」

ガッ!

すると片方の兵がキレて俺に掴みかかってきた。

そして、兵がいまにも俺を殴ろうとした瞬間、

「おやめなさい!!」

部屋に少女の声が響いた。

牢屋（後書き）

：なんだか明るい話より暗い話のほうが書いてて楽しいです。

それにしても主人公よくキレるなあ。

えーっと、あとなんだか研究室ゲットの話が十分遅れてますが、どうかその辺許してくれるとありがたいです。

最後に誤字脱字の報告と感想をお待ちしてます。

特に感想を読むのが作者は怖いと同時にすごく大好きなので、書いてくれると嬉しいです。

自由（前書き）

お待たせしました。

自由

『おやめなさい!!』

少女の鋭い制止の声が部屋に響いた。

その声に俺を含めた部屋にいた三人はその声に反応して動きを止め、声のした方を思わず見た。

すると、そこには。

「どうやら間一髪のところだったようですね。」

鎧を着込んだ真っ赤な髪 of 気の強そうな女騎士と、

「…ええ、もう少し遅ければ私の恩人が殴られてしまうところでした。」

なぜか、俺が街で会った「あの少女」がドアの前で立っていた。

「…あなた方は何をしているのですか？」

少女はそう言って二人の兵を冷たい眼差しで見た。

それに俺を殴ろうとしていた兵とは別の兵が反応し、椅子から立ち上がった。

「お、おい！ちびっこ」

てっきり俺は兵が突然の乱入者を追い出すと思って、少女に向かって逃げるように声をかけようとしたのだが、

「ハッ！た、ただいま誘拐犯を尋問していたところです！」

「え？」

兵は追い出すどころか、寧ろ少女の質問に丁寧に答えていた。

（あつ、そういうえば貴族の子だったんだ。）

兵の少女に対するあまりの態度に驚いたが、尋問中に聞いた少女が貴族の子供だという事を思い出して納得した。

兵たちの話では少女はかなり身分の高い貴族の娘らしいので、彼らは少女に無礼な態度は取れないのだろう。

「尋問？私にはまるで脅しているように見えますが？」

少女は先ほどから俺の胸倉を掴んだままの兵を見ながら言った。

「え、あ、こ、これは違うのです！」

そして、今更慌てて手を引っ込めて言い訳を始める兵。

そこには先ほどまで俺に対していた時のような高圧的な態度はなく、あったのは自分よりもはるかに年下の少女に頭を下げる情けない姿だけだった。

(…なんだかなあ。)

その姿を俺は椅子に座ったまま微妙な気分で見ていた。

「大体、彼が何をしたというのですか！ただ迷子になった私の面倒を見てくれただけではないですか！」

「で、ですが」

「とにかく彼は無罪です！関係者の私が言うのだから間違いありません！」

「し、しかし」

「しかし、ではありません！それにこの事は父もすでに知っており事の顛末を聞いて大変お怒りです！」

「そ、そんなっ…!」

「だいたい、あなた方は…!」

「……なあ、ちょっといいか？」

俺はそこで二人の口論に横槍を入れた。

そして、両手についた枷を持ち上げながら言った。

「…白熱してる所悪いんだけど、ちびっこは俺が無罪だってわかってるだろ?…だったら早めにコレ外してくれないか？」

俺のその台詞に。

少女は「あっ」という顔で気がつき、慌てて兵の一人に枷を外すよう命令してくれた。

「す、すみません。すぐに外させます。そ、そのあなた、枷を！」

「は、はい！」

少女の命令に、兵は急いで俺の両手に付いた枷を専用の鍵で外す。

カチャン

枷の外れた音がし、その音と共に俺は晴れて自由の身になった。

枷を外された俺は「謝罪をしたいから」と、少女と鎧を着込んだ女性に、ものすごく豪華な部屋に案内された。

フカフカの絨毯に、腰をおろすと体ごと沈みそうになるソファ。

壁には高そうな絵と調度品が品良く設置されている。

そして、テーブルの上にはこれまた高そうなカップに紅茶のセット。

それを見て、ここは絶対さっきまで牢屋にいた人間がいる場所じゃないと思うながら、俺は少女に謝罪ではなくこれまでの事についての説明を頼んだ。

「…それで、どうしてこうなったのか説明してもらえるか？」

「…はい、もちろんです。」

俺の少し陰のある言葉に、少女は申し訳なさそうに頷いた。

そして、とんでもない事を言われた。

なんと、目の前のこの少女はこの国の王女だと言うのだ。

……言われてみれば確かに少女は品の良い顔立ちをしているし、服も高級そうな服を着ている。

それに髪の色も綺麗な銀色でよく櫛が通っている。

小さい子供という認識しかなかったのであまり容姿は気にしなかったのが盲点だった。

だが、驚くべき事はまだ続いた。

祭りの今日、目の前の王女様はこの城を抜け出して城下に出たと言った。（ちなみにこの言葉でここが城の中だと知った。）

賑やかな城下の様子に心惹かれ、つい城の警備の目を盗んで抜け出してしまったらしい。

そして、パレードに夢中になり迷子になったところで俺に会った。

ここまではいい。

迷子にはなったが、後は俺が王女を城の近くまで送り届ければ、事は穏便に済んだはずだった。

問題は次だ。

「…以前から私にしつこく迫ってくる方がいまして。…その方が私

が脱走したことをどこかで嗅ぎ付け、騒ぎを大きくしたんです。」

俺はその言葉を聞いて「うわ」と思わず顔をしかめた。

それは、めんどくさい貴族の揉め事に巻き込まれたのかと思ったのと、王女の言葉からひしひしと「そいつ」に対しての嫌悪感が伝わってきたからだ。

嫌な予感がして、まさかと思いながら「そいつ」の歳を聞いてみた。

「…ちなみにそいつ、歳いくつ？」

俺の質問に、王女は少し言いにくそうにしながら「…25です」と答えた。

想像していた通りの嫌な答えを聞いて、俺はさらに顔をしかめた。

見た目10歳ほどの王女を25歳の男がご執心。…なんだか犯罪と陰謀の匂いがプンプンする。

俺は気分が悪くなったが、同時に段々と今回の話のオチが読めてきた。

城を脱走中の王女と俺が一緒の所を、その貴族か部下に目撃されたのだろう。

そして、それをその貴族に嫉妬され、俺は無理矢理に誘拐犯にされた。

俺をその貴族お抱えの騎士にでも捕まえさせれば、手柄は全部その元の元に行き、尋問で適当に弱らせて都合のいい様に調書を取れば完璧。

俺は間違いなく王女誘拐犯として死罪になっただろうし、俺を捕まえたその貴族は周りから賞賛される事だろう。

幸いにも、王女が助けてくれたので事なきを得たが、あのままだったらやばかったかも知れない。

そう考えると、目の前の王女には感謝しなくてはならない。

一応、俺の予想が当たっているか王女に確認を取ると、王女が「…はい。そのとおりです。」と頷いたので、俺は座っていたソファから立ち上がって、対面のソファに座る王女に向かって「助けてくれてありがとう。」とふかぶかと頭を下げた。

きっちり三秒数えてから顔をあげると、何故か王女とその護衛らしき真っ赤な髪の女性は驚いて俺を見ていた。

その反応の理由がよくわからなかったが、俺は話の続きをしようと王女に声をかけて促し会話を再開させた。

「…それで、その貴族が俺を牢屋にぶち込んだ張本人なわけだな？」

「は、はい。そうです。」

「…ちなみにそいつが今ここに居ないのはなんでだ？」

「…今回の件は部下が勝手に勘違いしたからだと言って」

「…まさか、部下を残して逃げたのか？」

「はい…。」

それを聞いて俺は頭の血管が切れそうになった。

貴族お得意のトカゲの尻尾きをしやがったのだ。その貴族は。

立場が悪くなるとすぐに部下に責任を擦り付けて、自分は逃げる。

卑怯な手だ。

俺は頭に血が上り、テーブルに身を乗り出して、王女にその貴族をとっちめる方法はないか聞いた。

すると素晴らしい事にとっても面白い話が聞けた。

なんでもその貴族。

「ミスリル」を教会に売っているらしいのだ。

王女の話では、その貴族は腕のいい鍛冶師を何人も雇って質の良いミスリル製の道具を作らせて売っているらしい。

この質の良いミスリル製の道具が教会の人間に大変好評で、その

貴族はそれでひと財産築いたそうだ。

そして、そのことで貴族社会でも有望の出世株だと期待されている。

俺はそれを聞いて堪えきれず「ははっ」と笑った。

突然笑いだした俺に、王女もその護衛の赤髪の女騎士も驚いていたが、俺は気にせず王女に向かってこう言った。

「なあ、王女様。俺の鍛冶師の腕を買ってくれないか？」

俺の言葉に「え？」と驚く王女に向かって俺はさらに言葉が続けた。

「あんたには助けてもらった恩があるし、あの貴族には借りがあるから特別に安くしてやるよ」

「え？ え？」

困惑する王女を見て苦笑しながら、俺は自信に満ちた声で言うてやった。

「ドワーフの鍛冶師の腕だ。今買わなきゃ損するぞ？」

自由（後書き）

あともう少しこの話続きます。

誤字脱字の報告、感想をお待ちしています。

始動

「つまり、そのバカ貴族が今後お前にちよっかい出さないようにプライドをズタボロにしてやるから、俺を雇えって言ってるんだ」

「えっ！、そ、そんな事できるんですか？」

「ああ、出来るぞ」

「ど、どうやってですか？」

「簡単だ。バカ貴族が作るミスリルより質の良いミスリルを、学生の俺が作る」

「!？」

王女はトールのあまりに突飛な台詞に驚いた。

なぜなら、目の前の青年は学生の身でありながら貴族に雇われた熟練の鍛冶師達よりも、良質のものを作ると言っているのだ。

これには王女は驚きを隠せなかった。

ただ呆然とトールを見つめて固まった。

だが、トールはそれに構わず話し続けた。

「もし無名のしかもただの学生が、その貴族達を作ったミスリルよりも良質のミスリルを作ったらどうなると思う？」

「そ、それは……」

トールの質問に、王女は先ほどの言葉の衝撃からまだ復帰できず、まともな返事をする事ができない。

しかし、王女の代わりに答えを返した人物がいた。

「…間違いなく彼らが作ったミスリルの道具は信用はガタ落ちしますね」

「「!？」」

それはトールが最初にいた尋問部屋に王女と一緒に入ってきて、この部屋に入ってから一言も話さず、ジッと部屋の隅に立っていた赤髪の女性だった。

「失礼、姫さま。差し出がましいようですが口を挟ませていただきました」

「い、いいえ構いません。それよりもユリア、続きを聞かせて」

（…ユリアっていうのかこの人）

と、トールはユリアと呼ばれた赤髪の女性を見た。

気の強そうな目と、真っ赤な長髪の背の高い女性。

顔立ちは整っているが、その鋭い眼光のせいか何故か圧迫感を感じる。

（…俺の苦手なタイプかも）

と、トールは心の中で感想をつぶやいた。

「はい、では続けます」

そう言ってユリアと呼ばれる女性はトールと王女に向かって話し始めた。

「確かに、彼が例のミスリルのよりも良質の物を作れば例の貴族のプライドも、彼が作るミスリルのブランドも、傷をつける事が可能でしょう。そして、そんな事になれば面目を潰された例の貴族は、今までの様な高慢な振る舞いを自重する事でしよう」

「ほ、本当に？」

「……………」

ユリアの言葉に、王女は期待に満ちた目で見つめる。

「はい、間違いありません。あれほどの投資をし、製造した高品質

のミスリルの道具が、ただの学生が作ったものに劣るなどいい笑い話ですからね。しばらくは恥辱で人前に出るのも嫌がるはずです。」

「な、なるほど」

と、王女が納得しかけたところで、ユリアが「ただし、」と付け加えた。

「な、なにか問題でもあるんですか？」

ユリアの言葉に王女は戸惑いながらユリアに聞いた。

「はい。あります」

戸惑う王女の質問にユリアは静かに答える。

そして、チラッとツールの方を見た後、言葉を続けた。

「それは今までの話が、彼にそれだけの技術がある、という事が前提になっているからです」

「!？」

「彼には失礼ですが、まだ若い彼が熟練の鍛冶師の匠の技を超える技術を持っているとはとても考えられません」

それは王女もツールとの会話中、疑問に思った事だった。

目の前の彼はどう見ても十代後半の青年。その彼が熟練の鍛冶師よりも優れた技術を持つとは普通では考えられない。

「あ、あの！」

王女はその事についてトールに何か聞こうと思い切って声をかけた。

だが、それにトールは頭を掻きながら「あー、ちょっと待って」と王女の言葉を遮り、

「あー、ユリアさんでしたっけ？悪いんですが、ちょっと持っている剣を鞘から出して見せてくれませんか？」

と、ユリアに頼んだ。

ユリアは驚いた。いきなり青年が自分の剣を見せろと言ったからだ。

室内の、しかも王族のいる前で抜刀しろとは正気とは思えない。不敬罪に問われてもおかしくない。

だが、目の前の青年はそんな事は気にしないと云わんばかりに、

「ああ、別に剣を貸せといってるわけじゃないです。ちょっと見せてくれればいいんです」

と言って自分の腰に差した剣をジッと見ながらいった。

私はその視線を受け、どうすれば良いのか少し迷った。青年に害意がない事は目を見ればわかる。

まるで気に入ったおもちゃを前にした子供のようにその瞳に濁りはない。青年は本当にただ自分の持つこの剣を見たいだけなのだろう。

だが、それと剣をこの場で抜刀するかは別の問題だ。

この青年がどれだけ純粋な人間だろうと、王族の前で軽々と剣を抜くなどあつてはならない。

私はそう思い、青年には悪いが剣を見せることは出来ないと謝罪の言葉を言おうとしたが、王女の言葉がそれを遮った。

「…ユリア。申し訳ないけれど、彼にあなたの剣を見せてくれない？」

「姫様…！？よ、よろしいのですか？」

「はい。この場での抜刀を許可します」

私はその姫様の言葉に驚愕した。

まさか、あの気弱な姫様が抜刀の許可を出すとは夢にも思わなかったからだ。

だが、驚いたのはほんの一瞬。すぐに気を取り直し、腰に差した剣の柄に手を置き、

「…わかりました」

と言って鞘から剣を抜いた。

…この時の私はまだ理解していなかった。

青年が言った「ドワーフの鍛冶師の腕」という言葉の意味。

それは、ただの法螺でもなければ、称号でもない。

それが単なる「事実」だと、私が理解するのにさほど時間はかからない。

「へえー、結構まめに手入れしてますね」

「当然です。武器は戦士にとって命ともいえる大事な物、手入れを怠るなどあってはならない」

と、ユリアさんは剣をトールに見せながら少し胸を張って答えた。

トールはそれに「それは感心です」と社交辞令を言ってからユリアさんに剣をしまっていていいですよと声をかけた。

ユリアが剣をしまったのを見て、トールは「さてと、」と前置きをする。

そして次の瞬間、トールは一気に喋り始めた。

「ユリアさん。あなたの剣は見た目はただの「レイピア」のようですが、中身は全くの別物ですね。まず材料の鉱石が最高品質の玉鋼。剣の色艶と重さのバランスの良さ。特に、柄の部分には身体能力を向上させる高価な宝玉が埋め込まれ、周りの装飾のまじないの模様がその宝玉の能力をさらに底上げしています。なかなかの名剣ですね。：ただ、少し宝玉の力が弱まっているようです。早めにマナを補充する事をお勧めしますよ。後、日頃の手入れも重要ですが、そろそろ専門の店で砥ぎに出した方がいいですね。見たところ、最後にとぎに出したのは大分前ではないですか？」

「「……………」」

「あー、それに……………ん？」

他にも若干歪んでいる護拳の部分や握りの細かい工夫についてトールは喋りたかったのだが、ユリアと王女が自分のことを珍妙な生物を見るかのような目で見ていたので喋るのを止めた。

「…あー、失礼しました。少し熱が入りすぎたみたいです」

そう言ってトールはゴホンわざとらしく咳払いして、二人を横目でチラッと見た。

「「……………」」

二人とも驚いて目を丸くしている。

「んん！ あー、ゴホン！」

「「！！」」

トールは二人の様子を見て、今度は少し大きめの咳払いをして注意を自分に向けた。

そして、落ち着き払った声で二人に聞いた。

「えーっと、今ので俺が少しは腕の立つ鍛冶師だと認識して貰えろと嬉しいんですが、どうですかね？」

剣の材料から付加されたまじないに宝玉の能力。それら全ての解析に説明。

これは鍛冶を生業とする人間には必要な技能だ。

トールはそれを目の前で披露する事で自分が腕の立つ鍛冶師だと二人に見せ付けたのだ。

もちろんこれだけでは信用に足りないと思うが、この場には自分の作った作品がないから仕方がない。日を改め、後で自分の作品を見せるしかない。

（∴サリアに頼んで持ってきて貰う事できるけど、今どこにいるかわからないしなあ）

と、考えていると

「……すみません、貴方のお名前を聞かせて貰えますか？」

王女が今までの気弱な雰囲気とは違った、凜とした表情で俺を見つめていた。

トールはその様子に少し面食らった後。

「…トールだ。トールⅡグラノア」

と、名乗った。

それを聞いた王女は手のひらを自分の胸に当て、

「…名乗るのが遅れましたね。私の名前はルシア。この国の第3王女です。後ろにいるのは私の側近騎士のユリアです」

と名乗り、後ろにいたユリアさんも紹介され軽く頭を下げた。

「あ、ああ。よろしく」

突然の自己紹介にトールは戸惑いながら挨拶を返した。

なぜ今更自己紹介をするのかも意味がわからず、混乱していると

「…トールさん」

と、王女がいきなり「ガシッ」と俺の手を掴んだ。

「!？」

トールは王女の突然の行動に驚き、慌てて王女を見た。

「……い……す……、……い」

そこで見たのは、先ほどの凜とした王女の姿ではなかった。

「お……い……す……、……い」

それは、トールが街で初めて会った時に見た。

「お……い……す。助……て……い」

あの、

「お願いですっ……、助けてくださいっ……!」

迷子の子供の姿だった。

トールはそれを見た瞬間。

『ポンッ』

と握られた手とは反対の手で、王女の長い髪の上に手を置いた。

「…安心しろ」

そして、頭を撫でながら安心させるように

「俺の剣でお前を「守って」やるよ」

と笑いながら言った。

始動（後書き）

ごめんなさい。活動報告の予告より遅れました。今後はもっと余裕を持ってから報告します。

そして、次の話からはツールが貴族をボロボロにする話を書きます。後、そろそろ総合PVアクセスが50万を超えそうなので何か閑話でも書こうと思っています。

まだ、何を書くか決まってないので誰か「こんな話書いて！」というのがあればどうぞ。なるべくかけるよう努力します。でも必ず書けるかどうかはわかりません。（作者の力量不足です）
以上、長々とすみませんでした。

閑話ゝ手紙（前書き）

PV50万アクセス記念です。

閑話／手紙

田舎の小さな町の酒場の酔っ払いの中に一人のドワーフがいた。

そのドワーフは実に楽しそうに人間の中に混じり、酒を飲んでいる。

ドワーフは本来、人とは馴れ合わない気難しい性格のことが多いのだが、そのドワーフはずいぶんと変わり者だった。

そのドワーフの名前は、ヴォガスⅡザール。

町一番の鍛冶師にして、トールⅡグラノアの養父だった。

「ヴォガスさん、今日はずいぶんと機嫌が良いですね」

と、酒場の店主が言って、追加の酒をヴォガス達のいるテーブルに置いた。

それをヴォガス達は奪い合うようにして手に取る。

そして、ジョッキいっぱいに注がれた麦酒をゴクッゴクッと喉を鳴らしながら飲んだ。

「ぶっはー！ 機嫌が良いのがわかるか店主！」

と、誰よりも早くジョッキを空にして、ヴォガスは店主にそう言った。

その顔はアルコールで少し赤みが目立つが、それよりも目立つのはその笑顔だ。

まるで、誰かにそう言ってもらえるのを待っていたかのように実に嬉しそうだ。

それを見た店主は心得たものでヴォガスに笑顔で言った。

「はい。今日は一段と機嫌がいいように見えますよ。なにかいいことでもありましたか？」

すると、それを聞いたヴォガスは満面の笑みを浮かべ懷をガサガサと探り出す。

「うむ！ 実は今日これが届いてな」

とヴォガスは嬉しそうに一枚の紙を取り出した。

店主はそれを見てヴォガスにそれがなんなのかを聞いた。

「それは？」

「うむ、これはトールからの手紙じゃ！」

「「えっ!?!」」

それを聞いた店主も店の酔っ払いたちも全員が驚いて、その手紙に注目した。

つい先日、この町から旅立った青年の事を彼らもまた心配していたからだ。

それは、十年前の戦争が理由だ。

十年前の戦争で、トールの両親は町の人間を一人でも多く救うため、足止めをして敵の進軍を遅らせた。

その事に町の住民は大変な恩を感じていた。

おかげで町の人間は全滅せず、町を完全に壊されなかった。

だから生き残った町の住民は、トールを町を全滅から救ってくれた恩人の子として、いつも気にかけていた。

トールが町から離れると聞いた時は、町の住民が皆心配して、引きとめようとしたほどだ。

そのツールからの手紙。

酔っ払い達は一気に目が覚め、その手紙の内容を聞こうとヴォガスに詰め寄った。

「ヴ、ヴォガスさん。手紙にはなんて書いてあるんですか？」「元気にやってるのか!？」「なにか困った事とか書かれてないか？」「風邪とか引いてないだろうな？」「腹はすかせてないか？」

と、まるで心配性の母親の様な台詞が酔っ払いたちの口から出てくる。

それを聞いて、ヴォガスは「…お主らはいつからツールの母親になった」と若干呆れている。

「んなあことどうだっていいから、手紙の内容教えてくれよ!」「そうだそうだ!」「はやくはやく」「なんて書かれてるんだ!」

だが、酔っ払い達はそんな呆れた言葉など耳に入らないようで口々に手紙の内容を教えてくれと催促する。

それを見たヴォガスは勿体つけるのはやめようと「では、」と言って手紙の内容を話し始めた。

手紙の内容は多くはなかった。

学園に通ってからすぐに手紙を書いたのだろう、手紙は学園の事について大雑把に書かれており、入学してすぐに友達が出来たとか、授業が大変だとかが書かれていた。

手紙は三枚ほどあり、一枚は学園での事。

二枚目は町の住民に対して、心配するな、頑張ってる、大丈夫だ、など気を使った文が書かれていた。

それを聞いた酔っ払い達はしみじみと手紙に書かれた内容に聞き入っていた。

「では、最後の一枚だの」

だが、最後の一枚を読もうとした所でヴォガスが少し口ごもった。

それを見ていた酔っ払いたちはどうしたのかと首を傾げる。

そして、しばらく「むう」と悩んだ後、

「…店主任せた。手紙はしばらく預ける。ワシは用を思い出したので今日は帰る」

と言って手紙を店主に渡すと、そそくさと帰ってしまった。

それを呆然と見送った酔っ払いと店主だが、それよりも最後の一枚の内容が気になった彼らは最後の一枚を店主に早く読むように頼んだ。

そして、しばらく読み進んでいくうちに、彼らはヴォガスが帰った理由を知った。

照れくさかったのだ。

手紙にはツールが養父に対して、心配する言葉や感謝の言葉が書かれており、聞いているこっちがむず痒くなるほどだった。

「そして最後に…、ん？ おやおやこれは」

と店主はなにやら手紙の最後を読んでニコニコと笑っている。

「おいおい、マスター！　ここまで来て最後の最後にもったいぶるのは止めようぜ！」

酔っ払いたちは店主がもったいぶっているのだと思い、早く言ってくれと催促した。

「いやいや、すいません。あまりにも泣かせる言葉が書かれていたので」

「ん？　なんか最後に書かれてたのか？」

「ええ、素晴らしい言葉が書かれていましたよ。是非皆さんも見てください。」

「「？」」

店主がそう言って酔っ払いたちの座るテーブルに手紙を置いた。

「んー？　どれどれ」「なんだなんだ」「なにが書かれてたんだ？」

「ちょっと詰めるな詰めるな」「お前こそ詰めるな」

そして、酔っ払い達が手紙の最後を読む。

そこにはこう書かれていた。

最後に、酒を飲むのもいいですけど程々に。

ではまた今度、手紙を書きます。

世界一の鍛冶師にして我が師匠ヴォガスIIザールへ

貴方の弟子にして、不肖の息子トールⅡグラノアより

それを見た酔っ払い達は口に笑顔を浮かべた。

「ああなるほど」「これはキクなあ」「いやあ、良い子だな」「うんうん。」「ヴォガスさんが帰る訳だ」「よしじゃあ、あのひとの分まで飲んでやるか!」「おし付き合うぞ!」「朝まで飲むか!」「おおー!ー!ー!」

そして、彼らは夜が更け、朝になるまで酒を浴びるように飲んだ。

閑話ゝ手紙（後書き）

「やさしい」鍛冶師っぽいところが見たいという意見があったので、主人公のやさしい面を書いて見ました。

少しは主人公の「やさしい」所を見せることが出来たでしょうか？

期待に沿えたのなら幸いです。

閑話 バレンタインデー

一年の中でこの日は、トールにとって実に怖ろしい日になる。

バレンタインデー

女性が好意をもつ男性に、チョコを渡す日。

だが別に、トールに好きな娘がいて、その子から毎年チョコがもらえないのが怖いとかそういったことではない。

そんな甘い話ではない。

ことの始まりは数年前のバレンタインデーだ。

その日、トールは依頼された品を返しに来ていた。

品物は壊れた鍋だ。

鍋の底に穴が空いてしまったので、直して返却に来たのだった。

トールはその鍋を持ち主の家の奥さんに返し、何か食料でも買ってから自分の家に帰ろうとしたところ、家の中にいた奥さんの子どもに腹にタックルされた。

「ぐおっ…！」

頭がみぞおちにあたり思わず膝を突きそうになった。だが、そこは年長者の意地でなんとか踏みとどまる。

でも、そんなトールのことなど子供は気にしてはいない。

子供は笑顔でニコニコ笑いながらトールの服の端っこを握って、紙に包まれた小さなお菓子を見せてきた。

トールはおいしいお菓子でも自慢でもしに來たのかと思いながら、ずきずき痛む腹を気にしながら目線を子どもと合わせて話しかけた。

「あー、それどうしたんだ？ お母さんにもらったのか？」

「違うっ！ トール兄ちゃんにあげるのっ！」

トールは思わず「は？」という顔になり、子どもとその母親を見た。

すると、母親のほうから「今日はバレンタインだからよ」とにこやかに言われて、やっと理解した。

おそらく、背伸びしたい子どもが父親以外の人にチョコでもあげたくなったのだろう。

なんだか微笑ましいと思いながら、チョコをもらってお礼の言葉をいった。

「そうかそうかー。いやー、ありがとう。あつ、必ずお返しもするからな」

「うん！ 楽しみにまってる！」

トールは頭でも撫でてやろうかと思ったが、背伸びしたい子どもにそれはまずいだろうと思ってそれは止めておいた。

そして、トールは最後にその家の奥さんと子供に手を振りながら自分の家に帰っていった。

そして、トールは家に帰ってからお礼の品を色々と考えた。

色々と考えた結果。

お返しのおホワイトデーの日。

トールはあのチョコをもらった子供の家にいき、さまざまな動物の絵が彫られた手製の木箱をプレゼントしたのだった。

もちろん、箱の中には飴玉のお菓子もいっぱい入れている。

少し出費はかさんだが子供はとても喜び、トールも喜んでもらえてとても嬉しかった。

だが、トールは知らなかった。

その子供には少し歳の離れた姉がいて、…その姉がおしゃべりだったという事に。

次の年から、『素敵なお返しをしてくれるトール』に毎年沢山のチョコが渡されるようになった。

トールは、毎年何にかと理由を付けてそれらを断ろうとする。

だが、そのたびに。

『大丈夫！　どれだけ時間がかかってもトール君は必ずお返しをしてくれると信じてるからっ！』

『そうよ！　トール君はお返しは必ず返してくれる義理堅い人なんだからっ！』

他にも。

『あっ、そのお菓子はなに？　とてもおいしそうね！　えっ、これがお返し？　もう、トール君たら冗談ばかり』

『えっ、妹にはあんなに素敵なものを送って、私には飴玉？　これって何？　私が妹ほど可愛くないってこと？』

…もう、二月から三月はトールにとって地獄だった。

しかも、彼女達はチョコの包みにカードを挟んで、それを注文書にして欲しいものを強請るのだ。

そのあまりの極悪ぶりには、町のすべての男達が同情し、その季節になるとトールの家に色々な包みを送る。

仕掛け

花祭りは例年通り盛大な盛り上がりを見せて終わった。

そして、祭りが終わり数日がたつと、街である噂が流行した。

その噂はパレードで見た騎馬騎士の鎧についてだった。

パレードに出てきた騎馬騎士の鎧はミスリルで出来ていた。しかも、その鎧は白銀に輝き無薬品加工で作った鎧に間違いない。

しかし、それを作れる者はドワーフしかないはずなのだが、王都にはドワーフは一人も居らず人々は首を傾げた。

『一体誰が作ったのか？』

王都の人間は暇があればこの話を何度も話し、勝手な憶測をしあっていた。

例えば、「学院が新しい加工技術を開発した」「王家秘蔵の鍛冶師が居てそいつが作った」「気まぐれなドワーフがやってきて置いていった」「ギルドがドワーフに注文して作った特注品だった」等様々だった。

中には、「学院の生徒が作った」等という冗談の様な憶測もあった。

様々な憶測が飛び交ったが結局のところ、誰にも真相がわからず

に祭りから一週間がたった。

そして、花祭りが終わり一週間が過ぎたある日、街の広場にある看板が立てられた。

看板は木製の看板で白い張り紙が張ってあった。

街の人間がなんだなんだと思い見てみると、張り紙にこう書かれていた。

『先日の花祭りで白銀の騎馬騎士の鎧を作った鍛冶師へ、私は貴公を探している。』

是非、私が所有する工房で働いて欲しい。

貴公がその気ならば街で一番大きな工房に足を運んでくれ。

ガルギスⅡヴァン

Ⅱラウンディ子爵 』

看板は、例の花祭りで騎馬騎士の鎧を作った鍛冶師を探す内容だった。それも、貴族が探していると言う内容だ。

これには街の人間は驚いたが、看板の一番下に書かれた貴族の名前を見て納得した。

その貴族は、先代から爵位と良質のミスリルが採掘される鉱山の経営を引継ぎ、巨万の富を築いた人物だった。

そして、その貴族は金に物を言わせ、腕の良い鍛冶師を自分の所有する工房で雇っているという話だ。

おそらく例のパレードで見た騎馬騎士の鎧を見て、それを作った鍛冶師を雇おうと探しているのだと街の人々は理解した。

看板を見た街の人々は、これで噂の鍛冶師は近いうちにこの貴族の工房に足を運ぶだろうと、どこか残念そうにその場を去っていた。

一人、また一人とその場を去り、最後にそこに残ったのはたった一人の青年だけだった。

「……………」

青年は周りに人がいない事を確認した後、おもむろに懷から何かを取り出す。

とりだしたのは小さな黒炭の切れ端。

青年はそれを持って看板に近づく。

そして。

ガッ！

ガリガリガリガリガリ！

看板の張り紙に向かって黒炭の破片で、ガリガリと勢い良く擦り始めた。

ガリガリガリガリ！

ガリッガリッ！

ガッ！

「……こんなもんでいいか」

看板に黒炭を擦り続ける行為は、青年が満足した事で直ぐに終了した。

そして、青年は黒炭をへし折ってその辺に捨て、何事もなかったかのようにその場を去った。

後に残ったのは、張り紙に黒炭で汚く落書きされた看板だけ。

看板にはこう書かれていた。

『紛い物を作らせる主人の所で働く気は無い。他を当たれ

噂の鍛

冶師より』

——この看板は注目を浴び、瞬く間に噂となった。

看板に落書きがされた次の日、怒った貴族は代わりの看板を立てた。

内容は前に立てたものとは違い、このような言葉が書かれていた。

『…貴公は何か勘違いをしているようなので説明する。

私が工房で作らせているミスリルの武具や装飾品は、決して紛い物などではない！

私の工房の物は高品質のミスリルを材料に、腕の良い職人達に鍛冶をさせた一級品の物ばかりだ。

それを紛い物などと呼ばれるなど実に不愉快だ！

：通常なら貴族不敬罪で処罰したいところだが：、私は心が広い。早々に私の工房に来て謝罪と雇用契約をするならば許すことにしよう。

：だが、もしこれを拒否するならば私は貴公を処罰する。

ガルギスⅡヴァン

Ⅱラウンディ子爵』

これを見た街の住人は、「貴族の怒りを買った」と騒ぎ、噂の鍛冶師はどうするのかとヒソヒソと周りで話し始めた。

ある人は、「無礼を詫びおとなしく雇われるだろう」と言い、またある人は「面倒ごとが収まるまで王都を離れるのでは？」

と噂しあった。

街の住民は、誰もが噂の鍛冶師が「謝罪」か「逃げる」かのどちらかの選択をするだろうと予想した。

だが、鍛冶師がとった選択はそのどちらでもなかった。

『金と女でボケたアンタに『本物』を見せてやるから、明日の正午この広場に来い。』

追記 ついでにアンタが言うところの一級品も持って来い。

の鍛冶師より』

噂

鍛冶師がとった行動。

それは「挑発」だった。

広場の看板の一つに、いつの間にかこのようなものを書いて、貴族を挑発した。

これにより、只でさえ頭に血が上っていた貴族はさらに怒り、興味を惹かれた街の住民は次の日、広場に溢れかえる事となる。

仕掛け（後書き）

あと一話ほどでこの貴族とのいざこざの話を終わらせようと思っています。

色々と周り道をしてしまいすみません。

今後は気をつけます。

勝負1（前書き）

完成にもう少し時間がかかりそうなので二つに分割します。

書くのが遅れて申し訳ありません。

勝負 1

「……………」

「……………」

場所は王都にある広場。

其処では大勢の人々が二人の睨みあう男達を遠巻きに見ていた。

一人は身なりの良い二十代後半の男。格好からして貴族かと思われる。

そして男は部下らしき屈強な男を数人引き連れている。

対してもう一人の男は十代後半の青年だ。

青年は身なりの良い男とは違い一人だけだった。

ただ、身なりの良い男と決定的に違うのは背中に大きな「荷物」を持っているところだろう。

「…貴様が『噂の鍛冶師』か？」

身なりの良い男が青年を疑わしそうに見ながらそう言った。

「そういうアンタは勘違いの貴族様か？」

青年はそれに挑戦的な言葉を返す。

男は顔に怒りを浮かべ、青年は顔に挑戦的な笑みを浮かべる。

こうして戦いは始まった。

「…どうやら『噂の鍛冶師』本人のようだな。」

目の前の男、ガルギスⅡヴァンⅡラウンディ子爵は低い声でつぶやいた。

そして、苦虫を噛み潰したような顔で話を続けた。

「…『噂の鍛冶師』よ。今なら間に合う、私に謝罪しろ。」

「ん？」

「この場で地面に額を擦りつけ私に詫びろ。」

「……………」

「そして、私の工房で働くと誓え。それで今回は特別に手打ちにしておやる。」

「……………」

「私はお前を高く評価している。」

「……………」

「最初は看板に書かれたことに腹を立て不敬罪で死罪にしてしまおうかと思ったが惜しくなり止めた。……何故だかわかるか？」

そう言って、子爵は勿体つけるようにトールに聞く。

「……………」

だが、トールは子爵の言葉に対して無言だった。

「ふむ、わからないか。」

それを見て子爵は少し不満気な様子だったが、すぐに気を取り直し、子爵は鎧の利用価値をトールに向かって喋り始めた。

「それは、あの鎧を量産できれば今まで以上の財が築けると気づいたからだ。あの鎧があればもっと教会やギルドの連中から金を搾り取れる。そうなれば、私の評価も上がりこれからはもっと優雅な暮らしが——」

子爵は大げさな身振りで喋り続けるが、それは直ぐに中断される。

「あー、うるせえ」

その理由は、トールが苛立ちを込めた口調で子爵の話を止めさせたからだ。

「…さっきから本当にうるせえ」

と、子爵の言葉を遮ったトールは背中に背負っていた「それ」を取り出した。

「それ」は白い布でぐるぐるに巻かれた棒状の物体で、トールが広場に着く前から背負っていたものだった。

「そんなアンタの戯言はどうだっていいんだよ」

トールは棒状の物体から布を取りながら言う。

子爵は自分の台詞を乱暴に遮られた驚きと、トールの言葉の意味がわからず呆然としている。

シュルリ　シュルリ

子爵が呆然としている間に、ツールは白い布を全て取り終わる。

「だいたい、俺がここに来たのはアンタに謝るためでも雇われるためでもないんだよ」

そう言って布から取り出した「それ」を子爵に向かって突きつけるようにして見せた。

「「!？」」

「それ」を見て、子爵も周りで見ていた人々も目を見張った。

「それ」は、白銀に輝く剣だった。

銀の輝きを濃縮し輝きの純度を高めたかと思わせる、鮮烈な輝きを持った美しい剣。

柄や刀身には美しい模様の装飾が施されており、武器というよりもまるで芸術品のような剣だ。

だが、見た目の美しさとは裏腹にその剣は強い凶暴性を秘めている。

剣は一メートル半と通常の剣より長く、そして刃が広く身が分厚い。

さらに、見た目からもわかる圧倒的な重量感。

剣は分類として「グレートソード」と呼ばれる物で通常の剣よりも

長く重い。

その剣から繰り出される剣戟の破壊力は、数ある武器の中でも上位に位置する。

そして、トールはその剣を子爵に突きつけたまま言う。

「俺はバカ貴族に『本物のミスリル』がどんな物なのか教えてやる為に来たんだよ」

「なっ、貴様!？」

トールが子爵に向かってそう言った瞬間、子爵は怒りで顔赤くし、トールに何かを言おうとする。

だが、

「『持って来い』」

「っ!？」

剣を突き出した状態のトールが凄みのある声でそう言うと、子爵は言葉を飲み込み押し黙った。

そして、子爵を黙らせたトールはゆっくりとした口調で子爵に命令する。

「昨日、看板にアンタが作らせているミスリルを持ってくる様に書いておいた筈だ。その『紛い物』のミスリルを今すぐ持って来い」

そう言って子爵に向かって大剣を突きつけるトール。

そして、黙り込んだ子爵を見ながら、トールは底冷えする声で続けた。

「俺が『本物』を見せてやる」

勝負1（後書き）

誤字と脱字の報告と感想をお待ちしています。

あと、活動報告で短い小説を書いたので読んでくれると嬉しいです。

そして感想を書いてもらえらるともっと嬉しいです。

勝負2（前書き）

すいません。まだあと一話かかりそうです。

そして、時間がかかったわりにそこまで長くありません。

次の話はなるべく長くしようと思います。

勝負2

「用意は出来たみたいだな」

俺はそう言って、目の前にある剣を見た。

目の前の剣は、子爵が作らせているミスリルの剣だ。

剣はバスタードソードと呼ばれる大型の剣で、刀身が1、4メートルほどと長く刃が狭い。

それを見ながら俺は手に持つ大剣を軽く何度か振った。

すでにミスリルは俺のマナと同調しているため剣は羽の様に軽い。

俺の剣の出来は申し分ない。

しかし、久しぶりに「使う」ので少し不安だった。

そうして少しの不安を抱えたまま、俺は子爵のミスリルの前に立った。

子爵のミスリルは抜き身のまま木製の台座に置かれ、地面に平行するように置かれている。

「これがアンタが作らせた『一級品』のミスリルで間違いないよな？」

俺はその台座の前で台座の横にいる子爵に確認をとった。

「そうだ。これこそ私が職人達の作らせた一級品のミスリルだ」

「……そうか。」

自信満々な子爵の言葉に俺は適当な相槌を打った。

すると、子爵が薄笑いを浮かべながら俺に言った。

「貴様本気か？」

「はあ？」

俺は子爵の言葉に首を傾げた。

「何がだ？」

意味がわからず、俺が子爵に聞くと

「…っ。本気でミスリルで出来た剣で、同じミスリルの剣を斬るつもりかと聞いているのだっ！」

子爵が真っ赤な顔でそう言った。

「あー、そういうことか」

俺は子爵が言おうとしていることを理解した。

だからあっさりと答えてやる。

「本気だ。」

俺と子爵がこんな事をしているのは、俺が子爵に本物のミスリルの力を見せるためだ。

子爵が持ってきたミスリルの剣を、俺が持ってきたミスリルの剣で『ぶった斬る』

これによって本物のミスリルがどんなものかを見せ、子爵が作らせているものが紛い物だと証明する。

見事斬る事に成功すれば子爵は自分が作らせているものが紛い物だと認める。

だが、失敗した場合は子爵を侮辱した罰として俺は子爵の言いなりとなる。

これを剣を突きつけた状態で「交渉」したら、子爵は少し青ざめながらも了承した。

ちなみに、先ほどの子爵とのやり取りは子爵が俺にプレッシャーをかけに來ただけの意味のないやり取り。

その証拠に俺にプレッシャーがかからないと分かると「ふんっ」と鼻を鳴らし離れていった。

それを俺は見送ってから斬る準備を始めた。

「——ふうっ」

俺は細く息を吐き呼吸を整えた。

まずは体中の魔力^{マナ}を一つに集める。

俺は魔術師ではないので魔力^{マナ}の複雑な操作はできないが、魔力^{マナ}を集めることぐらいなら出来る。

「…よく見ろよ」

俺は囁くようにつぶやいた。

子爵や多くの人間はミスリルを勘違いしているが、ミスリルはただの武器の素材ではない。

ミスリルで作った武器が使用者にどんな影響を与えるのか、そしてどんな事が出来るのかを多くの人間が知らない。

だからミスリルを単純な武具の素材としか見ていない。

俺は剣に「力」を込める。

だが、力と言っても腕の力ではない。

『魔力』だ。

俺は体中から集めた魔力を剣に集中させた。

ミスリルは体の魔力マナの流れをスムーズにする。

魔力マナがスムーズに流れるようになった体は、魔力マナを制御することが容易となる。

俺はさらにミスリルの力が最大限に発揮されるよう、剣の柄や刀身に補助のまじないを大量に施してある。

剣の形をした純粋なミスリルの塊と、それを補助するまじない。

これによって限定的だが俺は「魔術師の力」を得ることができる。

「魔術師の力」とは、つまりは優れた魔力制御力。

体に流れる魔力を自由自在に操作する力だ。

俺はその力を使って剣に集まった魔力マナを練り込む。

ただの魔力マナの集まりを一つの魔力マナの塊に。

ポウ

練りこんだ魔力マナが発光し、剣が青白く光る。

「ふうっ…！」

俺は青白く光る剣にさらに力を込めた。

頭の中にイメージを描き、魔力^{マナ}の塊を自分の思い通りの形へと変える。

これこそが魔術師の本領。

魔力^{マナ}の変化。

「これが、『本物』の力だ」

次の瞬間

俺は魔力^{マナ}を変えた。

ポオオオオオオオオオオオオウ！！

大量の魔力が『炎』へと姿を変える。

ミスリルで出来た武器は只の頑丈な武器ではない。

ミスリルは最強の魔力強化具だ。

落ちこぼれ以下の魔術師である俺が魔術を使うことが出来る。

魔術師でない人間が魔術を使う。

これこそがミスリルが『聖なる金属』と呼ばれる理由。

「「……………」」

周りの人間が燃える剣と俺を呆然として見る。

俺はそれを見無視するように炎を纏う剣を上段に構えた。

俺は目の前の子爵が作らせたミスリルの剣を見た。

「…………。」

剣は形も輝きも「普通」の剣としてならば上物として扱われる立派なものだった。

だが、ミスリルの武具としては失敗作。

ミスリルの良い点をほぼ全てなくし只の「頑丈なだけの剣」となっている。

俺はそれを見てやるせない気持ちになった。

「…最悪の気分だ」

俺は呟き、剣を持った手に今度は全身の『力』を込めた。

「…最初は牢屋に入れられた仕返しに少し懲らしめるつもりだった。でも『あのチビ』の泣き顔を見てぶっ飛ばしてやろうと考え直した。…だけど」

俺は上段に構えた状態から剣を、肩に「担ぐ」ように持った。

「…今、職人が培ってきた技術が蔑ろにされてるのを見た」

剣からは炎が立ち上り、俺の髪と肌をチリチリと焼く。

だが全く熱いとは感じない。

体を感じる熱さよりも、もっと熱いものが俺の腹の辺りでくすぶっているからだ。

「…もう限界だ」

ブワツと剣からは熱波が吹く。

それを感じながら、俺は広場の隅にいた子爵に向かっていう。

「プライド。今まで築いてきたモノ。この二つを奪う。」

その言葉を言った後、俺は背中が反るほどに剣を大きく振りかぶった。

そして、

ダンッ！！

石畳を割る勢いで足を踏み込み、肩に担いだ炎剣を残像が残りそうな勢いで振り下ろした。

ズドン！！

剣と剣が衝突。

まるで、爆発のような音と振動が周りに響く。

剣を置いた台座はガラス細工のように粉々に砕け、子爵の剣が地面にめり込む。

そして、後を追うように俺の剣も地面にめり込んだ。

その光景を、俺は一番近くで見っていた。

勝負2（後書き）

文才が欲しい。

自分の頭の中をそのまま文にできる才能と知識が喉から手が出るほど欲しいです。

小説書くのが本当に難しいと改めて思い知りました。

色々と愚痴っぽくってなって申し訳ありません。

次回は締めというか結果と事後処理の話です。

勝負3（前書き）

時間がかかりそうなので、出来上がったところだけ投稿しました。
申し訳ありません、まだ続きます。

勝負 3

「……………」

トールは無言で石畳に埋まった自分の剣を引き抜いた。

先ほどまでは炎を纏っていた剣だが今は元の剣に戻っている。

多少刀身に土が付いているが、それ以外はもとの美しい剣のままだ。

刃こぼれやヒビが入っている様子もない。

―だが、子爵の剣は。

「……………」

トールは自分の足元の近くにあった「ソレ」を剣を持っているほうとは逆の手で掴んだ。

「ソレ」はほんの少し前までは剣だったもの。

だが、今は刀身が二つに折れ、刀身のない柄だけが石畳から飛び出している。

それは先ほどのトールの一撃で破壊された、子爵の剣の残骸だっ

た。

「…これが一級品か？」

トールはその剣の残骸を引き抜き、こちらを唾然と見ていた子爵に顔を向けて言った。

「……っ！」

トールの言葉に広場の隅にいた子爵が顔を歪ませた。

「…高品質のミスリルを材料にして腕のいい鍛冶師に作らせたものが、これか？」

「っ…！ き、貴様っ」

子爵は唸り、トールを殺気を込めた目で睨みつける。

そして、子爵は肩を怒らせながらトールに近づき、唾が飛ぶ勢いでまくし立てた。

「ま、魔術を使うなど反則ではないか！ そんな事をすればどんな剣だろうが壊れるに決まっている！」

「……………」

息がかかりそうな近くでまくし立てる子爵に対してトールは、

「…材料はなんだ？」

と、冷たい声でそう言った。

「っ…!?!」

先ほどまで早口でまくし立てていた子爵はその声に威圧された。

そして子爵の代わりに、攻守が交代したかのようにトールが喋り始めた。

「…この剣を作るのに使った材料はなんだって聞いてるんだよ。ミスリルの原石以外に何を混ぜてインゴットを作ったんだ？ 妖精の羽の粉や一角獣の角を砕いた粉末か？ それとも独自の製法で作った新薬か？」

「そ、そんなことを聞いてどうする…」

「俺の質問に答えろ」

トールは自分の質問に対して質問を返そうとする子爵の言葉を遮った。

そして、トールは自分の鼻が子爵の顔につきそうな程に顔を近づけ、怖ろしいほどの無表情でまた質問を繰り返した。

「∴材料はなんだ？」

「あ、うあ…」

子爵は自分を瞬きもせずは無表情で見つめるトールに対して恐怖を覚えた。

それは、今まで「貴族」という特権階級に生まれ、温室育ちの子爵にとって初めての感覚だった。

（な、なんなのだコイツは…！ 貴族の私に、何故こんな行動がとれる！）

特権階級の貴族に対して、平民の、しかもこんな若造が貴族を脅すなど聞いたことがない。

こんな事をすれば貴族不敬罪で首をはねられてもおかしくない。

それなのに目の前の若造は怖れるどころか、質問に答えない子爵に苛立って「ガッ」と胸倉を掴んできた。

そして、胸倉を掴みながらドスの効いた声で「早く、答えろ」と子爵に命令してきた。

「ひっ…！」

子爵はそのドスの聞いた声と、瞬き一つせずに自分の顔を睨みつけるトールの無表情に怯えた。

そして。

「わ、わかった！ い、いま喋る！ だから、その手を離してくれ！」

恐怖心から子爵は、怯えながらトールに材料に使った素材をすべて話した。

それを聞いている間のトールは、一時も子爵の胸倉を掴んだ手の握力を緩める事はなかった

子爵の話をすべて聞き終わったトールは掴んでいた子爵の胸倉を離した。

「くそっ…！」

トールは忌々しそうに吐き捨て、ゲホゲホと喉を押さえて咳き込む子爵を睨んだ。

「おいっ…!」

そしてトールは子爵に向かって何かを言おうとするが、それを遮った人達がいた。

キンッ!!

ミスリル製の槍をトールの目の前で交差させ、動きを封じた二人の男。

「っ…!!」

それは最初子爵の周りにいた護衛者の二人だった。

彼らは自分の雇い主が胸倉を掴まれているのをただ見ていただけではなかった。

トールが子爵の胸倉を離れたのをずっと待っていたのだ。

その証拠に、子爵の胸倉を離れたトールの胸の前で槍を交差させて動きを封じている。

「邪魔を、するなっ…!」

だが、その槍をトールは手で押しのけるようにして子爵に向かうとする。

その様子に槍を持った二人の護衛者は驚くが、子爵に近づけさせないよう、必死に槍に力を込める。

飛び掛らんばかりに子爵に向かっていくトール。

それを何とか止めようとしている護衛者達。

そして、護衛者に守られる形でトールに怯える子爵。

さらにその様子を啞然と見つめる街の住民。

すでに場は修羅場となっており、收拾がつかない。

「これからどうなるのか？」と、その場にいた人達がトールたちの様子を遠巻きに見ていると、意外な人々がこの騒ぎを収める為にやってきた。

近衛師団

王族近衛師団

魔術、剣術、体術に秀でた猛者達が所属する王族お抱えの武装組織。

光り輝く銀色の鎧と国花が刺繍された真っ白なマントをつけた団員達。

団員は高名な武門の家の者や魔術師の家系の者、殆どが上級貴族だ。

王族の護衛や国の重要人物の身边警護が主な任務で、まず街中では見かけない。

だが、その近衛師団が数人、街の広場に現れた。

まるで騒ぎを聞きつけた憲兵のように、人垣を掻き分け、トールと子爵の前にやってきた。

「これは何事ですか」

まず、トール達の前にやってきたのは二人の女性だった。

一人は赤髪の長身の女性、もう一人は金髪のツリ目の気の強そうな女性。

その片方が、子爵に向かって問い詰めるように声をかけた。

それに子爵の方はトールのほうをチラッと見てから、ニヤリと笑った。

そして、

「おお！ 近衛師団のユリア殿とリース殿ではありませんか！ どのようなところで奇遇ですな！」

先ほどまでトールの形相に怯えていた事など忘れたかのように、気味が悪いほどの笑顔で二人の女性に詰め寄る子爵。

その子爵の態度に、赤髪の女性は目を細め、金髪の女性は眉をかめた。

だが、子爵はその様子がわからなかったようで、饒舌に二人の女性に話し続けた。

「いやなに大したことではありません！ この若造が私の工房の商品を『まがいもの』といったばかりか、私に暴力を働こうとしたのでこの様に拘束しているのですよ！」

「暴力、ですか？」

金髪の女性が気になる言葉を聞いて、さらに眉をしかめた。

「そうです！ あろう事かこの若造は貴族である私の胸倉を掴み、暴力を振るおうとしたのです！」

やや興奮した子爵は身振り手振りで、先ほど起こったことを金髪

の女性に語った。

だが、それを聞いた金髪の女性は胸の前で腕を組み、少し考えるそぶりを見せた。

「ふむ、我々がここに来たときに聞いた話と少し違うようですね。我々が聞いた話は魔術を使うテロリストが広場で暴れているという話だったのですが…」

「そ、それは」

それに少し口ごもる子爵。その間違った情報に心当たりはあるのだが、詳しく話すと自分の所の商品があっさりと壊された事を話さなければならぬ。

自尊心の高い子爵には、その話を自分から話すことは若干憚られた。

「…ふむ。まあ、話は見ていた住民やその若者に詳しく聞けばいいでしょう」

「は？」

口ごもる子爵を見て、金髪の女性はそう言って拘束されているトールのもとへと行った。

トールを拘束していたふたりは徐々に近づいてきた近衛師団の団員に困惑する。

「あー、君達？　その子をこちらに明け渡してくれ。子供だがテロリスト疑いがある」

「え、いや、でも、こいつは…」

金髪の女性の命令に戸惑う男達。

子爵に暴力を振るおうとした奴を渡していいのか、と隣で同じ顔をして戸惑う相方とチラチラとアイコンタクトをする。

だが、そんな事をしていると、金髪の女性が「ちっ」と小さく舌打ちしてから

「…いいから、渡せ。うすのろ共が…!」

と言ってから、まるで鬼のような形相で二人を睨んだ。

…どうやら先ほどの子爵とのやりとりではネコを被っていたようだ。

とにかく怖い。これは子爵の不興を買うよりもよほど怖ろしいと感じた二人の護衛者は「ど、どうぞ!」とどもりながらあっさりとトールの身柄を金髪の女性に渡した。

「ああ、それでいい」

金髪の女性はトールの身柄を渡され満足そうに頷きながら、すばやくトールの持っていた剣を取り上げ、両手に金属製の手枷をつけていく。

そして、手枷を付け終わると、赤い髪の女性に手でこっちは終わったと合図した。

「終わったか」

「ああ、後は取調べと、ここで何があったのか聞き込みだな」

「よし。では行こう」

「ああ行こう」

そう言って子爵も回りもポカーンとする中、二人は広場を後にしようとする。

だが、さすがにこのまま何もせずに行かすわけには行かないと思った子爵が二人を止めた。

「ちょ、ちょっと待ってください！ お二方！」

「む？」

「ん？」

その声到手枷のついたツールを挟む形で連行しようとしていた二人は動きを止めた。

「なにか御用ですか？ ラウンディ子爵？」

「な、なにか御用ではないでしょうユリア殿！ 突然現れて、私に暴力を働こうとした若造の身柄を横取りして！ だ、だいたい何故近衛師団が貴方達がこのような場所にやってきたのですか！」

子爵は赤髪の女性に向かい、そもそも『何故貴方達がここにいるのか』と聞いた。

こんな街中の貴族と平民の若造の争いに近衛の人間がしゃしゃり出てくるなど、子爵には訳がわからなかった。

だが、その質問に対して二人の女性は冷たく対応した。

「ここで何があったのか詳しくは知りませんが……。街中で魔術を使うような危険人物を、貴方一人だけの力で拘束できているのでしょうか？」

「あ……！」

そこで子爵は思い出した。目の前の若造が自分の公房で作らせたミスリルを炎の魔術で破壊した事、そして自分を殺しそうな目で迫ってきた事。

あのまま、あの若造を追い詰めていたらどうなっていたのだろうか？

その事を考え、子爵は背筋をぞっとさせた。

なので、子爵は赤髪の女性の言葉に首をふり、身を震わせながら「い、いいえ」と答えた。

それを聞いた赤髪の女性は頷き、「わかってもらえればいいのです。それと、」と言ってうすく微笑んだ。

そのまま、うすく笑いながら何故自分達がここにいるのかを話した。

「今回の話は、『たまたま』城下を見学していた姫様が騒ぎを聞き、我々に騒ぎの鎮火をご命令したに過ぎません」

「なっ！」

その言葉に驚く子爵。

「：ほ、本当の話ですか」

ありえないことに子爵は驚愕し、赤髪の女性にだけ聞こえるように小声で囁いた。

さすがに周りで人がいる中でこんな話をするのはまずいと思ったのだろう。びくびくと怯えながら小声で話している。

その様子に女性は苦笑しながら、

「本当です。城下を見学中にここでの騒ぎを聞き、只ならぬ様子だと思った姫様が我々にご命令しました。『騒ぎを収めよ』と」

「で、ではあなた方がここにいるのはその護衛で？」

「はい、いかにも」

「なんと…！」

赤髪の女性の言葉を聞き、冷や汗が止まらない子爵。

王女の近衛が何故このいるのか疑問だったが、これで合点があった。

おそらく、好奇心旺盛な第二王女辺りが家臣や王にわがままを言
って城下を見学していたのだろう。

そして、ここでの騒ぎの間違った情報を聞いて、慌てて近衛の人
間に騒ぎを収めるように命令したのだ。

なるほど、近衛の人間がここにいる理由はわかった。

ならば、後は出来る事など限られている。

「な、なるほどわかりました。で、では姫殿下には手をわずらわせ
て申し訳ないと後日謝罪に参りますとお伝えください」

「…姫様は必要ないとおっしゃると思いますが。わかりました、伝
えておきましょう」

「よ、よろしくお願いします」

そう言って子爵はせめてこの機会にコネを作ろうと、謝罪と称し
て王女との面会を取り付けた。

「では、我々はこれで…」

「は、はい。お手を煩わせて申し訳ない」

そう言って子爵は二人の近衛団員とあの若造を見送った。

そして、近衛の人間が去った後、地面に唾を吐き、早々と馬車で広場から去っていった。

後に残った街の住民はあまりに急な幕切れに困惑を隠しきれなかったが、これ以上この場にいても仕方ないと、徐々に自分達の生活に戻っていった。

近衛師団（後書き）

予定が狂いました。

何とか早めにこの話を終わらせて、書きやすい話を書きたいです。でも、次話は自分の好きな話をかけそうな予感がします。

そして、ごめんなさい。

タイトルと全く違う主人公で。

書いててコイツキレすぎだと自分でも思うけど、さすがに「キレる鍛冶師」はあんまりなタイトルだと思って変更しません。

そして、自重しません。

馬車の中

「…やっぱり、とんだ欠陥品でした。混ぜる素材を少なくする代わりに、とんでもない物を混ぜてました」

俺は犯罪者なんかを護送するときに使う頑丈な馬車の中でそう言った。

俺の目の前には二人の女性がいて、今のは二人に向けて言った言葉だ。

一人は、牢屋に入れられた俺を助けてくれた王女様と一緒にいたユリアさん。

もう一人は、その部下のリースさんだ。

二人には今回の騒動で色々と手伝ってもらっている。

具体的には、俺がミスリルを作るときに使う工房の手配や看板の落書きなどがそうだ。

それに先ほどの俺の回収などもだ。

王女様が城下に見学などと嘘をついてやってきて、魔術で騒ぎを起こしていた俺を捕まえてくれた。

そしてこの後は、俺を『とある人』の場所まで犯罪者として運んでくれる。

ちなみに、ユリアさんはともかく、リースさんが今回の話で色々
と手伝ってくれたのは、俺にちよつとした借りがあるからだ。

まあそれほど大したことではないし、単なる誤解だったので俺は
気にしていないのだが、本人が気にしているので、本人の希望通り
手伝って貰う事にした。

「とんでもないもの？　なんだそれは？」

すこし考え事をしていると、先ほどの言葉に反応したリースさん
が興味深そうに聞いてきた。その横にいるユリアさんも声には出さ
ないが目で「話せ」と言っている。

正直、答えると気分が悪くなりそうだったが、二人にも聞かせた
ほうが良いと思い俺は答えた。

対面に座る二人に向かって、俺は小さく「∴モンスターの体の一
部です」と答えた。

「？　そのどこがとんでもないものなんだ？　武器にモンスター
の骨や鱗を使うのは珍しい事ではないだろ？」

リースさんが俺の言葉に不思議そうに首を傾げた。

確かに、武器を作る時の素材としてモンスターの骨や鱗の一部を
使うのは実に一般的だ。

だが、

「∴確かに、普通の武器や鎧にモンスターの素材を使うのは不思議

じゃないです。スケイルメイルなんかもあるぐらいですし、…でも、それがミスリルの素材に使われると話が変わってくるんですよ」

そもそも、モンスターには『瘴気』と呼ばれる物質が体の中にある。

『瘴気』は時にブレスや毒液として、モンスターの口や爪から飛び出し、人や動物に害を与える。

特に『瘴気』はマナを汚染する。

例えば、人の体に『瘴気』が入るとマナの流れを阻害して、怪我が治りにくくなるばかりか、病魔にかかりやすくなる。

まあ、ここまではモンスターに関しての一般常識内だろう。

問題は次からだ、

「ミスリルにモンスターの素材を混ぜると、ミスリルは瘴気に汚染されます」

爪や牙に残った瘴気がミスリルと混ざり、徐々に瘴気がミスリルを汚染していく。

そして、次第に使用者も蝕む。

俺はリースさんにそう説明した。

だが、俺の質問に疑問を持ったリースさんは俺にこう聞いてきた。

「…だが、すでに死んだモンスターから剥ぎ取った爪や牙にあった瘴気は消えていくはずだろ？ 現に、モンスターの素材で作った武器を使っていて体を汚染されたなど聞いたことがない」

リースさんの疑問に俺はゆっくりと答えた。

「確かに、モンスターの爪や牙に残った瘴気は時間をかけて徐々に消えていきます。他にも教会に行って聖水をかけて貰えばもっと早く瘴気は消えるでしょう。実際、武器に加工するときはそうやって瘴気漬けの素材を浄化します。…まあ、あの子爵もそれくらいの事ならしていただろうけど」

「なら、別に―」

「ミスリルは例外なんです」

俺はリースさんの言葉を途中で切った。

「……………」

言葉を途中で遮られ、少しムツとするリースさんに向かって俺は詳しく説明した。

「モンスターの研究家等でないと、詳しく知らないかもしれないですけど、モンスターの体に染み込んだ瘴気は、僅かですが残るんです。人体には影響がないほどの微量ですが」

俺は親指と人指し指をつくつかつかないかぐらいに近づけながら、そう説明した。

「…まさか、その微量な量がミスリルを汚染すると？」

そこで、今まで全く会話に参加しなかったユリアさんが会話に参加してきた。

俺はそのことに少し驚いたが、話を続けた。

「そうです。小指の爪の先ほどの僅かな量ですけど、ゆっくりとミスリルを汚染していきます。そして、徐々にマナの通りが悪くなり、使用者の体を蝕んでいきます」

「…それは人のマナに同調しようとする、ミスリルだから起こる影響ですか？」

俺の話を聞いたユリアさんはものすごく真剣な顔で、そう聞いてきた。

俺はそれに頷き答えた。

「そうです。粗悪品の品でも同調はしなくても、マナの流れをよくしようと僅かな補助ぐらいならできます。その時に使っているミスリルが汚染されていると――」

「体が徐々に汚染されると、」

「そういう事です」

「「……………」」

二人は俺の肯定の言葉に黙り込んだ。

「…少し目的の場所まで急いだほうがいいな」

「…そうですねリース。急ぎましょう」

俺の話しに顔を青くした二人は御者の人に向かって急ぐように命令した。

ちなみに、御者は非番だったリースさんの後輩の隊員だ。なんでも一番気の弱くて口の堅い、二人に絶対逆らわない人らしい。

その証拠に、命令を聞いた御者の人が鞭を思いっきり振り馬車が大きく揺れ始めた。

どうやら全力で目的地に向かっていているようだ。

そして、目的地に近づくならばする事がある。

「…それではツール殿。大変心苦しいのですが、縄と口枷を」

「あー、了解です。気にせずやってください」

ユリアさんはそう言って俺の前に縄と口枷を持ってきた。

俺は何をするかわかっていたので、すんなり了承した。

「…では、失礼します」

俺の了解を得たユリアさんは一度両手の手枷を外し、腕と胴周り

を縄で縛った後、両手を後ろ手にしてもう一度枷をつけた。

そして、最後に自害対策の口枷。

見た目は完全に捕らえられた犯罪者だろう。

ちなみに、この格好には意味がある。

俺はこれから街中でテロ行為を働いたという事で、王城に連行される。

一応それが誤解だったと二人から話もあるが、騒ぎを起こしていた原因は必ず聞かれる。

その時に、俺は事のあらましと、子爵が作ったミスリルがどんなものだったのかを話す。

すでに王城では俺を裁くために『とある人』が厳重な警備の中で待っている。

俺がこれから会う人は、あのちびっこ王女の父親にしてこの国の最高権力者。

つまりは、王様。

国王だ。

正直、俺は出来れば会いたくない。

でも、こうしなければあのちびっこ王女をあのバカ貴族から守れ

ない。

この他にも、あのちびっこ王女を守る方法は色々あったが、これが一番早くあの貴族を追い払う方法だと思った。

さすがに、王様の前であの欠陥を言えば、今までの功績も吹っ飛んで王女に近づく事はもうないだろう。

まあ、さすがにバカ貴族のミスリルがここまで酷いものだとは思っていなかったが、

当初は、俺のミスリルでバカ貴族のミスリルをぶっ壊して子爵をへこませた後、王様に『子爵のミスリルは大した事ない』と教えるだけのつもりだった。

それで子爵のミスリルを使う顧客は減って、俺みたいな若造が作った剣に負けたという事で噂を流し、人前に出れなくするつもりだったのだ。

だが、予定は大分狂ってしまった。

モンスターの体の一部を混ぜて作ったミスリル。

これは早く回収しなければとんでもない事になる。

俺は内心あせりながら、揺れる馬車の振動に耐え馬車が王城に着くのをじっと待った。

馬車の中（後書き）

早く次を書けるよう頑張ります。

悪夢

馬車はものすごい速さで王城についた。

そして、王城につくと俺はすぐさまに乗っていた馬車からおろされ、王城の地下にある特別製の牢に入れられた。

一度、牢に入れられる事は事前にユリアさんから聞かされていたので、俺は体の前に手枷をした状態で硬いベッドの上でのんびりと横になった。

俺はここに入っている間に、ユリアさんとリースさんが自分の部下に広場での騒動を調べさせた後、王様に事の顛末を詳細に報告してくれる。

それだけで俺の無実が証明されるだろうが、問題はあのバカ貴族のミスリルの欠陥だ。

アレは早く教えなければ大変な事になる。

でも、なんとかユリアさん達が王様との面会の機会を与えてくれるそうなので、俺がそこで王様にバカ貴族ミスリルの欠陥を話せば問題は無い。

本当ならば、今すぐにも王様の前ですべてをぶちまけてしまいたいのだが、そんな事してもただの罪人の狂言だと思われるしまう可能性がある。

なので、俺が無実でがちゃんと証明された後、何故あのバカ貴族

と騒動を起こしたのかを面会の時に王様に話さなければならない。

しかし、それまでは俺の出る幕はないのでここでじっとしているしかない。

しかし、ただじっとしているとどうしても眠気が襲ってくる。

「ふぁ~~~~」

魔術師でもない俺が無理矢理に魔術を使うと、とんでもなく疲れるのだ。

これは魔力を普段練りなれていない者に起こる現象で、肉体労働の後の疲労によく似ている。

それに、ここ最近はずっと隠れて工房で剣をつくっていたせいで大分寝不足だった。

「あー、やばい。ちょっと、こゝれ、は」

寝不足と、いきなり魔術を使ったこと、この二つが原因で強烈な睡魔が俺に襲い掛かってきた。

しかし、ここで寝ると今必死に働いているユリアさん達とその部下の人たちに申し訳ないと思い、慌ててベッドから離れた。

「さすがに、これなら大丈夫だろ」

ベッドから転がるようにしてどいて、牢屋の鉄格子に背中を預けて胡坐を組んで座った。

背中が硬い鉄格子に当たって痛いし胡坐という眠りにくい体勢をとっている、これなら眠らないだろうと思い、じっとユリアさん達がやってくるまで俺はこの体勢で待った。

だが、体は執拗に睡眠を欲していたのか眠気は全くおさまらず、結局必死の抵抗の末、かなり無理な体勢のまま眠りに落ちてしまった。

…無理な体勢で眠ったせいだろう。

夢を見た。

それもとびきり最悪の悪夢だ。

俺は剣を打ち、それを一人の男に渡した。

男はそれに喜び、そしてその剣を使って周りにいた人を殺し始めた。

俺が突然のことに驚き、慌てて男を止めようとするが、体が動かなかった。

いや、それどころか声も出せなかった。

慌てて自分の体を見ると、俺の体は縄で拘束され、いつの間にかあった狭い鉄の檻に閉じ込められていた。

俺は必死にそこから抜け出して男を止めようとするが、体はまったく動かない。

その間に、男は人を殺し続けている。

男も女も子供も老人も関係なく、男は人を殺し続ける。

そして、気がつけば残ったのは二人の男女だけ。

俺はその二人を見た時、声の出せない口から悲鳴を上げそうになった。

俺は檻の中で男を止めようと必死に手を伸ばす。

だが、檻の中からでは男を止める事は出来ず、男は持った剣で二人の男女に襲い掛かった。

その光景を見た瞬間、俺は口から音のない絶叫を上げた。

二人の男女が襲われている間、限界まで口を開いて何度も喉を震わせた。

肺がつぶれるほどに息を吸って、喉がつぶれるほどに声を出そうとしたが、…だめだった。

二人の男女は剣を持った男に殺された。

俺はその光景を見て、檻の中で男に向かって声もなく叫び続けた。
そんな俺に男は気がつき、剣を持ってこちらにやってきた。

俺はそいつに向かって殺すつもりで手を伸ばした。

すると、何故か縄も鉄の檻も突然消えた。

俺はその事に戸惑いながらも、男に向かって拳を振り上げた。

そして、今にも俺の拳が男の顔に当たる瞬間、男は笑いながら言
った。

「お前の剣は——に最適だ」と

ガッシャーーン！！

「……っ!?!」

鉄格子がものすごい音を立てた事と、手に痛みが走った事で俺は

目が覚めた。

そして、目が覚めたと同時に「はっ、はっ、はっ、はっ」と荒い息をついた。

まるで早鐘のように俺の心臓は鼓動している。

俺は拘束された両手で胸を押さえながら、深呼吸を何度も何度も繰り返した。

まるで発作を起こした病人のような姿に牢を監視していた看守が慌てた。

「おいっ！　どうした！」

「はあっ、はあっ…」

徐々に心臓の鼓動は戻っていく。

だが、頭は混乱したままだ。

…先ほどの『アレ』は夢だったのだと言う事はすでに理解している。

だが、俺の剣で人を殺していく男。

その男が殺した二人の男女。

俺はその事を思い出し、顔を両手で覆った。

鉄格子の外からは看守がうるさいほど叫んでいる。

だが、俺は自分の感情が落ち着くまで、動く事はできなかった。

死んだ二人の男女。

その顔には見覚えがあった。

忘れる事などできない。

俺が小さい頃に死んでしまった。

俺の、両親だ。

戦争で俺や街の人を守るために死んだ、俺の両親。

そしてその両親が、夢の中で男に切り殺され、また死んだ。

夢の中の出来事だと云うのに、本当の両親はもうこの世にいないというのに。

両親の死を見るのは、体が裂けそうなほど悲しかった。

そして自分の作った剣が、自分の大切な人を傷つける姿を見るのは。

「……………」

…死んでしまいたくなるほど、つらかった。

謁見（前書き）

量が多そうだったので二つに分けます。

謁見

最悪な事はまだ続いた。

俺があゝの悪夢から回復する前に、王との謁見が叶ってしまったのだ。

これはユリアさん達が頑張ってくれたおかげなのだろうが、今は最悪のタイミングだった。

まるで引きずられるように牢から出され、両手に鉄枷が嵌められた。

そして、四人ほどの兵に自分の周りを囲まれる形で俺は歩き始めた。

向う先は王のいる「謁見の間」。

俺はそこで自分の無罪と子爵の作るミスリルの危険性を説明しなければならぬ。

…だが、今の俺にそれをまともに説明できる自信がない。

俺はまだあの悪夢から回復していない。

これから王との謁見で気合を入れなければならないのに、俺の気持ちは沈んだままだ。

何とか気合を入れようとするけれど、その度にあの悪夢が頭の中

でチラつき余計に体調が悪くなってしまう。

体調は最悪、頭の中もぐちゃぐちゃ。

…そんな状態で俺は王に謁見した。

けれど最悪な体調で望んだ王様との謁見は、意外にもスムーズに進んだ。

「ふむ、おおよその話はこちらが把握していたものと一緒だったようだ。だが、情報が混乱して間違った話が我の耳に入ってしまったようだな」

多分、ユリアさん達が大方のはなしを王様に説明してくれていたのだろう。すでに王様は事のあらましを知っていたようだった。

「……………」

「…そんなに脅えるでない。話を聞く限り、そなたを罰するつもり

は我にはない」

「はい…申し訳ありません」

「よいよい」

そう言って、王様は手を軽く振るう。

俺の体調はあいかわらず最悪だったが、逆に余計な力が入らず楽に話せた。

「そなたは自分の作った物の力を見せたわけではないか、そう畏まるな。…まあ、貴族に対して少し暴力的だったようだが…」

「本当に申し訳ありませんでした…」

「だから、よいと言っておろう…」

そして、なにより意外だったのがこの国の王様の人柄だった。

俺は王様は気難しくておっかない人なのだと思っていたが、この王様は全然違った。

王様は顎髭を生やした渋い人で、明るく冗談の好きな人だった。

「本当によいのだ。こんな事はあまり言いたくはないが、あの者は最近少し調子に乗り過ぎていたのだ。…貴族の子女やメイド達からの苦情が我の耳にも入って来ていたほどにな」

「……………」

「だから、今回の事はあの者にとっていい薬だったのだ。」

「……はい」

今も俺の誤解が解けると、冗談交じりに俺の緊張を解こうとしてくれる。

…不思議だ。

王様と話していると、気持ちがとても楽なる。

ずっと、このまま話を続けていたいと思ってしまう。

—だけど。

子爵の汚染されたミスリル。

アレについて、俺は今すぐにでも王様に話をしなければならない。

その為には、王様との会話は今すぐ終わらせるべきだ。

でも、この心地よい時間を終わらせるのは、すこし辛い。

「……………」

俺は心の中にあつた迷いを振り切るため、きつく目を閉じた。

そして、腹に力を入れ覚悟を決めた。

覚悟を決め、俺は声を出す。

「…国王陛下、無礼で大変申し訳ありません。自分は、聞いていた
だきたい話があるんです」

ざわざわ　ざわざわ
ざわざわ　ざわざわ

「どうか自分の話を聞いてください。…とても、とても大事な話な
んです」

恐れ多くも王様に話しかけてしまった俺を見て、王様の周りの人
達が眉をしかめている。

貴族ならまだしも、平民が王に向かってこのような事を言うのは
酷く無礼な事だ。

無礼な俺の事を貴族だけでなく、警備の人間も冷たい目で見てい
るのがわかる。

でも、ただ一人。

王様だけは違った。

王様は俺の無礼な態度にも眉をしかめる事はなかった。

いや、それどころか。

「…何か訳ありのようだな。いいだろう話してみなさい」

王様は俺の言葉を聞いて、真剣に話を聞く姿勢をとってくれた。

俺は王様のその姿を見て、周りから余計な邪魔が入らないようにすばやく話を始めた。

「はい、実は――」

そして俺は、子爵の作らせているミスリルの危険性について、王様に全てを話した。

材料にモンスターの爪や牙が使われ、瘴気がミスリルの特性を用いて人を汚染していく危険性を俺は冷静に語った。

初めは眉をしかめながら聞いていた人達も、話が進む内に徐々に顔色が悪くなっていった。

おそらく自分や身内が買っていたりしたのだろう。

もし、俺の話が本当ならば彼らはかなりまずい事になる。

瘴気に汚染されると、「浄化」にかなりの手間と金がかかる上に、下手をすると命にも関わるからだ。

俺が最後に「詳しく調べればはっきりわかるはずですよ。特に長く使っている物はそれだけ汚染されてますから、はっきりとわかるはずですよ」と言ったところで周りが一気に騒がしくなった。

そして、俺の話を聞き終わった王様はというと、先ほどまでとはまるで人が違った。

眉間に皺を寄せ、口を真一文字に結び、目じりを吊り上げ、近くにいた側近らしき人にびしびし指示を飛ばす。

王様はすぐさま子爵の工房に兵を向かわせ、さらに高位の魔術者を呼ぶ。

臣下達に指示を出し続ける姿を見て、俺はこの人は本当に王様なんだと改めて認識した。

そして、王様が子爵の工房に兵をやり、そこで作らせていたミスリルの武器や装備を何点か持って来させ、高位の魔術者に持たせた武具に「穢れ」がないか調べて貰った。

結果、俺の予想は全てあたり、武具のすべてに大小の違いはあるが瘴気汚染による「穢れ」が発見された。

これには高位の魔術師も、その様子をみていた人達も驚き、さすがこの事は大騒ぎとなった。

その騒ぎを静めるために王様はすぐさま以下のような指示を飛ばした。

『子爵の工房はすぐさま営業を一時停止。』

『武具店なども、子爵の工産物の物はすべて回収。』

『教会の一部でも、子爵の工房で作っていたミスリルの製品を使っていた為、すぐさまそれらの使用停止を呼びかけた。』

『もちろん、それらの製造に関わっていた子爵は早急にお城に来るように厳命。』

この事から子爵にはなんらかの重い処罰がくだされることが予想された。

これで子爵のほとんどもない不祥事も、あのちびっ子王女との約束も、すべて片付いた。

俺は明日からは学生として懐かしいあの学院の寮の部屋で眠れる。

そんな安心を、俺はしていた。

でも、そんな俺の安心はすぐに吹き飛ぶ。

：いや、それどころか王都に来てから一番つらい経験をこの後する事になる。

王様が指示を一通り終えて、じっと俺の顔を見つめた後、こんなことを話し始めた。

「どうやらそなたには大変な借りが出来てしまったようだ…。誤解で牢に押し込めてしまっただけでなく、貴族の不祥事まで知らせてもらってしまおうとは…」

「あー、いや。それは気にしていませんので、どうかお気に病まずに」

王様がなんだか気落ちしているようなので、俺は恐縮してしまう。

そんな態度をされると、俺はどうしていいのかわからなくなる。

だが、王様は俺をさらに混乱させるような事を言う。

「そう言うな、是非とも我に詫びと感謝をさせてくれ」

「え…」

詫びと感謝？

（んー、それはちょっと）

正直なところ、感謝はいいけど詫びはちょっとまずい。

だって、俺が牢屋に入っただけは計画のうちだったのだ。

なんだか騙しているようで悪い。

そんな事を考えていると、王様がちょっと困ったような顔で俺を見て言った。

「…だが、我は国王だ。人前で軽々しく頭を下げるわけにはいかぬ。そのため、どうしても形ある物でしかこの気持ちをあらわす事できぬ。…そのかわり何でも欲しいものを言ってくれ、我が必ずそろえて見せよう」

…なんだか、考え事をしている間に段々おおごとになっている。

これはまずいと思い、頭の中で今欲しいものを思い浮かべた。

すると、一つの物が思い当たったので王様をお願いしてみた。

「でしたら、国王陛下。お願いがあります」

「おお、なにか望みの品があるのか？ なんでも言ってくれ、すぐさま用意させよう」

王様は喜ぶ顔を見て、ちょっと落胆させてしまうかとも思いながら俺は願いを言った。

「俺の剣を返してください」

俺の言葉を聞いて、すこし哑然とする王様。

少し言葉を震わせながら俺に聞く。

「…そんな事でよいのか？」

「はい」

「…もしかすると、それは子爵のミスリルを破壊したという剣のことか？」

「はい、そうです。ここに来る前に没収されてしまい、今手元になんです」

「…ふーむ。まあ、そなたがそう望むならすぐに持って来させよう」

「ありがとうございます」

「…ふーむ」

なんだかすこし考え込んでいる王様とは違い、俺はホッとしている。

たとえ一時的でも人の手に自分の剣があると言うのは、とても落ち着かなかったからだ。

でも、これで剣は俺の手元に戻ってくる。

俺はこの時までには安心していた。

悪夢の始まりは、俺の手元に剣が返ってきたことから始まった。

布に包まれたそれは確かに俺の作ったミスリル製の剣で、少し布を外すと白銀に光る金属が見えた。

紛れもなく自分の剣だ。

俺がホッとしていると、王様がこちらをじっと見ていることに気がついた。

その目は子供が見たこともない昆虫を見た時の目にそっくりで、

キラキラとしている。

なんとなく王様の目線を追ってみると、俺の手にある剣を包んでいる布に行き着く。

なので、俺はなんとなく目で「見てみます？」と合図を送ってみた、すると王様は満面の笑みを浮かべた。

俺はなんだか嬉しくなってきた、剣を包んでいた布を一気に外した。

すると、布から出した剣を見た王様は「おおっ！」と驚き、王座から腰を浮かし、謁見の間にいた護衛や国の偉い人たちも剣を目を丸くして見ていた。

『聖なる銀』と呼ばれるミスリルの輝きに、みんなが驚いていた。

だが、皆がミスリルの輝きに驚いている中、俺の背後からガシャガシャという金属音が聞こえた。

後ろにいる誰かが鎧でも着こんでいるのかと思い、俺は背後を振り返ろうとした。

すると、

ガッー！

背後にいる誰かを見る前に、俺が手に持っていた剣はその誰かに奪われてしまった。

「あっ！」と思って自分の手を見た後、慌てて自分の背後を振り返った。

そこには思っていた通り、鎧姿の男がいてそいつの手には俺の剣があった。

俺は慌ててそいつの手から剣を取り返そうとすると。

「貴様、これをどうやって手に入れたのだ…？」と語尾を強め、そいつがそう聞いてきた。

しかも、鎧姿の男は興奮しているようで、目がギラギラと血走っていた。

俺は訳が分からなかったが、とにかくこの男から剣を奪い返そうと手を伸ばした。

でも、鎧男は剣を持った手を頭上に上げて俺の手が届かないようにしてる。

俺は今地面に膝を突いて座っている状態。対して男は俺の背後で普通に立っている。

これでは絶対に俺の手は届かない。

俺は若干イラつきながら鎧男を睨むが、鎧男はまた「どこで手に

入れた…？」と言って剣を返すつもりはないようだ。

このままでは話が進まないと思って、俺は仕方なく剣の出所を話した。

「どこで入手したもなにも、それは俺が作った剣だよ」

「何…？」

「俺は鍛冶師なんだよ。鍛冶師が剣を作るのは当たり前だろ？」

「……………」

「わかったら返してくれ。それはあんたの剣じゃない、俺の剣だ」

「……………」

どこかしぶしぶといった感じで鎧男は剣を俺に返した。

俺は剣を返してもらい、すばやく布を剣に巻きつけ、今度は奪われないように両腕で抱え込んだ。

何が起こったのかわからなかったが、とりあえず剣が返ってきてよかったと俺はホッとする。

しかし、俺がホッと一安心しているところ、この鎧男はとんでもない事を始めた。

コイツは王様の前で被っていた兜を外し、俺の横で片膝を突きあ

ろうことかこう言った。

「陛下。コイツが持っているのは間違いなく純粋なミスリルの剣です。先ほどのコイツの話が本当ならば、実に素晴らしい事です。今すぐコイツに騎士隊全員分のミスリルの剣を作らせるべきです」

鎧男は目をぎらつかせながら、口元に笑みを浮かべながら、そう言った。

…ここから、始まった

牢屋で見た悪夢とは違い、目が覚める事のない。

一生忘れる事のできない。

悪夢が、始まった…。

叫び

『純粋なミスリルの剣！ 確かにそれを装備した騎士隊は強力な隊となりますな！』

『いや、騎士団だけではもったいない。他の隊の兵達にも同じような物をつくらせるべきでしょう』

『いっそ武器だけでなく、防具もすべてミスリルの装備に変えてみてはどうでしょう？』

謁見の前にいた国の偉い人達が俺の抱えている布に包まれた剣を見ながら喋る。

それを聞いたたびに、俺の心臓が胸に痛いほど叩いて、殴られたように痛い。

誰かが喋るとその痛みは酷くなり、服を脱げばそこに痣が見えるのではないかと思うほどだ。

誰かが喋っている間、俺は剣を抱えながら顔を伏せて床を目を瞬かせる事なくずっと見ていた。

：俺は彼らの話がたまらなく嫌だった。

自分の剣を、知りもしない奴らのために大量に作る。

…考えたくない。

そんな事は考えたくない。

そんな事のために、鍛冶師になったわけではない。

そんな事のために、鍛冶師の技術を使いたくはない。

だから、王様が鎧男や周りの人たちの意見を聞いた後、俺に聞いた質問に俺はこう答えた。

「…ふむ。周りはこの様に言っているのだが、そなたはどうだ？
この国の兵達のために剣や鎧を作る気持ちはあるか？」

「…自分にはそんな気持ちは全くありません」

ざわざわ　ざわざわ

ざわざわ　ざわざわ

周りの人間が俺の言葉を聞いて目を見張っていたが、王様は静かに微笑むだけだった。

「そうか残念だ…。色々と迷惑をかけてしまったな。」

「いえ…自分は」

「よい、最後に不愉快な思いをさせてしまったようですまなかったな。もう下がってよろしい」

「はい…」

王様による退席のお許しがでて、俺はゆっくりと腰を上げた。

だが、俺が腰を上げこれから退席しようとしたところで、横から腕を掴まれた。

でも、今度は剣を奪われる事はなかった。

「待てっ…!」

鎧男はそう言って、俺の腕を掴んでもう一度床に座らせようとしている。

さらに、鎧男は俺に言った。

「座れっ…。そして、今度は陛下に向かって『是非作らせてくれ』と頼むのだっ…!」

俺はその言葉に対して、断りの言葉を言った。

「…俺はそんな事の為に剣は作りたくない。兵を強くしたいから武器を強くするのは剣で人を殺すためだろ？俺はそんな事では自分の腕を使いたくない」

俺はそう言って鎧男の手を腕を勢いよく振って払おうとするが、鎧男の次の言葉で動きを止めてしまった。

「何を言っている！！ そんなこと『当たり前』だろう！ 人が殺せなければ剣の意味などないっ！」

「……………」

鎧男の言葉を聞いて、俺は体が抉られるような感覚がした。

「剣は人を効率よく殺すための武器だろうがっ！」

…男の言っている事はある意味正しいだろう。

剣は争い、傷つけ、時に殺し合うために使うものだ。

…それが剣の本質なのかもしれないと、ずっと考えながら生きてきた。

でも、俺はそれだけではない、とずっと考えながら『も』生きてきた。

俺は後者の考え方をしながら、ずっと生きてきた。

…だから、そんなふうに決め付けた言い方はしないで欲しい。

…それはとてもつらい。

剣が一つの方法だけしか使い道がない物だと、決め付けないでくれ。

『それ』を決め付けられる事は、俺を否定される事に変わりがない。

剣の使い方が傷つける以外にもあると、俺は信じてきたんだ。

…いや、違う。

信じてきたんじゃない。

憧れてきたんだ。

親父が使っていた剣を見てから、俺はずっと憧れてきた。

奪う事でしか剣が振るわれていなかった『あの場所』で、親父の剣だけが違った。

親父の剣は守るためだけに振るわれた。

ボロボロになりながらも、刃がこぼれながらも、たとえ血で汚れようとも、真っ直ぐな気持ちで最後まで振るわれた。

最後まで真っ直ぐな気持ちで使われた剣の姿に、俺は憧れた。

そして、その憧れを自分の手で形にしたいくて、俺以外にも剣に守られる人を増やしたくて、俺は鍛冶師になった。

だから、さっきの鎧男の言葉はその憧れて歩んできた道を否定さ

れた事になる。

だが、コイツの意見に真っ向から向き合うには、俺には足りないものがある。

それは今すぐ用意する事ができないし、かといって話してわかってもらえるものでもなかった。

だから俺は目の前の男にこれ以上、自分のこれを否定されたくなくて、情けなく逃げた。

「…やめてくれ。これ以上、なにも言わないでくれ」

俺はそう言って俺の腕を掴んでいる鎧男の手を振り払った。

そして、剣を胸に抱いたまま謁見の間から外へ出た。

「……………」 「……………」

外に出たとき、扉の外にユリアさんとリースさんがいた。

俺はその二人を見て、一言だけ「…一人になれる場所を教えてください」
「…」と言って二人に人気のない場所に案内して貰った。

「…ここなら滅多に人が来ないでしょう」

そう言って連れてこられたのは花の香りが充満する花園だった。

どれだけの種類の花が植えてあるのかわからないが、すごい数の花々だ。

だが、今はそんなことはどうだっていい。

今はただ一人になりたかった。

幸いここは一部の人間しか訪れない場所らしいので、しばらくは一人になれる。

「それでは、自分達はここから離れます」

ユリアさんがそう言って、リースさんと一緒にどこかに消えていく。

俺は二人が完全に見えなくなった後、俺は独り言を呟き始めた。

「なんでだよっ…！」

謁見の間で言えなかった自分の気持ちを、誰もいない花園で俺は一人で感情を吐き出していた。

「なんで俺があんな事を言われなきゃいけないんだよっ…！ずっと前からっ！」

毒を吐き出すように、俺は一人で叫び続けた。頭の中が徐々に真っ赤になっていく。

「俺は『あれ』を作るって決めてるんだっ。それなのにつ…！」

腹の中に溜め込んだ感情が爆発しそうになっているのがわかる。

「そのために磨いてきた技術だぞっ！ 時間も、生活も、他も、全部捨てて！」

もう、爆発はすぐだ。

「それをっ！ 国の兵隊のために使えだどっ！ ふざけるなよっ…！」

肺の中の空気が全部なくなっていくのがわかる。

もっと叫びたいのに、声が少しずつ掠れていく。

だから、肺に残った最後の空気を使って、思いっきり叫んだ。

「俺がっ…！ なんで人殺しの兵隊のために使わなきゃいけないん

だよっ…！」

まだ肺には少し、空気が残っている。

ならば、まだ叫んでやる。俺の怒りはまだ収まっちゃいないのだから。

「俺にっ…！ 自分の親を殺した奴らが持っていたのと同じっ…、」

まだだ。まだ収まっていない。

「『人を傷つける剣』を、作れって言うのかよっ…！」

怒りは収まっていない、なのに、肺に空気が足りない。

そのせいで、最後の言葉は完全にかすれてしまった。

「俺は『人を守る剣』を作りたいの…！ 誰かを守りたいのにっ！ 何で、だよ…！」

完全に肺の中の空気がなくなり、空気を吸い込むために膝に手を突いて「はぁー、はぁー」と深く息をついていく。

そして、もう一度何かを叫ぼうとしたが、喉から上手く声が出なかった。

代わりに出たのは、鼻声交じりの小さな嗚咽だった。

それは、自分の声とは思えない、実にか細い小さな声だった。

気がつけば、目元が熱い。

なぜか目の前も濁って見える。

…その時になってようやく俺は、自分が泣いている事に気がついた。

叫び（後書き）

作者はコレ書いててすごい楽しかった。

願

「……っ」

バツ！

自分が泣いている事に気がつき顔を上に向ける。

ここには誰もいないことは知っている。

だから、泣こうと思えばいくらでも泣ける事も知っている。

でも、俺はこのまま泣きだしたくはなかった。

…泣く事は嫌いだ。

泣けば、思い出してしまう。

両親が死んで、泣いてばかりいた子どもの頃を。

…ずっと泣いていた子どもの頃の自分を。

両親が死に、天涯孤独となった。

泣いているとやさしく頭を撫でてくれたあの手の持ち主はもうい

ない。

「どうした？」とちょっと困ったように笑いながら声をかけてくれたあの人もいない。

そのことが、悲しくて、悲しくて、仕方がなかった。

とにかく泣いた。

泣いていると両親の顔が浮かび、さらに泣いた。

辛くて、悲しくて、苦しい記憶。

：俺は泣く度にこのことを思い出す。

だから、俺は泣く事が嫌いだ。

泣く事も、人が泣いているのを見るのも嫌いだ。

子供の頃を思い出して、：とにかく嫌いだ。

：だからあのちびっ子王女が泣いているのを見て、泣き止ませるために助けてやろうと思ったんだ。

なのに、どうしてだ？

ムカつく馬鹿子爵はもう潰した。

これで『あいつ』が不安がる原因はなくなったはずだ。

もう、笑顔になっていいはずだろ？

なのに、どうしてだ？

顔を上げた先に見えた、お城のベランダ。

そこで、ヒラヒラのドレスを着て、風に長い銀髪を揺らされながら、『あいつ』が俺の事を見ている。

『あいつ』が、俺の事を見ている。

俺が一番嫌いな『あの顔』で。

「…なんで、だよ」

そんな顔、もう見るはずがないだろ。

だって、そうだろ？

言い寄ってきていた子爵はもう潰した。

お前は、もう安心していいはずだ。

なのに、どうしてだ？

どうしてそんな顔をするんだ？

「…おかしいだろ」

笑えよ、そこでさっきの俺の事も見てたんだろ？

可笑しかっただろ？

馬鹿みたいに騒いで、そのせいでむせて、挙句泣きそうになって。

笑えただろ？

なあ？

…だから笑えよ。

笑ってくれよ…。

『その顔』は嫌いなんだよ。

なあ、『ちびっこ』。

俺は『その顔』を見る度に昔を思い出して、すごく辛いんだ。

だから…、お願いだ。

「……頼むよ、泣かないでくれ…」

「ぐすっ、ぐすっ…」と鼻を鳴らして泣き続ける、銀髪の少女。

今すぐ泣き止んで欲しい。

昔の自分のように泣き続けているあいつ。

それを見るのはとても辛い。

…だから頼む。

泣かないでくれ…。

さあ、始めよう。

「…嫌なんだよ。人が泣いてるの見るの。…本当に、嫌なんだよ」
俺は独り言を呟く。

「…どうせ、ユリアさんからさっきの謁見での話を聞いたんだろうけど、…お前がそれを気にしてどうすんだよ」

泣いているちびっこを見ながらなんとなく理由を推測する。

情報が早すぎる気がするが、多分間違っていないだろう。

「…別に俺はそれほど傷ついてないし、気にしちゃいない」

さっきのは押さえ込んだ怒りを発散してただけだ。

「…だいたい、わかってんだよ。自分の考え方が『甘い』ってことぐらい。…ガキじゃないんだから」

十数年生きているんだ。それぐらいわかっている。

「…世界が思ったよりも優しくない事なことなんてとつくの昔に知ってるし、俺の考えが綺麗ごとだって理解だってしてる。」

当たり前だ。

そんなこと、十年前から『よく』知っている。

「…こんな事いつか言われるってわかってたんだよ」

ああ、わかっていたよ。いつか俺の考え方を否定するヤツが現れる事ぐらい。

「…確かに、少しだけきつかったよ。―でも」

俺は顔を上にあげた。

「…それでも、俺は」

顔を上げた先に見えたのは、泣いているちびっこの顔。

俺はその顔を見ながら、独り言にしてははっきりとした口調でちびっこに向かって一つの言葉を吐いた。

それはある意味、自分にも言い聞かせるような言葉であって、ちびっこに言ったものではなかったかもしれない。

だが、俺はその言葉を言わずにはいられなかった。

なぜなら、あのちびっこは俺の事を完全に見くびっているからだ。

あいつは、俺が立ち直れないほど傷ついていると思って泣いている。

そして、それが自分のせいだと思っている。

俺はそれが我慢ならない。

俺はそんなに弱い人間ではない。

だから、俺はあいつに向かって言ったんだ。

聞こえるはずがないとわかっている距離にいらながらも、俺はその言葉を口にした

その言葉は実に難しい。

子供が言えば、微笑ましく。大人が言えば、大抵の場合は白けた目で見られる。

年をとるたびに言えなくなってしまう言葉。

だが、俺はその言葉をはっきりと言ってやった。

俺のその姿を見た奴がどんな顔をするかなんて考えない。

ただ、これは宣言だ。

絶対に諦めないと言う宣言。

——俺はその言葉を、聞こえるはずのない距離にいる、この国の王女に向かって宣言した。

「夢を諦めない」

※※※

世界は優しくない。

生きている限り、傷つくことばかりだ。

辛く、苦しむことだって多い。

そんな中で俺が目指す『守る剣』は馬鹿げた夢だろう。

でも、だからどうだって言うんだ？

俺はその馬鹿げた夢を追いかけるのを止めるつもりは無い。

――寝る間を惜しんで鍛冶の技術を磨いた。

手や腕が火に焼かれようが構わなかった。

何度も、何度も鎚を振るった。

手の皮が固まり、次第に針も通らないほど硬くなった。

体がおかしくなるほど鎚を振るった。

これは、すべて『守る剣』を作るためだ。

俺が自分の夢を叶えるためにやってきたことだ。

それを、少し否定されたぐらいで諦めるとでも思ってるのか？

—ありえない。

そんな事、できるわけがない。

諦める事は、俺が自分を否定することだ。

諦めたら、すべてなかったことになるんだ。

俺の時間が、生活が、技術が、そして夢が否定される。

『なかった』ことになる。

そんなことはできない。

「それ」は俺の『全て』なんだ。

幼い日から憧れ、夢見た剣を作るために使ってきた『もの』

それをあんな事だけで全部「なし」になんてできない。

…絶対に出来ない。

…どうやら、その所をお前はよくわかっていない。

お前は、俺があれだけの事で立ち直れないほどダメージを受けているとも思っているのだろう。

…とりあえず、まずはそこを訂正させてやる。

—ちびっこ、お前は知らないかも知れないが。

俺はな……。

「諦めが悪いんだよっ…！」

世界には『そんなこと』ばかりじゃないって。

中には優しく、楽しくと思えるものだってある。

あるはずなんだ。

俺はそうだと信じてる。

友情や愛情。

これらは見えなくても感じることはできる。

彼らの行動、言葉。

そこから彼らの想いを感じられる。

— だったら。

「俺の『守りたい』って気持ちだって伝えられるはずだろうがっ…！」

—さあ、始めよう！

『守る剣』を作るなんて馬鹿げた夢を追いかけてきた、俺の本気を、

見せてやろう、泣いてばかりいるあの泣き虫王女に、この世界にある美しいものを、

感じて貰おう、俺の気持ちを、

—約束を守ろう。

いつか言ってやったあの言葉。

あれを果たす時がやってきた。

—守ってやろう。

今、お前の胸の中にある悲しい気持ち。

「それ」からお前を守ろう。

俺は、俺の作った剣でもって。

「お前を『守ろう』」

決意

「始めるか」

俺は自分の剣を取り出し、体中のマナを思いっきり剣に送った。

ミスリルを加工するには、調節した多くのマナが必要だ。

そして、ミスリルを壊すにはそれを多く上回る大量のマナが必要だ。

マナの量を調整することなく、大量に送る必要がある。

これには多少時間はかかるが、過度のマナを流し込まれたミスリルは徐々に形が歪んで行き、最後には碎けて砂となる。

今俺がやっているのは、その加減抜き全力のマナの注入だ。

あと数分も続ければ、剣は砂へと変わるだろう。

俺は剣がすべて砂に変わるまでマナを送り続けた。

数分後――

徐々に剣の崩壊が始まった。

亀裂が走り、剣が切っ先から碎ける。

まるで砂のように、サラサラと白銀の砂が落ちた。

ミスリルと同じ色の白銀の砂。

キラキラと光る白銀の砂。

俺はそれを剣を包んでいた布の上に落とし、砂がこぼれ落ちないように布でしっかり包み込んだ。

そして、俺はその砂を包んだ布を持ってあのちびっこがいるベランダよりも高い位置にある木を探した。

「それ」に最初気がついたのは侍女の一人だった。

彼女は王女が泣いているのを必死に宥めながら外にいるトールの様子もずっと見ていた。

だから、トールが木に登って何かをしているのには気がついていなかった。

でも、それが何を意味をするかなんてわからなかった。

侍女がすべてを理解したのは全部終わった後だった。

木から小さな光が見えた。

はじめは太陽の光が何かに反射しているのだと思ったが、違った。

光はキラキラと白銀に輝いていた。

そして、その光は徐々に量を増やしていた。

はじめは小さな光だったが、光は木からどんどん溢れてくる。

銀色の光は風に乗っていき、次第に光の帯となっていくた。

トールにはそれがミスリルの砂が風に運ばれ太陽の光に反射しているのだと分かっているが、それを知らない者が見れば実に幻想的な光景だった。

「わぁ……」

ルシアはそれを呆然と見ていた。

そして――

「ちびっこ見えてるか――！？」

「！？」

ルシアは青年の声にハッと我に返った。

声の聞こえた場所に顔を向ければ、自分があるベランダとほぼ同じ高さの木に上っていたトールの姿が見えた。

太い木の枝に腰掛けるような形で座り、何かの布をヒラヒラと振りながら自分に注意を引こうとしていた。

「ト、トールさん！？ あ、危ないッ……」

ルシアはそのあまりに危険な体勢に驚き、声をかけようとするが、それよりも先にトールの声がルシアの耳にはっきりと届いた。

「驚いただろっ！」

「えっ……」

まるで、悪戯の成功した子供の様な笑顔で自分に向かって話しか

けてくるツールに、ルシアは面食らった。

ルシアはツールが王との謁見で随分と辛い思いをしたことを知っていた。

そして、今もその辛い思いを引きずっていると感じ、その原因の一端である自分を責めていた。

だが、傷ついていると思っていた本人が今は満面の笑顔を自分に向けている。

その意味がわからずにルシアが呆然としていると、ツールが興奮したように叫んだ。

「すごいだろっ！！　これは俺が鍛冶の技術を磨くうちで考えたんだ。砕けたミスリルが風に乗って凄く綺麗だろ！？」

「は、はい！　す、凄く綺麗です」

「ああ！！　すげー綺麗だよな！」

「は、はい！」

「実はな！　これは俺が作った剣でやったんだ！　どうだ！　俺の剣はすごいだろう！」

「は、はいっ！」

ツールの大きな声にルシアはほとんど反射的に「はい」と返事を

する。

ルシアは本当ならもっと他に色々と言いたいことがあったのだが、今は混乱してしまって言葉が上手く出てこない。

そして、そんなルシアのことなどおかまいなしにトールは喋り続けた。

「お前！　なんだか誤解してるみたいだから、これだけは言っておくけどな！　俺は謁見の間であつた事なんて、全っ然！　気にしてないからな！」

「え…？」

その言葉にルシアは耳を疑った。

なぜなら、ルシアはトールが傷ついている姿を見ているからだ。

それは、ベランダから花園で叫び続けたトールを見ていたからではなく。

もっと前から、もっとも近くでトールの姿を「視て」いたからだ。つた。

トールの傷つく姿。

それを一番近くで見ていたのはおそらく自分だ。

だから、知っている。

トールがどれだけ傷ついたのかを。

それなのに、トールはそれを勘違いだと言う。

それにルシアはそんなわけがないと困惑する。

「よく聞けよ！！　ちびっこ！！」

トールはさらに叫んだ。

まるで、ルシアの悩みなど吹き飛ばすように

力強く。

自信強く。

強く、強く。

トールは、叫んだ。

「俺はな！　俺はこんな景色を作ることが出来る、凄い物を作れるんだぞ！　それなのに、あんな事だけで俺が「夢」を諦めると思っているのかっ！　見くびんなよ！　俺はドワーフの腕を持つ男だぞっ！　いいか！　俺は絶対に「夢」を諦めない！　俺は絶対に人を『守る剣』を作ってみせるっ！！」

「あ……」

その言葉を聞き、ルシアは理解した。

木の上で叫ぶ青年が、ものすごく「強い」ということに。

―彼は、すでに「決意」しているのだ。

もう、後戻りをしない。

横を見ない。

立ち止まらない。

そんな、人生の決意をすでに決めている。

―これはもう、諦める諦めないの話ではない。

彼は、すでに決めているのだ。

貫き通す決意を。

自分が落ち込むことなど、意味などなかった。

彼はたとえどんな困難があろうと、立ち止まらない。

立ち止まるわけがない。

だって、彼は―

——彼の名は、トールⅡグラノア。

ドワーフの鍛冶師の腕を持つ、揺るがない決意を秘めた強い青年。

——そして、泣いている少女に自分が夢を諦めない事を証明するため、折角作った自分の剣を壊してしまうような。

不器用だけど、とても「やさしい」鍛冶師。

彼は諦めない。

人を「守る剣」を作るといふ夢を叶える為に、彼は絶対。

——諦めない。

決意（後書き）

これで一部が終わった感じです。

次から新しい話を書く予定。

不満があると思います。作者が未熟で本当に申し訳ないです。感想がありましたら、どうぞ気軽に書き込んでください。

帰宅（前書き）

すごい短いです。

次からの話をこれから少し考えるため、ちよつと先にこれだけを投稿します。

帰宅

「あー、だるい…」

俺は無事に寮に帰ってくる事が出来た。

あの後色々あったが、ちびっこも泣きやみ、ここ最近の騒動のお咎めもなし。

なので、俺は安心して寮の自分の部屋で休もうと、寮の玄関に入ろうとしたのだが…

運悪く、寮の玄関の前で掃き掃除をしている寮母さんに会ってしまった。

「あ、どうも。掃除ご苦労様です。」

「……………」

俺はそう言って、軽く会釈をしてそのまま寮母さんの前を通り過ぎようとしたのだが…

「…待ちなさい。ツール君。」

俺は寮母さんにちよつと怖い声で呼び止められてしまった。

「ん？」

「…その『何か御用ですか？』って顔は止めなさい。一週間も部屋を留守に不良学生」

「…あー、いや。そのことについては、ちゃんと書置きを…」

「『一週間ほどバイトしてきます。その間は部屋を留守にするし、学校も休むけど安心してください。でも、できれば代返頼む。』
…これを朝、掃除するために入ったあなたの部屋で見たときの私の驚き……。ちょっと考えて欲しいわ」

「あー、ちよつと言葉が足らなかったですか？」

「できれば、もう少し詳しく内容を書いて欲しかったわ。…まあ、私はそこまで大変じゃなかったけど」

「なら、別に…」

「『学院』の人はそうでもなかったみたいよ」

「なんで学院が？ …まさか、授業をサボったのがそんなに問題だった？」

「…すぐにわかるわ。それよりも、—お帰りなさい。バイトはどうだった？ 沢山稼げたの？」

寮母さんは呆れた顔をしながらも少し口元に笑みを浮かべて、そう聞いてきた。

この「仕方ないなあ、この子は」という顔は、この寮母さんが寮生に人気がある理由の一つだと先輩の寮生は熱く語っていた。思わず、「ドキッ!」とするような顔なのだそうだ。

だが、俺はその魅力的な表情を無視して適当に答えた。

「あー、研究室が一つもらえるぐらい」

「はい?」

「それじゃ、眠いんで失礼します。」

「あ、ちょっと! トール君!? 今の話って…!」

「おやすみなさい」

なんだか寮母さんが後ろから呼び止める声が聞こえるが、俺はそれを無視して寮の中に入った。

だが、俺が自分の部屋の前に行くと、部屋の扉の隙間のいたるところに紙が挟まれていた。

訳がわからず適当に二、三枚引き抜いてみたが、なんだか細かい字で色々書いてあってめんどくさかった。

「あとで読も」

とりあえず、今すぐ俺は寝たい。

俺はそう考えて、紙が沢山挟まった扉を開け一直線にベッドに飛び込んだ。

「…布団最高」

そして、久しぶりの柔らかい布団の感触に癒されながら、俺はぐっすりと朝まで眠った。

学院長

「あー、おはよう」

久しぶりに学院に登校して、欠伸まじりに挨拶しながら教室に入った。

…だけど

ガッ！！

「ん？」

「……………」 「……………」 「……………」

何故か、知り合い三人にいきなり捕まった。

ディースとサリアに背後から両腕を拘束されて、教室から外の廊下に連行された。（その間、ニアは教室のドアを開けたり閉めたりして俺たちが速やかに廊下に出られるように動いていた。）

そして、そのまま俺は拘束された状態でどこかに連れて行かれた。

「あ、いや、これ何？ 俺何かした？」

訳が分からず、こんなことをされている理由を聞いてみると、デイスが呆れたように答えた。

「…やったよ。そりゃ、もう盛大にな」

「…あー、一週間も学院の授業サボったのそんなにヤバかった？」

俺はこんな事をされている心当たりを試しに言ってみた。

「…ちげえよ。もっとすごいことだよ」

でも、どうやら違ったようだ。

「んー？」

だが、考えてみても心当たりが無い。

すると、デイスがものすごく呆れた顔で俺にこう言った。

「…『祭り』『ミスリルの鎧』『個人出場での入賞』…この言葉から何が起きたか連想できるか？」

「あ、…もしかして、祭りのときに作ったアレが何か賞でも獲った？」

ディースのその言葉で、やっとなにが起きているのか分かった。

「…学院で初の学生個人での入賞だそうだ。教師達は絶句してたぞ。どこの研究室にも入ってない無名の学生が賞を獲ったってな」

「へー。でも、俺の是一位じゃないだろ？俺のよりも派手で手の込んだ作品は沢山あったし…」

「順位はもう関係ない。賞をもらった事が重要だ。」

「ふーん」

俺は適当に相槌をうった。正直、賞とかたいして興味ない。

すると、俺のそんな適当な相槌を聞いていたサリアがものすごく嫌そうな顔で俺にこう言った。

「…ちなみに、ここ最近の私はとても大変だった。表彰から、連日押し付けてくる教師やギルドなんかの関係者達の相手を毎日していたからな」

「…あー、それは悪かった。ごめん」

それを聞いて、サリアに対して申し訳ない気持ちになった。

多分、祭りの後に色々と面倒があったのだろう。

なので、腕を拘束されたままだったが、頭を下げてもう一度「ごめん」と謝った。

「…まあ、それはもうどうだっていい。…とりあえず、今すぐお前を学院長室に連れて行く。学院長はお前が登校するのを首を長くして待っているからな」

すると、謝れていることに少し照れてるのか、顔を少し赤らめて話を変えてきた。

…弄ると、怒られそうなので話をあわせる。

「なんで？」

「賞状の受け渡しと、色々アレについて質問があるそうだ」

質問すると、実にもっともな返答が帰ってきた。

「へー」

「ん、そろそろ着くな。身だしなみを少し整えておけ」

そうこう話を続けているうちに、学院長室に着くみたいだった。

でも、身だしなみを整えろといっても腕を拘束されていては何もできない。

「…腕が使えないんだけど」

「ん、そうだな。では、解放してやろう」

俺がそう言うと、サリアはそのことに気がついたのか、腕の拘束

を解いてくれた。デイスもそれを見てもう片方の腕の拘束を解いた。

俺はそのまま空いた手で髪を手櫛で整えながら歩いた。

そして、しばらく歩いていくうちにでかい両開きの扉の前まで来た。

扉の上にあるプレートの上には『学院長室』という文字。

どうやら、学院長室の前まで着いたようだった。

「……………」

「……………」 「……………」

そして、俺がその扉の前まで行くと、途中まで俺を連行してきたデイス、サリア、ニアの三人が無言で「早く扉を開け」とプレッシャーをかけてくる。

どうやら、ここまで連れてくる事が目的で、後のことは自分達には関係ないと言う事らしい。

…もしかしたら、一週間も連絡も無く学院を休んだ事を根に持っているのかもしれない。

「…まあ、仕方ない」

まあ、これは俺の問題だから三人は関係ない。

なので、俺は覚悟を決めて扉をノックした。

コン コン

「失礼します。ツールⅡグラノアです。学院長が自分をお呼びだと聞いて来ました」

扉を叩いた後に、扉の前で簡潔に用件を言う。

作法としてこれで合っているのかわからないが、とにかく扉の前で声が返ってくるのを待った。

すると、両開きの扉の中からすぐに声が返ってきた。

「ん、君か。待っていたよ。早く入ってきなさい。」

「あ、はい」

少し渋めの男性の声が聞こえ、俺は言われるままに扉を開いて部屋の中に入った。

ちょっとだけ緊張していて、思わず部屋に入る前に三人の姿を見たら、

「あ…」

すぐに緊張が解れた。

デイスは俺の顔を見ながら「頑張れよ」というように力強く頷き、サリアは「さっさと行け」というように軽く顎をしゃくっている。そして、ニアは両方の拳を握りながら「頑張って!」というようにエールを送ってくる。

俺はそれを見て、足取り軽く部屋の中に入った。

――正直、かなり嬉しかった。

「ふむ。話は大体分かった。研究室が欲しくてあの鎧を作ったのだね」

「はいそうです」

「ふむ…」

「……………」

俺の目の前にいる学院長が、机の上で指を組みながら何かを考えるように目を閉じた。

学院長は俺が思っていたよりも若く、三十歳後半のなかなか渋めの男性だった。

学院長は灰色の髪を右片方だけを少し垂らすように伸ばしていて、整えられた顎鬚もあいまってかなり渋い。

ビシッと着こなしたスーツもなんだか決まっていて、どこかの貴族の領主様かその貴族に長く仕えたベテランの執事に見えた。

というか、黙っている姿がすごい渋い。

「……………」

これは同じ男としてすごく懂れる。是非こんな年のとり方をしたい。

そんな馬鹿なことを考えていると、学院長が目を開けて、話を再開した。

「ふむ。話を続けようか」

「はい」

実は、学院長室に入ってから学院長が座る机の前でずっと祭りでの出来事について説明していたのだった。

まあ、簡潔に「研究室が欲しくて、目立つこととして実力を見せた

かった」という説明をただけだったが。

で、それを聞いた学院長は先ほど目を閉じて考え込み、今話を再開した。

そして、学院長は重苦しい口調で何かを論すように、ゆっくりと話し出した。

「…実は昨日城から急な使いの者が来て、研究室一つに掛かる一年分の予算が援助された」

「……………」

「そして、驚く事にその援助金の一つだけの研究室に割り振るように言われ、そしてその研究室の責任者の名前は『トールⅡグラノア』と聞いた」

「……………」

俺はそれを聞いて、無言になった。

それを説明するのは実に面倒だ。

あのちびっ子姫が「何か欲しいものを言ってください」と言ったので、「研究室が欲しい」と言ったらこんな事になったのだ。

疲れていたからと、適当に答えたがまずかった。

あのちびっ子姫は、それを聞いて全力で色んな所で『お願い』をしだしたのだ。

おかげで、俺が城を出ようとした頃には、「すでに学院には話を通しておきました」と言う台詞がユリアさんの口から聞けた。

「…どのような手を使ったのか分からないが、私にこれを拒否するつもりはない」

「!？」

学院長はそう言って言葉をきった。

そして、その言葉に驚いている俺を顔をじっと見てから…、

今度は「ニヤッ」と人の悪そうな笑みを浮かべた。

「—だが、このままでは他の教員や生徒達から批判を買うことになるだろう。そうになると、色々とまずい。なので、『君の』研究室には色々と変わった事をしてもらおう。周りの人間にはあの研究室は実験的なものだと思われるためにね」

「…と、いうと？」

俺がなんだかすごく楽しそうな顔をしている学院長を見ながら、おそろおそろ聞いてみた。

…なぜだか知らないがこの学院長めちゃくちゃ楽しそうだ。

「我が学院は他国の生徒も沢山招き入れている。異なる文化の国と交流を持つ。実に素晴らしい事だ」

そして、学院長は突然なにか語りだした。

「はぁ…」

俺はとりあえず、相槌を打った。

そして、俺の相槌を聞きながら、今度は少し残念そうに顔を伏せ首を振りながら、こう語った。

「―だが、他種族との交流はさすがにない。実に残念だ」

「…まあ、色々と問題が多そうですからね」

なんだか、わざとらしいがここも適当に相槌を打った。

とりあえず、この話が終わるまで質問とかは後にしよう。色々と面倒そうだから。

「その通りだ。だが、我々はここ数年ある種族と交渉し、今年から他種族の生徒を一人招く事に成功した」

「へー、すごいですね」

「だが、彼女は中々クラスに馴染めないようだな。私はそれを心配している。…このままでは折角の交流が今年限りになってしまう、と」

「あー、それは確かに」

「なので、君の研究室にその彼女を加えなさい。そうすれば、色々問題はなくなる」

「は？　なんですか？」

そこで俺は初めて質問した。

なんでそんな話に繋がるのか、意味がわからなかった。

だが、次の学院長の台詞で徐々に話がわかってきた。

「それは、彼女が『竜人族』だからだ。彼女との交友を得るために、同じ年頃の学生が仲良しごっこで研究室をやっていると思われるいと『周りの反応が違ってくる。』『竜人族の彼女の為』と『今後の文化交流の為』という建前も出来る。…まさか、王宮からの特別援助で出来た研究室なんて言えるわけがないからね」

「……………」

俺は話は分かったが、だけど…、

…今、このおっさん『竜人族』って言った？

いやいや、嘘だろ？

だって、あの人達って基本的に人が嫌いだし、暴力的だし、怖い

し、しがらみだらけの人間社会なんて絶対に合わないだろ。

いや、だっておっちゃんから「竜人族」の人が学院にいるなんて話聞いてないし…

あ、そういえばここ最近は寮にいなかったから前に送った手紙の返事とか読んでない。…まさか、そこにこの事とか書いてないよな？

…まさか、な？ そんな…、まさかだよな…？

俺が少し混乱した頭で、色々と考えている間に学院長は話を続けていた。

「—なので簡単にまとめると、研究室の施設も資金もあげよう。でも批判を買いたくなければその子を研究室のメンバーにしなさい。…まあ、安心しなさい。『竜人族』だといっても、彼女はとても優しい—」

なんだか、学院長が俺を気遣ったような事を言っているような気がするが、それよりも俺は『竜人族』という怖ろしい言葉に冷や汗が止まらなかった。

『竜人族』

高い知性と強靱な肉体を持った種族で、人間に近い姿をしているが、肌にしだが鱗とトカゲの尻尾のようなものがある。

翼竜と会話が可能で馬のように乗りこなし、長命ですでに失われ

た高度な知識を持っている。

種族としては人間よりもはるかに上位の種族で、一般人からは畏怖の目で見られることが多い。

だが、俺がそんなことはどうだっていい。

問題は、学院にいるその竜人族が『誰』なのか、ということだ。

そのことを考えると、震えが止まらない。

学院長（後書き）

誤字脱字の報告と、感想を待っています。

次あたりで、新キャラを出す予定です。

いやです

「絶対、いやです」

トールはそう言って、学院長に竜人族の少女を研究室のメンバーにすることを断ろうとした。

だが、それに対して学院長は眉を顰めた。

「ふむ、相手が竜人族ということで少し偏見があるのかい？ だったらそれは間違いだよ。『彼女達』は」

「かなりキテます」

トールは説得しようとする学院長の言葉を途中で遮り、「本人達」が聞けば激怒しそうなことを真顔で言った。

「：いや。君、それはちよつと」

そして、それを聞いた学院長は少し躊躇いがちにトールに注意しようとした。

しかし、

「あの人達は、マジでヤバイです」

トールはそれを見做すようにまた言葉を遮った。

ここまでくると学院長も違和感を持ち、ある可能性について考えつく。

学院長は興味心から、思い切って聞いてみた。

「…君は、もしかして『彼女達』と面識でもあるのかい？」

「…養父の仕事の関係で少しだけ面識があります」

学院長の言葉にツールは少し言いづらそうに答えた。

「なんだい、だったら問題なんてないね。面識があるなら彼女達との接し方も、他の生徒達よりもずっと知っているはずだ」

「…『だから』、いやなんですよ」

「む、その知り合いとはまさか仲が悪いのかい？」

「…微妙です」

「ふむ…、それは残念だ。あのような美しい人たちと仲が悪いとは…」

「……………」

学院長のその言葉に苦笑いしかでないツール。

だが、そんなツールを気にした様子もなく学院長は話を続けた。

「特に、今回の交流でやってきたキキヨウ君はとても美しい少女なの……」

「……………え？」

学院長の台詞の中にとんでもない単語が聞こえ、トールは耳を疑った。

「が、学院長？」

「おや？ どうしたんだいトール君？」

「…あ、あの、今、『キキヨウ』って言いました？」

「？ 言ったが、それがどうしたんだい？」

「……………やば」

トールは顔を横に向けて冷や汗を流した。

…なんと言うか、トールのよく知っている名前だった。

「ん？ トール君？ 顔色がなにやら…、それに、その汗は？」

「な、なんでもないです。そ、それよりも、その人に俺の名前とか教えてないですよね！ ねえっ！」

「…君の名前は言っていないが、研究室の責任者について素性は少し話をしたかな？」

トールのなんだか切羽の詰まった声に押されながら、学院長は何かを思い出すようにそう言った。

その言葉を聞いたトールはさらに焦りだした。

「どんな感じにですか！」

「簡単に、『ドワーフの養父に育てられた将来有望な男子生徒だ』と言う説明をしたが…、それがどうかしたのかい？」

「うわあ…、ばれた…、絶対にばれた」

学院長の言葉を聞き、トールは絶望した。

顔を手で覆って、…なんだか今にも泣き出しそうだった。

「トール君？」

「……………すいません。ちょっと、いきなりの話で少し混乱して、
んで返事は後日でいいですか？」

学院長の自分を気遣うような声に、トールは少し考えるように眉を
顰めた後、そう言ってこの場から退室しようとした。

「ふむ、どうやら具合が悪いようだね。まあ、こちらもまだ手続き
など色々することがある事だし、いいでしょう。では、また明日
にでも——」

学院長はトールの様子が普通ではないことに気がつき、この場は無理に引き止めずに退室を許可しようとした。

だが…、

『ガチャリ』

学院長室の扉が許可も無く開けられ、そこから柔らかそうな亜麻色の髪を持った少女が現れた。

少女は部屋の中にいた2人の内の片方を見て、嬉しそうにこう言った。

「あら！ 懐かしい感覚がしたので来てみれば、トールちゃんじゃないですか！」

―この少女が現れた事でトールは退室をすることが出来なくなり、しばらくの間地獄を味わう事になる。

いやです（後書き）

誤字脱字の報告や、感想を待っています。

トラウマ

亜麻色の髪を持った少女は突然現れるなり、許可無く部屋に入った事も詫びず、ただトールの元へ近寄った。

そしてトールに近寄って、

「とても無礼な言葉を聞いて来てみれば…、犯人はトールちゃんでしたか…」

と、悲しそうな声でそう言った。

どうやら、トールが言った「キテる」とか「ヤバイ」発言を聞いていたらしい。

それを聞いたトールはかなり動揺した。

「ち、ちがうんです。キキョウさん。アレは言葉の綾っていうか、気の迷いって言うか、とにかくそういうなにかで…！ きっと、多分、絶対！ 違うんです…！ アレは俺の口からでた俺ではない誰かの言葉で、俺は別にキキョウさんがそうだって言うわけではなく…！俺はもちろんキキョウさんは優しくて綺麗な人だと思ってますよ？ 本当です、信じてください！」

「…そうですか、それは良かったですね」

「いや！ 信じてください！ 俺は別に…！」

「…悲しくて、なんだか故郷のみんなに手紙を書きたい気分です」

「そんな…！」

「…ああ、心配しなくて大丈夫ですよ？ あなたの事も忘れずに「キツチリ」と書いておきますから。…さて、どんな手紙を書きましようか」

「キキヨウさん！ 謝りますから！ 地面に額擦り付けて謝りますから！ それだけはどうか…！」

トールは必死にキキヨウという名の少女に向かって、手の平を合わせ拝むようにして必死の弁解をした。

…はつきり言って、トールはこの少女が恐かった。

いや、むしろこの少女の一族全員が恐かった。

彼女達「竜人族」は見目麗しい女性ばかりだ。

竜人族と人間の違いなど殆どなく、あるとすれば彼女達の臀部にある細長い「竜の尾」ぐらいだろう。

だが、それも彼女達は尾を綺麗な布で包んでお洒落の一つのとして、

美しく飾り付けている。

「竜人族」という物騒な名で呼ばれるが、彼女達をよく知っていた。トールのようにただ恐怖するようなことはないはずだ。

むしろ、トールぐらいの年の男子なら、その美しさにもっと好意的な気持ちを持っていてもおかしくないはずなのだが…。

なのに、トールはありえないほど恐がっている。

その理由は、彼が少年時代に養父に連れられ彼女達の住む秘境の谷に行ったことが原因だ。

養父はトールの鍛冶の腕を上げてやろうと、昔の旧友に頼みこんで自分の「息子」を鍛えて貰おうと数ヶ月ほど谷に預ける事にした。

養父の本心を言えば、自分の力で一人前の鍛冶師にしてやりたいと思うが、トールにはドワーフだけではなく、ほかの一族の技術も必要だと養父は考えた。

だが、これには意外な落とし穴があった。

谷に預けてから数ヵ月後、確かにトールの鍛冶の腕は格段に上がった。

しかし、その技術を上げた理由は色々と複雑だった。

トールは彼女達から「逃げる」ために技術を磨いたのだった。

―元々、「竜人族」は人里離れた山奥や森の奥地に住む。

なので、彼女達はとても閉鎖的な生活をしている。

だからだろう、突然現れた人間の少年に彼女達はとても興味を惹かれてしまった。

ちなみに、「竜人族」は一部の例外を除き、基本的に『女性』しかない。

なので、

「ねえ、ねえ。あの子が人間の子供？」「そうそう」「へー、小さくて可愛いね」「どんな生き物でも子供の頃は可愛いだよ」「私、ちょっと頭撫でたいかも」「あ、それは私も思った」「でも、噛まれないかしら？」「お菓子で餌付けでもしてみれば？」「…私ちょっと家に帰ってお菓子とって来る」「あ、それなら私も」「だったら私も持ってくるわ」「ちよ、ちよっとみんな！」

必然的に、こうなるわけで…、

彼女達は突然現れた少年に興味が尽きず、色々と世話を焼いた。

手料理を振舞ったり、お菓子を上げたり、自分達の相棒である「翼

竜」を見せたりなど色々だ。

これだけ聞くと微笑ましいが、実は問題があった。

彼女達は基本的に全員が加減を知らなかった。

試しに、彼女達がトールにしたとんでもないエピソードを語ろう。

―竜人族は「翼竜」と呼ばれる、下級の竜族を馬のように乗りこなす。

トールはそれが珍しく、空を自由自在に呼ぶ翼竜と彼女達をじっと見ていたことがあった。

そして、それに気がついた竜人族の娘の一人がやってきて自分の翼竜に乗せてあげようした。

だが、トールはそれを断った。

理由は簡単。トールは高いところが怖かった。

木の上を上るならいざ知らず、鳥が飛ぶような高さなど、少年時代のトールは怖かったのだ。

だが、それを聞いた竜人族の娘は「大丈夫!」と言って、無理矢理竜小屋に連れて行った。

そして、トールを自分の「翼竜」に乗せた。

いや、乗せたのではない。

その竜人族の娘は、縛りつけたのだ。

「下を見るのが怖い！」と言って逃げようするトールを、縄で翼竜の「尻尾」に、仰向けで、縛り付けた。

翼竜の尻尾は空を飛ぶときはバランスをとるためによく動く。

そんな場所にトールをくくりつけ、娘はトールと一緒に空を飛んだ。

トールは空を飛ぶ前までは必死に逃げようとしていたが、いったん空に上がると暴れるのを止めた。

そして、娘が満足するまで空と一緒に飛び続けた。

おかげで、トールは高さに関する恐怖感覚が少し麻痺した。

そして同時に、彼女達に対して少しずつ恐怖心が増えていった。

ちなみに、このほかにもまだまだ色々ともない出来事があった。

珍しい鉱石があるといって、モンスターの出る鉱山に連れて行かれたり、果物や薬草を採るついでにモンスター狩りに知らずに同行させられたりなど。

とにかく、色々だ。

ほかにも色々トラウマになりそうな事があったりしたのだが、まあそれはまた後日。

そんな中、トールが学んだ事が一つあった。

それは、トールが鍛冶の勉強をしているときは彼女達は手を出さないことだった。

これに気がついたトールは一生懸命学んだ。

一秒でも長く、彼女達から逃げるため懸命に学んだ。

しかし、これにも問題があった。

懸命に勉強を続けるトールの姿に、竜人族の娘達がどんどん好意的になっていったのだ。

まだ少年にもかかわらず、大人でも根をあげそうなほどの本を読み、汗だくになるまで槌を振るう姿。

そんな努力する人間の少年の姿を見て、以前にもまして世話を焼く娘達。

そして、それを嫌がってますます勉強に力を入れるトール。

こんな悪循環が続く事によって、トールは鍛冶の腕を上げていった。

ついでに言えば、竜人族のツールに対する好感度も上がっていった。

…もしかすると、学院が竜人族と友好的な関係を築いたのはツールのおかげがあったからかもしれない。

トラウマ（後書き）

誤字脱字の報告と、感想を待っています。

今思いましたけど、ツールは女運ないですね…。
女関係でいいことが一つも無い。

認めます

子供の俺を翼竜の尻尾に縛って空中散歩するようなぶっちぎれた人達に、先ほどの発言を知られるとまずい。

：何が起きるのか想像なんてしたくないが、きっと俺のトラウマが増えることは間違いない。

なので、なんとしてでもキキョウさんに谷のみんなに手紙を書くことだけは止めてもらうように必死に謝り続けた。

そして、謝り続けていた俺は、キキョウさんの次の言葉で。

逃げ場を失った。

「：じゃあ、私を研究室のメンバーにしてくれます？」

「え？」

「…嫌、なんですか？」

「あ、いや…、そんなことは…」

「…そうですよね。私なんか「キテ」て「ヤバイ」人なんですもんね…」

「うっ…」

「…いつの間にか、私って嫌われていたんですね。気づかなくてごめんなさい。…これからは気をつけますね…」

「…あー」

…まずい空気になってきた。

今学院長室には、俺と学院長とキキヨウさんしかいない。

そして、今の俺は傍から見ればとても「悪い男」に見える。

まるで、献身的に世話を焼いてくれた女性を「面倒」と言って切り捨てるような薄情な男に。

傍から見れば、多分俺はそう見えることだろう。

その証拠に、蚊帳の外の学院長の視線がとても痛い。

正直、今すぐにでもこの部屋から逃げ出したいが、それでは意味がない。

へたをすれば、もっとひどい状況になるかもしれない。

「…あー」

俺は学院長の責めるような視線と、キキヨウさんのひどく悲しそうな顔を見て少し考えた。

確かに、昔は色々ひどい目にあわされたが今は俺も成長して体も心も丈夫になった。

そして、キキヨウさんも学院にきて、人間社会の常識を少しは学んだことだろう。

だから、昔のように翼竜の尻尾に縛って空中散歩なんてことは、もうしないはずだ。

「…ふう」

俺はそう考えて、覚悟を決めた。

そして、俺は沈黙していた部屋の中でゆっくりと言葉を出した。

「…わかりましたよ。キキヨウさんの研究室入りを認めますよ」

「「！！」」

俺がそう言うと、沈黙していた室内の空気が変わった。

まず、学院長がうれしそうにうなづきながら、「実に賢明な判断だ」と俺を褒め。

キキョウさんが「やっぱり、トールちゃんは昔から優しいですね！」と喜んだ。

騒がしくなってきた室内で、俺は心の中で願った。

「……………」

出来れば、面倒ごとはこれっきりにしてくれ、と。

「それでは、トールちゃん。昼食の時間になったら食堂の入り口にいてくださいね？ 色々と話したいことがあるので」

「…それは、いいですけど。いい加減『ちゃん』付けはやめてくだ

さい、キキヨウさん」

「なぜです？」

「…この年でちゃん付けは恥ずかしいんで」

「年頃の男の子の複雑な感情ですか？」

「…まあ、そんな感じです」

「わかりました。では、『トール君』で」

「それでお願いします」

「それにしても、背が伸びましたね」

「最後にあったのって、いつでしたっけ？」

「一年半ほど前です」

「あー、ちょうどその頃に急に背が伸びだしたんですよ」

「へー、そうだったんですか」

「そうなんです。おかげで膝を曲げると痛くて痛くて」

「なんだかおじいさんみたいですわね」

俺とキキョウさんは学院長室を出てから、教室に戻るまでの間、歩
きながら色々と話した。

久しぶりに会ったので、懐かしくて話が弾む。

そして時間を忘れて話していると、いつの間にか俺の教室の前まで
来ていたのでキキョウさんとはそこで一度別れた。

「あー、俺の教室ここなんで」

「はい。では、昼食の時間待ってますね。よければ友達も一緒に誘
ってください」

「…いいんですか？」

「トール君のお友達ですから、もちろんです」

「わかりました。じゃあ、誘ってみます」

「はい。それでは、また」

「また」

ひらひらと手を振るうキキョウさんに向かって俺も手を振るう。

「…ふう」

俺はキキョウさんが去って行く姿を見送った後、ため息をつきなが

ら自分の教室に入った。

久しぶりの知人の登場に驚いたが、何とかことが収まってよかった。
とりあえず、最悪の事態は回避できた。

俺はそう思いながら自分の教室に入り、席に座った。

「ん？」

だが、ちょうど休憩時間で安心していたのがいけなかった。

「なあ、トール」「さっきの美人誰？」「彼女か！彼女なのか！」「
「てめえ！　ここしばらくサボってたのはあの美人が原因か！」「
時間も忘れるほど二人きりの時間を過ごしたんですかあ！　ああ？」
「こら、てめえ詳しく話せコラ」「マジ話せ」「そして、あの美人
の友達を紹介しろ」「俺にも頼む」「てめえ！　抜け駆けすんな！」
「俺にも誰か紹介頼む」「できれば俺にも」「俺にも」「俺にも」

本当ならば、次の授業の前で色々と忙しいはずの男子生徒が俺の前
にやってきてキキヨウさんの友人を紹介しろと言ってきた。

おそらく、俺とキキヨウさんとの教室の前でのやりとりを見ていた
のだろう。

おそらく、キキヨウさんと俺を付き合っているとでも思って、キキ
ヨウさんの友人を紹介しろ言っているのだろう。

「……………」

俺はそんな男連中を見ながら本気で思う。

知らないって、なんて幸せなことなんだろうと。

認めます（後書き）

誤字と脱字、感想を待っています。

暗い話も楽しいけど、のんびりした話もいいですねえ。

自己紹介

昼休み、俺はキキョウさんに言われたとおり、食堂に級友三人を誘った。

三人には食堂に着くまで学院長室で起きた出来事とキキョウさんのことを簡単に説明した。

説明が終わる頃には俺達は食堂に着き、俺はキキョウさんの姿を探した。

「あ、いた」

食堂にあるテーブル一つ一つを見回していると、その一つに座るキキョウさんを見つけて、俺はキキョウさんに元に向かい声をかけた。

「キキョウさん！」

「あ！ トールちゃ：君」

俺の顔を見てあやうく「ちゃん」付けで呼びそうになったのを、あわてて訂正をするキキョウさん。

どうやらまだ慣れていないらしい。

「あー、まあいきなりは難しいですね」

「はい……。なにしろ長年そう呼んでいましたから、癖が抜けなくて……」

「……まあ、気長にいきましょう」

「はい……。ところで、そちらの皆さんがトール『ちゃん』のお友達ですか？」

また、「ちゃん」と呼んでいたが、それを注意をすると話が進まなくて面倒だったのでスルーすることにした。

「そうそう、学院で知り合った俺の友達」

「そうですか。では、私に挨拶をさせてください」

そう言って、キキョウさんはテーブルの備え付けの椅子から立ち上がった。

そして、

「私の名はキキョウといいます。今年度よりこの学院に入学した新入生です。年はあなた方よりも少し上ですがどうか気にしないでください。これからどうぞよろしく願います」

「」「……………」

「？ あ、の、どうかしましたか？」

キキヨウさんはいつも相手に聞き取りやすいように、幾分かゆつくりとした口調でしゃべる。

そして、それは自分のおしゃべりに夢中になる同年代の少女達より確実に大人びていて、俺はその姿に「中身を知らなきゃなあ…」と言う感想を持ち。

級友三人はキキヨウさんの容姿と大人びた雰囲気にとやられて言葉が出ないようだった。

なんだか、このままではキキヨウさんの自己紹介だけで休み時間が終わってしまうと思い、俺が適当に三人の自己紹介をすることにした。

「あー、キキヨウさん。俺からみんなを紹介するよ」

「あ、はい。お願いします」

キキヨウさんの少し戸惑ったような返事を聞いて、俺はまず初めに女性陣から紹介を始めた。

「そっちの黒髪の大人しそうな女の子がニアだ」

俺がそう言うと、ニアは緊張した面持ちで「二、ニアⅡシュリオン
って言います。よろしく願いします」と自分で改めて自己紹介を
した。

キキョウさんはそんなニアの自己紹介を微笑みながら聞き、ニアの
自己紹介が終わると「こちらこそよろしく願いしますね。ニアさ
ん」とまたにこやかに微笑んだ。

「は、はい！　こちらこそ…！」

その微笑を見て、ニアは憧れの目でキキョウさんを見始めた。

「……………」

俺はその様子を見ながら、なんだかよくない気配を感じながらも級
友達の自己紹介を続けた。

「…えーっと、次はそっちの赤髪の女子。名前はサリア」

「サリアⅡフリージアと言います。剣術学科に所属していて、クラ
ブも剣術部に所属しています。今後ともよろしく願いします」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。サリアさん」

サリアはニアのように憧れの目でキキョウさんを見ることはなかつ

だが、キキヨウさんのことを只者ではないと思ったのか、ものすごく礼儀正しく挨拶をした。

「じゃあ最後に、そこいる浅黒い肌をした男子がディースだ」

「ディースⅡダリオンです。学院では弓術学科に所属してます」

「よろしくお願いします。ディースさん」

「こちらそこよろしくお願いします。キキヨウさん」

ディースはそう言って、軽く頭を下げて挨拶をする。

ディースはニアやサリアほどの反応はなく、ごくごく普通に挨拶だった。どうやら、竜人族ということにもキキヨウさんの美人っぷりにもあまり興味はないらしい。

こうして三人の自己紹介は終わり、俺は一安心した。

実は、一部の心無い人たちは他種族を差別する考えを持っていることがある。

だが、三人ともそんな事はないようで安心した。

そして自己紹介が終わると、その後は五人でテーブルに座りいろいろと話をした。

話の内容はキキヨウさんのプライベートに関することや俺が研究室を持つことに関する事で、特に俺が今後はどうするのかについては色々と聞かれた。

「これは学院長に言われたんだけど、『ミスリルの軽量化と品質改良だけじゃなくて他の事もしてみないか?』って」

「他の事?」

「折角竜族のキキョウさんもいるんだから既存の技術の向上だけでなく、他種族との交流で新しい『モノ』も作ってみて欲しいんだそうだ」

「へー、なんかすごそうだな。でも、新しいモノって何を作るんだ?」

「まだ、決まってない。まあ、そういう事は俺は大歓迎だから試しに色々と学院の蔵書でも漁ってみる」

「蔵書?」

「学院は最先端の技術が生まれる場所だって聞いたからな。ここ最近で開発や発見された薬品や金属を色々と調べてみたい」

とずっと思ってたんだ。もしかすると、それを見れば何か思いつくかもしれない」

「…なんだか大変そうだな」

「そう思うなら助けてくれ」

「あいにくと、本を読むと目が悪くなって弓の精度が落ちる。なので、断る」

デイスはそう言って、俺の手伝いを拒否した。

理屈をこねているが、どうやらこいつは本が嫌いらしい。

まあ、別にそこまで手伝って欲しいと思っただけだからいいが…。

それにしても、いざ口に出して考えてみると学院の蔵書というのは実に興味がそそられる。

（…もしかすると、何か面白い物を発見できるかな？）

俺はそんなことを考えながら、食堂で四人との会話を楽しんだ。

自己紹介（後書き）

誤字脱字の報告、感想を待っています。気軽にどうぞよろしく願います。

閑話は書き込みがないようなので、あの二つの中からどちらかを選択して近々投稿します。

閑話 料理 前半（前書き）

今回の閑話は前半と後半で分けます。

後半は後日あげます。

閑話 料理 前半

「これ、美味しいな」

トールは目の前にあるピーマンの肉詰めを食べてそう言った。

おそらく、すべてはここから始まった。

トールの言葉を聞いて、食堂にいたキキョウ、サリア、ニア、デイスは自分たちの食事の手を止めた。

「ん？ トールはそれ食うの初めてか？」

「今日、初めて食べた」

「ああ、ピーマンの肉詰めか。私もそれは好きだぞ。特にソースが美味しい」

「うんうん。おいしいよね」

「そんなにおいしいのですか。でしたら、今度私も頼んでみます」

みんながトールの食べているものを見ながら話し始める。

しかし、そのなごやかな空気をで凍らせる人間が現れた。

その人間はトールだ。

トールは言った。

「でも、作り方は意外と簡単そうだな」

…その言葉を聞いた瞬間

まず、ディースとニアが意外そうな顔でトールを見た。

次にトールの言葉を聞いたサリアが無言で顔を俯かせた。

最後に、キキヨウがトールの言葉を聞き機嫌が悪くなった。

「」「」「……………」

そして、微妙な空気が流れた。

だが、そんなことに気がつかないトールは疑問を口にする。

「? どうかしたか?」

「ん、いや…。別にたいしたことじゃないんだが…」

「?..?」

歯切れの悪いディースに困惑するトール。

トールはディースが何を言おうとしているのか、全然わかっていない。

そんなトールを見て、先ほどの台詞が気になったディースは、思い切って聞いてみた。

「なあ、トール。…お前って、料理出来るのか?」

「「「「……………」」」」」

その問いに対するトールの返答を、四人は緊張しながら待った。

しかし、そんな緊張などお構いなしに、トールはあっけらかんと答えた。

「出来るぞ」

トールがそう言った瞬間。

女性陣から―、

「へー、すごいね」

「…へえ、すごいな」

「ほんと、すごいですね…」

極端な温度差のある返答が返ってきた。

ニアだけは普通に男が料理を作ることに関して珍しくて感心していた。

だが、他の二名は…。

じーーーーっ。

「……………」

…ものすごく、恨みがましい目でツールを睨んでいた。

二人がこのような目で見るのには理由がある。

まず、サリアだが…。

はっきり言って、彼女は料理が出来ない。

これは別に彼女が不器用だとか味音痴だからといった理由からではない。

彼女は貴族だ。

その為、料理に関して一般人よりも縁が薄い。

なにしろ、屋敷専属の料理人がいるため自分で何かを作ることなどした事がないのだ。

そして、サリアはその事を年頃になるまで気にしたことなどなかった。

だが、実家の屋敷にいた頃には気にしなかったが、学院に通ううちに少しずつその事を気にし始めた。

周りの娘達が焼き菓子などを自分で作って学院に持ってきているのを何度も見たことがあるし、そのご相伴に与ったことが何度かある。その度にサリアは自分の胸の中に言い知れない不安が溜まっていた。

『もしかして…女で料理が出来ないのは私だけなのでは？』

そんなことを考えてしまったサリアは家の者に内緒で料理を試みたことがあった。

…しかし、結果は無惨だった。

サリアは自分に料理の才がないことを自覚した。

なので、サリアはツールが男で料理が出来ることを聞いて心中穏やかではなかった。

次に、キキヨウ。

キキヨウはサリアと違って料理がそこそこ出来る。

しかし、サリアとの一番の違いはキキヨウがトールの料理の腕を知っていることだ。

一時期は同じ土地で寝食をともにしていたことがあるため、トールの料理の腕前をよく知っていた。

：実は、トールはキキヨウが作る料理をすべて作れる上に、そのすべてがキキヨウの料理よりも味がいいのだ。

そうになると、キキヨウも普通の娘としては料理が「デキる」ほうなのだが、トールと比べると霞んでしまう。

そのことがキキヨウの「女子」としてのプライドを粉々に砕いているため、キキヨウは落ち込んでいるのだ。

：つまり、先ほどのトールの台詞は二人の乙女のプライドと古傷をいっぺんにえぐったことになる。

しかし、そんなことに気がついていないトールは空気を読まない。

「別に、料理なんて誰でもできるだろう？」

トールがそう言った瞬間。

ガタッ！

「……………」↑サリア（料理が出来ない）

ガタッ！

「……………」↑キキヨウ（誰でも作れるものが、美味しく作れない）

二人の乙女が立ち上がった。

「……………」

そして、二人は立ち上がったまま、無言で片手を天高く振り上げた。

食堂から、次の授業教室への移動中。

「…なあ、何で俺は二人にビンタされたんだ？」

俺は顎を摩りながら、隣をあるくディースにそう聞いた。先ほど、突然立ち上がったキキョウさんとサリアに思いつき手の平で顔をぶたれたのだ。

両方から挟み撃ちされるようにやられた為、衝撃が逃がせずにはばらく目の前がチカチカした。

「いや、あれはビンタってよりは掌底に近かった。だって、『パシンッ』じゃなくて『ガツンッ』て感じでお前の体が少し浮いたからな」

「…どっちだっていい。つか、ホントに何で俺は二人にあんな事されなきゃならないんだよ？」

俺がディースにそう文句を言うと、ディースは「当たり前だろ？」という顔で答えを返してきた。

「それはお前、二人のプライドズタボロにしたからだ」

「は？」

俺はその答えに首をかしげた。全く心当たりがない。

「…わかんないのか。お前らしい」

「?..?」

ディースのあきれたような顔を見て、俺はさらに首をかしげた。

だが、ディースは俺の様子など気にした様子もなく、めんどくさそうに首の骨を「ゴキツゴキツ」と鳴らしながら俺に言った。

「あーあ。それにしても、めんどくさいことになったな」

「…そうだなあ」

ディースの言葉を聞いて、俺をぶったあとの二人の去り際の言葉を感じ出した。

俺のことをぶっ叩いた後、二人はこう言って食堂を去っていったのだ。

『その上から目線を今すぐ訂正させてやる！ 後日、私たちの料理を食べて自分の底の浅さを知るがいい！』

といった、後半はどここの魔王だというような台詞を吐いて二人は去って行ったのだ。（ちなみに、ニアは二人の後を追いかけていった。）

二人の台詞から今後の未来を予測すると、どうやら俺は二人から手料理を振舞われるらしい。

女性からの『気持ちの籠った』手料理。

言葉にすれば世の男たちが羨ましがりそうなものだが、俺は全くうれしくなかった。

何故なら籠っているのは愛情などではなく、全く逆の感情だと二人の顔つきからすでにわかっているし、食べた後の反応しだいでは今以上にやばい事になる予感がする。

俺はそれを考えて、深いため息を吐いた。

「…あー、だるい」

ホント、なんでこんな事になったんだろ？

閑話 料理 前半（後書き）

とりあえず目標として、今月は後三回は投稿できるようにがんばります。

閑話 料理 後半

場所は男子寮の食堂。

そこには特別に男子寮への入寮を許可された三人の女子生徒と、叱られた子供のように顔をうつむかせた男子生徒が一人。

そして、それを少し離れた椅子からニヤニヤと眺めている男子学生彼の目の前には三つのクッキーの盛られた皿があり、それぞれの皿の前にはクッキーの製作者である女子生徒が座っている。

ある女子生徒の一人が言った。

「食え」

簡潔な一言。

「……………」

おそらく、目線と口ぶりから「お前の目の前にあるクッキーを食べろ」という意味だろうと思われる。

その言葉を聞いて、トールはこんなことを考えていた。

（何故こんなことになったのかわからないけど…。とりあえず、食べたら褒めよう。…うん。多分それが一番いい）

彼は料理を褒めてこの状態から逃げようと考えていた。

だが、そうは問屋が卸さなかった。

その理由は三人の女子学生の中の約一名がとんでもない物を作ったからだ。

その一人は、ある男子学生の鼻っ面をへし折ってやるためにクッキーの中に驚くべきものを混入。

クッキーに自分流のアレンジを加えた。

だが、見た目は普通のクッキーと変わらずツールはそれがどういうものか気がついていない。

見た目には、三人ともほぼ同じ。

一番そつがないように作られているのは、ニアのクッキー。

おそらく、普段から作っているのだろう。形もハートや花の形に作ってあって大変女の子らしい。

次はやや歪な四角のないクッキー。

作ったのはサリアで、多少クッキーの表面に焦げ目が強い。

形が多少歪だが、そこは料理慣れしてない人間が作った愛嬌に見える。

そして、最後がキキヨウのクッキー。

形は円形で見た目は普通のクッキー。

しかし、ハーブでも混ぜたのか少し変わった香りがする。

この中の一つがとんでもない「当たり」なのだが、そのことは実はあまり意味がない。

何故なら、彼は女子達の怒りを静めるためには完食しなければならないのだから。

たとえば、どんなにまずかろうが、どんなとんでもない物体が混入されていようが、彼らは笑って「美味い！」と褒めなければならない。

もしも、残したりすれば、「美味しいのに、残すの…？」と背筋が凍る声で囁かれ、後で何をされるかわかったものではないだろう。

：ようするに、彼は絶対に引いたらまずい「当たり」を、必ず引かなければならないのだ。

あまりにも救いのないこの話を、彼はまだ気が知らない。

一品目。

ニア作のクッキー。

「うん。美味い」

「あんまり甘くなくて好みだな」

そう言って、パクパクと皿に盛られたクッキーをどんどん減らしていくトール。

クッキーはものの数分でなくなった。

「ごちそうさま」

トールはそう言って、作ってくれたニアにお礼を言う。

それを聞いて、ニアは照れくさそうに「お粗末さまでした」と答えを返した。

そもそも、ニアは今回付き合いで作ったただけなので特に怒っていなかった。

なので、ここは特に問題なく通過。

次。

二品目。

サリア作のクッキー。

やや焦げ目の強いクッキーだったが、それに動じるようなトールではなかった。

むしろ、先ほどのニアのクッキーを食べた時よりも速度を上げて次々とクッキーを口に運ぶ。

そして、トールは褒める。

「俺はこれぐらいこんがり焼いた方が好みだな」

「ニアのクッキーも美味かったけど、これもなかなかいける」

サリアのクッキーはサリア自身が料理の腕に自信がなかった為、素材には質の良いものを使い、さらにニアの指導の下で丁寧につくった為、そこそこの出来に仕上がっていた。

その甲斐あって、トールは今回も特に問題なく皿を空にした。

サリアはそれを見て少し怒りが収まったのか、トールの様子を少し頬を緩ませながら見ていた。

「ごちそうさま」

「……ふん」

だが、それを気づかれるのが嫌だったのか、礼の挨拶には不機嫌そうに鼻を鳴らして答えた。

…そして最後。

三品目。

キキョウ作のクッキー。

少し変わった香りがする程度で、違和感はない。

なので、トールは前の二人が作ったものと同様にクッキーを次々と口に入れようとした。

…だがしかし。

クッキーを口に入れた瞬間、トールは目を見開いた。

「~~~~~ツ!!??」

口の中がとんでもないことになった。

苦い。

尋常でないくらい苦い。

舌がクッキーにあたるたびに悶絶するほどの苦味がトールを襲った。

ガッ!!

おもわず口の中のものを水で胃に流そうと机の上にあったコップを掴んだ。

しかし、口の中が乾きやすいクッキーを食べ続けていた為、水もそれなりに飲んでいて、今コップは空だった。

あわてて食堂の流しに駆け込み、水を分けてもらおうと席を立ち上がろうとするトール。

しかし、

「あら？　どうかしました？」

その声を聞いて、トールは動きを止めた。

ここで水を取りにいったら、まずくて水を流し込んでいると思われるってしまう。

「んん！　いや、なんでもないです。」

何とか口にあったクッキーを口の中にためた唾液でもって無理やり飲み込んだトール。

だが、このままではまずいと思ったトールはそれとなくコップに水を入れるべく、キキヨウにお願いしてみた。

「あ、あのー、キキヨウさん。クッキーは口の中が乾くので、水をもらってもいいですか？ さすがに、水なしで皿に盛ったクッキーを食べ続けるのは正直きつくて」

もつともらしい事を言って、コップを持ち上げたトール。

それを聞いたキキヨウは一つ頷き、こう言った。

「クッキーは美味しかったですか？」

「え、あ、はい。お、美味しかったですよ」

その言葉に、あわてて答えを返すトール。

心の中にあった「何を入れたらあんなに苦くなるんですか？」という言葉を飲み込み、なんとか褒める言葉を口にした。

「そうですか、ならよかったです」

トールの言葉を聞いて、再び頷くキキヨウ。

「あの、それで水を…」

それを見て、なにやらヤバイ予感がしてきたトール。

そして、顔を青ざめさせたトールにキキヨウは恐るべき事を口にし

た。

「こんな話を知っていますか？ トール君」

キキヨウはある話を始めた。

それは、人体のある現象についての話だった。

「人間、美味しいものを目の前にすると唾液が通常よりも多くでるそうです」

「…………え」

「私のクッキーが美味しいなら、あなたは今唾液がたくさん出ているはずです。『水が必要ないほど』」

「あの、まさか…」

トールはキキヨウの言葉を聞いて戦慄する。

彼女はつまり、この口の中が麻痺するような苦い皿盛りクッキーを水なしですべて完食しろと言っているのだ。

「…………。」

トールはあまりの事に言葉を出せず、目の前にあるクッキーの山を凝視した。

とても、一人で食べきれない気がしない。

ババツ！！

「え？」 「ん？」 「どうした？」

思わず周りを見回すが、ニアもサリアも、最初から傍観していたデイスも今のトールの状況に気がついていなかった。

つまり、助けもなければ完食以外に逃げ場はない。

しかし、最後の抵抗とばかりにトールは目の前のクッキーについて質問をしていた。

「あの、キキヨウさん…。このクッキーは何を混ぜたんですか？
…なんだか、少し変わった香りがするんですが」

もしかしたら劇薬でも混ざっていて、その薬の名前を聞いた友人が止めに入ってくれないだろうかという淡い幻想を脳裏に描くトール。
もちろん、そんな幻想は起きない。

キキヨウは楽しそうにクツキーに入れた物の名前を教えてくれる。

「ああ、クツキーの中に入れたのは――」

そう言って、キキヨウがトールに教えたのはいくつかのハーブの名前だった。

そのすべてが体の調子をよくする薬効のあるものばかりで、中には薬草の名前もあった。

しかし、その量がおかしい。

普通は入れるとしても数種類ほどにとどめるはずの物が、二十種類を超えている。

どうやら、複数の薬草とハーブを混ぜたことがあのありえない苦味の正体のようなだった。

（…あ、そういえばこの人の趣味って…！）

トールはキキヨウが楽しそうにクツキーに混入した薬草の名前を喋っているうちにある事をに思い出した。

キキヨウは故郷の谷にいた頃から、色々な草花を育てるのが得意だった。

特に薬草などの薬になるものを育てるのが好きで、トールもその草花の世話の手伝いをしたことがあった。

そのことを思い出して、トールは顔がひきつった。

よく思い出せば、昔薬草を取りにトールをモンスターのいる森に連れて行ったのはこのキキョウだったはずだ。

他にも、薬の実験体選ばれたのも一度や二度ではなかった。（確か筋力の増強剤だったか何かを内緒で食事に混ぜられた）

何故こんな大事なことを忘れていたのだろうか、忘れていなければどんな手を使ってでも逃げていたのに…！

トールはそう思いながら、クッキーの皿を睨んだ。

そんなトールを見ながら、キキョウは囁く。

「さあ、トール君？ 私の新作のハーブブレンドクッキーです。どうぞ召し上がれ？」

「……………」

キキョウのにこやかな微笑がトールにはもっと別の、なにか恐ろしいものに見えた。

そして、自分はその恐ろしいものから逃げる手段はもっていない。

スッ

「……ごく」

トールは覚悟を決めて、皿に盛られたクッキーを一つ手に取った。

トールはクッキーを手に持ちながら、自分がこの試練を無事潜り抜けたら今後は女性の前で料理に関して話をするのをやめようと心に深く誓った。

「ばくっ！」

そしてトールは口を大きく開けてクッキーを次々と口に入れた。

味を感じる前に一つでも多く噛み砕き胃に入れる。

口の中が乾いて喉の通りが悪くなってしまいう前にがんがん食べ続ける。

すると、皿に盛られたクッキーは次々となくなっていき気がつけば皿はすぐさま空となった。

その様子に、見ていたほかの三人はそんなに美味しいのかとクッキーを作ったキキヨウを尊敬の目で見つめ、それを食べているトールを少し羨ましそうに見ていた。

「…もぐ、もぐ、もぐ、もぐ。ごっくん」

皿を空にしたトールは口の中に入っていたクッキーをすべて胃に収め、胃を抑えながら顔を青ざめさせた。

そして、

「すごく…美味しかったですっ…！」

ボタン！！

キキヨウの作ったクッキーをなんとか褒めた後、…トールは倒れた。

倒れたトールは医務室に運ばれ、食べ過ぎによる腹痛で意識が飛んだと診断された。

それを聞いてキキヨウは「そんなになるまで食べてもらって、うれしいです」といって、怒りを静めてこの件はまるく収まった。

…しかしこの後しばらくトールは味覚が麻痺して味を感じなくなり、クッキーを見ると体が硬直するようになった。

閑話 料理 後半（後書き）

次から、本編を書きます。

今月に二本更新できるようにがんばります。
それでもまた次に更新で。

図書館にて（前書き）

今回から新しい話を始めます。
最初の話なので、すごく短くてすみません。
次はもう少し長めに書きます。

図書館にて

トールは研究室がもらえるまでの間、学院の図書館に入り浸っていた。

彼が図書館に入り浸る理由は、これから本格的に何を作るか考えるためだった。

図書館で過去の研究成果を調べたり、図書館にあった貴重な本を読むなどして、トールは色々と考えた。

自分の理想の剣を作るための参考になる物、竜人族であるキキヨウと協力して作れる物。他の研究室に難癖をつけられないような物。

トールは考え、そして悩んだ。

何日も図書館に通い、本との睨めっこする日々が続いた。

「ん？」

だが、そんな日々が続いたある日、トールは間違って棚の蔵書から子供向けの絵本を引っ張ってきてしまった。

（ふーん？）

戻そうとも考えたが、トールは何故か興味が引かれてパラパラと本を捲ってしまった。

内容は実にありふれた冒険活劇だった。

悪い魔法使いに捕まったお姫様を助ける騎士の話。

話の最後は魔法使いを倒してお姫様を助けてのハッピーエンド。

この手の本にはよくある展開。

だが、トールはその本を読んで少し難しい顔をしていた。

その理由は、話の中に出てきた騎士が持っていた剣が原因だ。

本の中に登場する騎士の剣は魔法使いの魔法を斬って無効化していた。

「……………」

トールはこの剣にとっても興味が惹かれ、何度も読み直して剣についての詳細を調べた。

しかし所詮は絵本。詳しい事は殆どわからずトールは本を閉じた。

そして、本を閉じた後、一直線に本棚へと向かった。

昔の神話から、伝説と呼ばれる勇者の物語、目に付いた様々な昔話や絵本。

トールはこのような本をかき集め、虱潰しに調べた。

そして何冊もの本を調べた後、トールは「聖剣」や「魔剣」と呼ば

れる武器を作ろうと考えた。

伝説の勇者などが持っていた聖剣や魔剣、これらの武器は過去に多くの人を守ってきた。

過去にあった「人を守る剣」

それが自分の思想の剣と重なるのかまだわからないが、これらの研究をすることは自分の理想の剣のヒントになる可能性がある。

ツールは本格的にこれら剣を研究、製作することを自分の研究室の「成果」とすることを決めた。

証明書（前書き）

今回もかなり短いです。申し訳ないです。

証明書

―学院、生徒会室。

「では、ここに責任者としてあなたの名前のサインを」

「はい」

「では次に生徒手帳を出してください。研究室の室員の証明として判子を押します」

「どうぞ」

「失礼します。――はい、これで手続きは終了です」

「どうもです」

俺は学院の生徒会室で、ある手続きをしていた。

手続きの内容は、「研究室」の受け渡しについてだ。

学院長室に行ってからだいぶ時間がたったが、今日ようやく俺に研究室が与えられた。

今、その手続きがすべて終わり、俺の手帳にそれを証明する判子が押された。

「これが証明書代わりになるのか…」

俺は自分の生徒手帳を見て、少し感傷的になった。

これから作ろうと考えている聖剣や魔剣の製作。

この手帳はそのための道具として、とても重要な役割を持つ。

手帳は俺が研究室の人間であることを証明するだけでなく、図書館にある一般生徒が貸し出し不可の本を閲覧可能とする。

この手帳があれば、今までよりも詳しく聖剣や魔剣の情報を知ることが出来るだろう。

「……………」

研究室の受け渡しの手続きが終わると、まっすぐに図書館に向かった。

早速もらった研究員の「特権」を図書館で使うためだ。

——まず、目的の剣が剣がどんな形をしていて何が出来るものなのかを徹底的に調べる。

次に、その作られた地方はどのような金属が産出されていたのかを調べあげ、目的の剣の特徴と照らし合わせて材料に何を使っていたのかを調べる。

そして、調べた剣の材料と伝承に残る話から、その剣の製法について考える。

最後に、自分の知識と調べ上げた情報から剣の実態を知る。

俺は早くこれらのことを調べたくて堪らない。

なぜなら、これから作ろうと考えている「剣」は実に興味深いものだからだ。

——俺が作ろうと思っているのは、図書館で読んだあの絵本に載っていた「魔術を無効化する剣」だ。

魔術師が放つ魔術を「軽減」する鎧や盾はいくつか心当たりがあるが、「無効化」は聞いたことがない。

どれだけ強い呪符やまじないの紋様を貼り付け刻もうが、魔術の無効化は出来ない。

これは例えドワーフの技術でも不可能だ。

だとすれば、一体どのような技術で出来ているのか？

エルフの秘術で剣に神秘の施しをしているのか？

それとも古代の人間たちの失われた技術なのか？

自分の知らない技術で作られた剣。

鍛冶をする者にとって、これほど興味を刺激されるものはない。

(…やばいなあ。すごく楽しい)

俺はまるで子供のように、胸をわくわくさせながら図書館に向かった。

証明書（後書き）

感想を待っています。

魔剣の作り方

魔術を無効化する剣について禁書庫で調べた結果、――何故魔術が効かないのか理由がわかった。

どうやら竜の血と鱗を使って、魔術に対して絶対的な防御を可能にしているらしい。

昔から、竜の血を浴びた者、肉を食った者は不老不死になり魔術が効かないという伝説があったが、どうやこれらを剣の材料に使うことで魔術を無効化しているようだった。

だが、ただ剣に血や鱗の粉末などをかけただけでは効果は発動しないだろう。

なので、どうすれば効果が発動するのかを、竜に特別詳しい人に聞いてみることにした。

「確かに、竜の体の一部は魔術の効果を打ち消す力がありますが、トールさんが思ったとおり、ただ素材として使っただけでは効果は

現れないでしょうね」

『竜人族』であるキキヨウさんに話を聞くと、思ったとおり、ただ材料に混ぜた程度では効果は出ないそうだ。

「…では、どうすれば効果が現れるかわかりますか？」

俺はさらに剣の製法についてキキヨウさんに質問をした。

「簡単です。効果が出ないのは、剣が無機物だからです。生身の肉体よりも無機物には魔力の通りが悪く、加護などの力も弱いのです。だから、効果をだすには相当の量と方法が必要なんです」

意外にも、キキヨウさんはあっさりと俺が欲しかった情報の答えを教えてくれた。

「……え？」

俺はその事に少し驚きを隠せなかった。

何か知っているだろうと思っていたが、ここまであっさりと教えてくれるとは思っていなかったからだ。

そして、キキヨウさんは驚く俺を無視するように話を続けた。

「―剣に竜の鱗を粉末にしたものを混ぜて作り、次に樽を竜の血いっぱい満たして、そこに先ほど説明した剣を入れます。そして、何日も時間をおいてから取り出せば、剣に竜の血の力が宿り、魔術

を無効化する『魔剣』が出来上がります。」

キキヨウさんは話が終わると、俺のほうを見ながら最後に「参考になりましたか？」とにこやかに笑った。

俺はその笑顔につばを飲み込み、剣について矢継ぎ早に質問をした。

「…鱗を混ぜるのは、血が剣に早く馴染むようにですか？」

「そうです。その方がいくらか血に漬け込む時間が少なくて済みます」

「…血はやはり翼竜などの血ですか？ それともキキヨウさん達のような竜人族の血ですか？」

「どちらでも大丈夫です。効果に変わりはありません」

「…では最後に質問します。」

「はい」

俺の質問にまたにこやかに笑うキキヨウさん。

その笑顔には何の裏もない。

ただ、俺に何かを教えることが楽しくて堪らないという顔だ。

「……………」

そして、俺は、その笑顔を見ながらあることを聞いた。

「…この魔剣を最初に作ったのは『どちら』ですか？」

俺の質問に、キキョウさんはまた笑って答えた。

そして、その答えは俺の予想していた通りだった。

「『私達』です。人間たちから身を守るための武器として、私たちが自分たちの身を削って作り上げた武器です」

魔剣の作り方（後書き）

誤字脱字の報告と感想を待っています。

あと活動報告でも書きましたが、地震雲を発見したので近日中は少し気をつけたほうがいいかもです。

材料入手候補

「竜人族」について少し説明をする。

「竜人族」は『エルフ』と同じように長命であり長い歴史を持っている。そして、人間が扱えない複雑な魔術や失われた技

術を持っている。

さらに、「竜人族」の体の一部は魔術や錬金術の材料に利用できるため、「竜人族」は人に狙われやすい。

なので、「竜人族」は人間が立ち入らない山の秘境や森の奥地に住むことが多い。

他の種族の争いごとなどには干渉はしない。

しかし、向こうからやってくる場合は違う。

「竜人族」には『龍』と呼ばれる特別な竜人が存在し、「竜人族」の里一つにつき一人だけ存在する。

そして、その里の『龍』が死ぬことは里の滅びに繋がるため、里は『龍』を全力で守る。

『龍』を守るためならどれだけ血を流そうが構わない。

例え、自らがどれほど傷ついても『龍』を守ろうとする。

これが「竜人族」という種族の考えだ。

そして、このような考えを持った種族だからこそ、自分達の体の一部を材料として使うあの魔剣を生み出したのだろう。

「魔術を消す魔剣」

俺は、この剣から『守るためには手段など選ばない』という考えをひしひしと感じた。

※※※

「この剣を作るのに一番重要なのは材料」

俺はキキヨウさんから魔剣の詳しい製法を聞き出した後、本を調べてそう結論した。

特に問題なのが、「血液」だ。

竜人族のキキヨウさんは魔剣の制作に協力をしてくれるのそうなので、多少の血液は確保したが、やはり量が絶対的に足りない。

普通の人間が血をどれだけ抜いて大丈夫なのかを調べた結果、女性が一度で安全に血を抜いて大丈夫な量は牛乳瓶二本分ほどで、これ以上抜くと危険があるそうだ。

しかも、血を抜いた後は十数週も日を置かなければならず、キキヨウさんが教えてくれた「樽いっぱい」の血の量は確保できない。

ならば他から確保しなければいけないのだが、その入手候補があまりよろしくない。

―キキヨウさんは学院にやって来るとき、翼竜と呼ばれる下級の竜族に乗ってここ来たそうだ。

そして、その翼竜はキキヨウさん達の里に帰るどころか、いつでもキキヨウさんの呼び出しに答えられるように近くの森に巣を作って住んでいるそうだ。

この翼竜からならばかなりの血と材料に必要な分の鱗が手に入るのだが、問題があった。

猫や犬を飼っていて病気などをしたときに専門の医者に行った者ならばわかるだろうが、動物に注射などを打つとほぼ間違いなく「暴

れる」。

猫などの愛玩動物ですら毛を逆立てて唸るのだ、もしそれが鋭い牙と爪を生やした翼竜ならばどうなるか？

俺は食われそうで怖い。

だが、このことをキキョウさんに話したら「昔、あれだけ翼竜と遊んだのにまだ怖いんですか？」と不思議がられた。

「……………」

俺はあの時ほど「ふざけんなっ！」と叫びたいと思ったことはなかったと思う。

あれは俺が翼竜と遊んでいたのではない。みんなが俺で遊んでいたのだ。

キキョウさんは何か思い違いをしているようだったが、話が先に進まないでそこは適当に飛ばして、材料の確保に付いて話合った。

その結果、血や鱗の確保はキキョウさんが里のみんなに手紙を書いて、都合がつくかどうかを確認してくれるとのこと。

もしかするとこれで材料の確保はすべて完了するかもしれないが、念の為、俺はもう少し材料の根回しをすることにした。

確かこの学院は「地竜」と呼ばれる小型の竜を研究がされていたは

ずである。

俺はそのことを思い出して、まずサリアに会いに行った。

※※※

「なあ、サリア」

「ん？ ああ、トールか。どうかしたか？」

「突然だけど、サリアって上に姉さんがいるだろ？ 結構美人な」

「どこでそんなことを聞いた？ あまり人には話していないはずだが？」

「あー、それは話すと色々めんどくさそうだから後で話す」

「？」

「とりあえず、サリアの姉さんにこう言ってくれ『竜の血が欲しいので、都合してくれると、とても助かります』」

「はあ？」

「よろしく頼んだ。じゃっ！」

「あっ、おい！ トール！」

言うだけのことを言って、早々に目の前から消えたトールをサリアは咄然と見送りながら、サリアは何故トールが姉のことを知っているのか不思議に思った。

材料入手候補（後書き）

誤字と脱字の報告と感想を待っています。

一応補足しておきますが、お姫様の傍にいた側近の騎士がサリアの姉です。

実験（前書き）

お待たせしてしまって申し訳ないです。

実験

トールがサリアにユリアへの伝言を頼んだ三日後。

研究室にフラスコに入った竜の血が届けられ、そしてその一週間ほど後にキキョウの故郷から数枚の翼竜の鱗が届けられた。

トールはこれらを使って早速、魔剣作りを開始する。

授業などは学院で知り合った友人に代返を頼み、自分は授業をボイコットして学校の工房で魔剣の製作に勤しんだ。

砕いた竜の鱗を混ぜたインゴットで小型のナイフを作り、その後はナイフを血の入った大きめのガラス瓶の中に浸す。

あとは時間を置き、ダガーに竜の力が宿るまで根気強く待ち続ける。

魔剣をナイフの大きさにしたのはこの時に早く血が馴染むようにしたため。大きすぎると材料である血を大量に使う、そしてそれだけ時間もかかる。

なので、トールは試作品ということでナイフ型の魔剣を作ったのだ。

——そして、魔剣を血に漬け込み、完全に剣に血が馴染んだ頃。

トールはビンから真っ赤に染まったナイフを取り出した。

『ぬちゃり』

人間の血よりも粘着度の高い竜の血から自分が作ったナイフを取り出す。

普通、刃物を血の入った瓶などに入れば刀身が錆びて使い物にならなくなるところだが、何故か取り出したナイフには錆びなどは一切が見つからない。

そしてどうしてか血の色がナイフにまで移っている。

これが竜の血の特性なのか、血のぬめりも手伝ってナイフが出来上がった頃よりも刀身が美しく見える。

「……なんか不気味だな」

血の赤みが金属の鈍い輝きと合わさって、ゾツとするような妖しい美しさがある。

トールはナイフについた血を油と布で落としながら、それをじっと見つめていた。

「……………」

トールは何かを考え込みながら手に持ったナイフの血を拭い続ける。

「……とりあえず、一度実験してみるか」

そして、ナイフについた血を完全に拭った後、ナイフを適当な布で包んで自分の研究室から外に出た。

トールが向かう先は魔術学部が使う魔術鍛錬場。

毎日、火や氷や雷が舞う学院の中でも特に危険な場所であった。

学院の敷地内には五メートル以上の高さの壁に囲われたコートがある。

一見すると貴族の中で流行っているというテニスという遊びに使うコートに近いが、もちろんここでするのはそんなものではない。

その証拠に、現在その壁にはテニスの球ではなく、火の玉や氷の礫が壁に何度も衝突している。

他にも案山子の形をした「的」があり、それに向かって術を放つ生徒達もいる。

先ほどから壁に火の玉などを当てているのは彼らだ。打ち漏らしが案山子の後ろにあるその壁にあたっているのだ。

彼らは新入生なのか打ち漏らしが大変多く、その殆どが案山子に当たらず壁に当たっていた。

それでも壁が壊れないのは、壁全体に魔術の威力を極端に減少させる術がかけられているお陰だろう。

ここは魔術の精度を上げるために生徒が練習する、魔術部専用コートだ。

そこにツールは向かい、コートの中で指導に当たっていた教員に実験のために人材を少し貸して欲しいと頼み込んだ。

最初は渋られるかと思ったが、意外にも教員は「危険があるかもしれないから、私も付き合おう」と快諾してくれた。

そして、コートの一角を貸してもらい、ツールは数人の生徒と教員一人に向かって実験の説明を始めた。

「実験はこのナイフの耐久力検査です。このナイフに向かって何発か魔術を当ててもらって、どの程度まで耐えられるのかを調べます」

だがこの時、この説明を聞いていた生徒達にガッカリしたような空気が漂っていた。

もっと面白い実験をやるとでも思ったのだろう、あまりぱっとしない実験内容に一同が拍子抜けをしている。

「お前らもっと緊張感を持て。そんな様子で実験に参加するのは危険だぞ！」

だが、監督責任がある教員はどんな危険があるかもわからないと、生徒達を叱りつけて注意を促す。

しかし、トールはそんな生徒達を見ている表情を変えなかった。

「……………」

自分の研究室の実験を馬鹿にされたような態度をとられたのだから、少しぐらいは腹を立てるなりしてもいいと思うのだが、トールはただ手に持ったナイフを握り締めているだけだった。

その後すぐに、案山子の腹の部分にナイフを丈夫な紐で括り付けて実験は始まった。

10メートルほど離れた場所にある案山子に向かって術者は術を放ち、どれほど術をぶつければナイフが破損するのかを調べる。

「はっ！」

最初はトールと同学年らしき男子生徒が、突き出した両手から林檎ほどの大きさの火の玉を一つ出して案山子に向けて放った。

『シュッ——』

だが、火の玉は案山子に当たる前に何故か消えてしまった。――

まるで蠟燭の炎を息で消したように一瞬で消えたのだ。

それを見ていた他の生徒達は実験の緊張で距離感が掴めなかったのだと思い、術を放った生徒の背中を叩いて「しっかりしろよ」と囁し立てた。

だが、術を放った本人は「そんなはずは……」と首をかしげ、自分の手や案山子の腹に括り付けたナイフを交互に見ていた。

「次は私がやるわ」

そんな男子生徒のおしのけて、次は上級生らしき女子生徒が現れた。

女子生徒は片手を突き出し、掌から氷の礫を何粒も発生させる。

「……………」

そして女子生徒は気合の声も何も出さず、ただ掌を少し前に突き出した。

すると、礫は案山子にもすごい早さで向かって行き——そして、再び消えた。

女子生徒が狙った場所は案山子の腹の部分のはずなのだが、狙いが外れたのか案山子は完全な無傷。実験開始前と殆ど何も変わらずにそこに立っている。

これには教員や他の生徒達もおかしいと思い始める。

術を放った二人が着弾まで術を固定しきれずに術を消失させてしまったとも考えられるが、二人とも術経験が豊富な上級生だ。こんな初歩のミスをするとも考えられない。

「そんな……ありえない」

女子生徒もそのことに違和感を持ったのか、愕然とした様子で離れたところにある案山子を見つめていた。

いや、正確には案山子に括り付けられた真っ赤なナイフをだ。

「なんなの……あれは」

このコートにある術の威力を減少させる壁だってこんなことは起こらない。

あの壁は教員数人がかりで壁の内部まで威力減少の術式を組み込んでいるのだ。厚い壁に何重にも組み込んだ術式によって当たる術の威力を限りなくゼロに近づけているから、あの壁は壊れない。

だが、あのナイフには術を組み込んでいる様子も見当たらないし、何よりコートの壁と違いこちらは「消滅」に近い。

術が当たりそこから威力を削がれていく様子とは違い、当たる瞬間に消滅しているように見える。

あのナイフは一体何なのか、コートにいた数名の生徒と教員は不気味な生物を見るようにナイフを見た。

そして、そんな視線の中、ツールは実験を続けるように号令を出

した。

「次は至近距離での実験に入ります。術者の方は放つ術の種類に気をつけてください」

その言葉に、緊張感を持たず実験に参加して生徒達は気合を入れなおした。

好奇心と探究心が主な原動力である自分達魔術師がここで尻込みするわけにはいかないと、正体不明のナイフに向かって術を放つために近づいていった。

「それではお前たち、始めろ」

「はい」

少し離れた場所にいる教員が号令をかけ、それによって案山子の前にいた生徒が術を使う準備をする。

今回は至近距離からの術発動の為、周りへの被害を考えた術を発動する。

『キイイインッ』

発動させた術は魔力を変化させた氷の槍。矛先から柄の部分にいたるまで氷で出来た2メートルほどの氷槍だ。

そして、生徒はその氷槍を掴んで案山子に括り付けられたナイフに狙いをつける。自分の魔力で生成した物体なので、霜焼けや凍傷等の心配はない。

——この槍ならば術が不自然な消失を繰り返していた原因がわかるだろう。

今までの遠距離からの的に当てていたのとは違い、これは至近距離で的に当てる。

なので、術がどうやって消えていくのか間近で見ることが出来るし、どのように術が消えているのか感触として分かるはずだ。

「ふんっ！」

生徒はそう考え、氷槍を案山子の腹に括り付けられたナイフに向かって一気に刺した。

「「……………」」

教員や生徒達が見守る中、氷槍がナイフに当たる。

だが、やはりというべきか……。

氷槍はナイフに当たると消えた。

ナイフに当たった矛先だけはない。槍自体も溶けるように生徒の手から跡形もなく消えていった。

「「いつ!?!」」

この現象を見た教員と生徒達は驚愕した。

今まで何が起きていたのか、この現象を見て理解したからだ。

術者が自分の魔力を練り上げて作った魔力の槍が消えたということとは、槍を形成していた魔力を「斬られた」のだ。

いや、正確には「分解」だ。

あのナイフは、氷の槍を形成していた魔力の塊を、ネジをとるように一つ一つ外していったのだ。

「魔力」というネジを外された槍はその所為で、形を保てなくなった。

だから、皆が驚いているのだ。

こんな物、王城か教会のごく一部の関係者しか持っていない超一級の品だ。

それが目の前にあるのだ。誰だって驚くだろう。

だが、これを持ってきた学生はこれの実験だと言って持ってきている。

つまり、これはどこから持ってきたのではなく、「作った」と言うことになる。

「「あっ！」」

その事実気がついた人間は、今度は慌てて持ってきた生徒、つまりツールを見た。

「……もう十分です。ご協力感謝します」

するとツールは実験の手が止まって周りの空気が変わっていることに気がつき、実験を早々に切り上げた。

「「……………」」

「……………」

啞然とする生徒達の視線の中、案山子に向かって歩いて行き、括りつけられたナイフを外し、持ってきた時と同じように布で包み込む。

その作業をじっと見つめる生徒と教員。どちらも何も言わず、ただ時間だけが過ぎていく。

「今日はどうもありがとうございました。おかげで良い参考になりました。……それでは失礼します」

そしてツールがナイフを大事に懐にしまい、周りにいる生徒と教員に向かって礼を言って帰ろうとする。

だが、それを止めようとする生徒が現れた。

「……ちょっと待って」

それは先ほど実験を手伝ってくれた女子生徒だった。

始めの方の実験で遠距離から氷の礫を発生させた上級生だ。

彼女は何か言いたいことがあるのか、トールの顔とナイフをしまった懷の辺りを交互に見ている。

その視線に気がつき、懷に手を当てながらトールは女子生徒言った。

「コレについて話すことはないですよ」

「……それは何故と、質問してもいい？」

聞きたかった事をないと言われ、せめてその理由を聞こうとする女子生徒。

それに対して、トールははっきりと答えた。

「もう、コレを作る気がないからです」

「え……？」

驚く女子生徒にトールはさらに続ける。

「量産もしないし、改良もしない。こうやって剣の形にするのはコレで止めにします」

「な、何故？ どうして作るのを止めるの？」

女子生徒は訳が分からないと、ツールに答えを求めた。

こんな素晴らしい物を作れるのに何故作るのを止めてしまうのか、その理由を尋ねた。

すると、ツールは冷めた声で答えた。

「性に合わないからです」

「え？」

「作っていると気分が悪くなるし、大した技術を使わないので遣り甲斐がない」

「な、なにを言って……」

「なので、もう作る気が起きない」

啞然とする女子生徒に最後にそう言うと、再びツールは帰ろうとする。

「それでは失礼します」

「ま、待っ……」

「……失礼します」

まだ何かを言おうとする女子生徒に有無を言わさず別れの言葉を告げ、今度こそトールはコートから消えた。

そしてこの帰り道、誰もいない路地でトールは独り言を呟いた。

「……こんなのが俺の目標だなんて納得できるか」

そう呟きながら歩くトールの後ろ姿には隠しようのない苛立ちがあった。

実験（後書き）

誤字脱字の報告と感想まっています。

逃走

「…お前、『アレ』なんとかしろよ」

「…知るか。あっちが勝手に付きまどってくるんだ」

授業中の教室の一角、ツールとディースは教室の廊下を見ながらヒソヒソと話をしていた。

彼らが話しているのは、廊下にいる生徒に関して事だった。

廊下には三学年以上の上級生がたむろしている。

「お前が考えなしに人が大勢いるところで実験なんかするから、こ
うなったんだろ」

「…それについては反省する。だけど、作る気が無い物を『作れ』
って強制する奴らにどう対応しろって言うんだ？」

「『前向きに検討します』とか『考えておきます』とか色々あるだ
ろ」

「そんなの最初のうちに言った。だけど、効果なんかなかった」

廊下にいる上級生たちは先日ツールが作った魔剣について、調べ
させてくれ、作ってくれと、色々と言って来ている連中だった。

しかし、ツールはその魔剣について作る気はなく、連日断ってい

るのだが、それでも懲りずにやってくるのだ。

「というか、何でお前その剣もう作るの止めたんだ？」

「…色々あるんだよ。色々」

「ふーん」

どこか納得がいけない様子のディースにツールは声を潜めて囁いた。

「……放課後に研究室にければ詳しいこと教えるから、今は何も言わずに逃げるのに協力してくれ」

ここ数日はディースの助けを借りて上級生からの『お願い』から逃げてきたのだ。

「はいはい。了解了解」

ここでディースにへそを曲げられるとまずいので、後で説明をすると今は納得してもらった。

『キーンコーン！ カーンコーン！』

そんな話をしていると、授業終了の鐘の音が校舎全体に鳴り響く。

『ざわざわっ ざわざわっ』

その音を聞いて、廊下にいた生徒達がざわつくのが教室の中からわかる。

逃げる場所は教室から出るために扉二つだけ。

トール達がいる教室は三階なので、飛び降りるのは危険なので無理だ。

逃げるためにはどちらかの扉から出るしかないのだが、扉二つはどちらも上級生が通せんぼをしている。

『ならば逃げるにはどうするか？』

その答えはこうだ。

「じゃあ頼んだ」

「あいよ」

まず、トールは教科書などを全て渡してディースに早めに教室を出て行って隣の教室に向かってもらう。

「先輩。そこ少しどいてもらっていいですか？」

「ん？ ああ、悪いな」

先輩達も関係ない生徒に危害を加えることはないので、ディース

は楽に外に出ることができる。

『ガラガラッ!』

「さて、俺も動くとするか」

この隙にツールは窓を開け、窓ガラスを掃除するときを利用する壁から少し突き出した出っ張りを使用して隣の教室の窓に向かう。

「……木上りと違う神経がいるなコレ」

カニ歩きのような横歩行で少しずつ移動して隣の教室の窓までたどり着く。

すると、先ほど教室を抜けたデイスが隣の教室の窓を開けて準備を整えているので、そこから教室に侵入する。

「よう、お疲れ」

「そっちこそ、お疲れさん」

「おう」

中にいたデイスと毎度のやりとりをしながら教科書を受け取り、今度は『隣』の教室にいる上級生達の隙を狙って逃走する。

「じゃあ、いくか」

「ああ」

扉を開いて、階段に向かって走る。

上級生達数人がこちらを向くが、気にせずに走る。

そのまま次の授業に出席し、また同じようにやり過ごす。

デイスがいない場合は別の生徒に頼んで隣の教室の窓を開けてもらい、同じ事をする。

こんなことを連日繰り返してツールは上級生達か逃げてきたのだ
った。

※※※※※※※※※※

そして、放課後。

「それで？ お前はなんで魔剣作るのがやめたんだ？」

「……一言で言えば、怖くなったからだ」

ツールは約束どおりデイスに説明をしていた。

「怖くなった？」

「正直、魔剣っていうのを甘く見ていた。あれは使い方しだいになり危険な物になる」

「……例えばどんなだ？」

ディースはトールの言っている事がいまいち理解できず、何か例を出してくれるように言った。

それを聞いたトールは少し考えた後に幾つかの『使い方』を教えた。

「まず、魔力で組んだ結界が壊せる。鍵つきの箱や扉も同様だな。後、あの剣はどうやら高濃度の魔力で他の魔力の構成を破壊するみたいだから、人の体に突き刺せばしばらくの間は魔術が使えなくなる」

「うわぁ」

ディースは少しずつ魔剣の危険性について理解してきた。

『悪用しやすい』のだ。

あの魔剣を持っていれば、魔力で鍵をしている箱や扉は盗人の格好の餌食なるし、要人などを保護している結界は暗殺者にとって脅威ではなくなる。

それがわかり、トールは作るのを止めたのだ。

「だから、作るの止めたのか」

「そういうこと」

ディースは先ほどのトールの言葉に納得した。

しかし――

「でも、それをあいつらに説明したのか？」

ディースはふと疑問に思ったことをトールに聞いてみた。

教室に前にたむろっていた上級生達。彼らが今の話を聞いていれば、強引に調べようとするとは思えないのだが。

その事について聞いてみると、トールは何気ない口調でかなりキツイ事を言った。

「ああ、あいつら信用できないから話してない。奴ら何するかかわかったもんじゃないからな」

「そ、そこまで言うか」

トールの台詞に、たじろぐディース。

だが、トールは別に普段と変わらぬ口調でさらにキツイ言葉を口にするのだった。

「あいつらは駄目だ。あいつら人が作った武器を利用することしか考えてない。だから、話すつもりもないし、関わり合いになるつもりも無い」

言葉の中にある強い『拒絶』に背筋が冷えた。

ディースはトールとの付き合いは浅いが少し理解している事がある。

それはトールが何かに利用されることや、使われることを極端に嫌っているということだ。

原因が何なのかわからないが、何か譲れない理由があるのだと、ディースは思っている。

そして、理解しているからこそディースは先ほどのトールの台詞に背筋が冷えたのだ。

——もしもトールの逆鱗に触ればどうなるのか？

トールの武器を勝手に持ち出した人間がいたらどうなってしまうのか？

……激怒するだけならば別にいい。

だが、ディースにはトールという人間がそれだけで納まるとは思えない。

何かもつと、とんでもないことが起きるような気がする。

それが、この時のデイスの感想だった。

『力』

『力』が欲しかった。

『力』がなければ生きていけないとわかっていたから。

これから一人で生きていくための『力』が欲しかった。

それで死んだ両親が生き返るわけでも、壊れた生活が戻るわけでもないとわかってはいたが、それでも『力』が欲しかった。

理不尽に抗う『力』

逆らうための『力』

抵抗するための『力』

――生きるための『力』

――その『力』が、欲しかった。

夢も希望もなく。

父も母も亡く。

一人で生きる力も無い。

何も無い俺には『力』という『神』が必要だった。

頼るものが何も無い世界で、何を信じればいいのかわからない不安定な心。

その心を安定させるには、自分の中に存在して、確かな何かを与えてくれる『神』がどうしても必要だった。

自分の中にいる自分が信じられる『神』

信じて奉仕することで応えてくれる『神』

それが必要だった。

幸運にも、俺はその『神』に会うことが出来た。

そして、『神』から『力』を与えられた。

与えられた『力』は、気高く、尊く、なによりも美しい『力』だった。

——空っぽだった俺に、その時中身が入った。

その時から、俺を生かしているのはこの腕に宿る『力』だ。

空っぽの自分を埋めているこの『力』は、俺の心臓でもある。

『力』は俺の『命』そのもの。

他に替えがきかない大切なものだ。

何も無い俺が手に入れた、たった一つの宝物。

この『力』を失いたくはない。

自分の中には他に確かな『力』などない。

だから、失うことは出来ない。奪われるわけにはいかない。

与えられたこの『力』を悪用すれば、俺は『力』を、『神』を、すべて裏切ることになる。

それだけは出来ない。

自分に生きる力を与えてくれたこの『力』を、俺は裏切りたくはない。

『力』
(後書き)

感想待っています。

神官

ツールは学院長と先日作った剣について話し合っていた。

「——そういうわけで、この剣はこれ以上作ることは出来ません」

「確かに、これはちょっとばかり危険だね」

「はい。ですので、竜人族との合同開発作品はまたの機会に」

「……いいだろう。まあ、実を言ってしまうえば私もこれを量産することは反対だ。悪用されることもそうだが、折角出来てきた竜人族との友好関係がなくなってしまうのはよくない」

「材料が竜に関係する品ばかりですからね……」

「そういうことだね」

学院長と話し合った結果、話はツールが望んだ結果に落ち着いた。

剣の能力はすさまじいが、その反面、剣の危険性と材料に使う竜の素材を使うことの意味を学院長は考えてくれた。

そのおかげでToolの学院長への「報告」は無事に終わった。

研究室を持つ人間にとって、この「報告」とは色々な意味がある。

この場合の「報告」とは研究室をもった人間は何かしらの発明品等を作った場合に、その製品の説明を学院長にする事で

あり、トールはまさにそれが終わった所だった。

これは本来ならば研究に使うはずの研究費を私的な理由で使う不届きな輩が出ないようにするために措置であり、他にも発明品の有能性を説明することで研究費を追加してもらうなど研究室を持つ人間にとってとても重要なものだった。

これをおろそかにすると研究費の横領を疑われるばかりではなく、自分がやっている研究の有効性に気づいてもらえない等の不利が出てくる。

その為、研究室持ちの人間は定期的な報告を学院長に行っている。

トールはその第一回目の報告を無事終え、次の研究では何を作るのかについて、少し学院長と話をした。

「それで、次はどんなものを作るつもりだい？」

「今回はずいぶん物騒なものを作ってしまったので、次回は少し人のためになるようなものを作りたいと思っています」

「防具とかかい？」

「いえ、とりあえずは武具から少し離れたものを作ってみようと思っています」

「出来れば面白いものを頼む。最近は驚くような発明品の報告が無くて退屈なんだ」

「……まあ、頑張ります」

「頑張りたまえ。君には期待している」

「はい」

（……そろそろ帰るかな、他にする話もないし……）

トールはこのまま会話を続けても次の製作物の明確な姿は見えてこないと思い、そろそろ話を切り上げようと学院長に退室の声をかけようとした。

だが――。

『コンッコンッ』

学院長室の扉をノックする音が聞こえ、学院長とトールは二人で扉の方を見る。

「来客かな？」

「あ、じゃあ、俺帰ります。材料費の報告や研究成果の報告も済みましたし」

「すまないなトール君」

「いえいえ」

トールは内心ちょうど良かったと思いながら、布に包んだ剣を小脇に抱え、次の来客のために机の上を整理する。

『コンッ…コンッ…』

扉の外から先ほどよりも控えめなノックの音が聞こえる。

「少し待っていてくれ！」

ノックを聞いた学院長が扉の外にいる人に声をかける。

トールはその間に、報告書などの束をまとめて学院長にすべて渡す。

「これが報告書全部です」

「うむ、確かに受け取った。何かあれば声をかけるが、先ほど目を通した時は特に問題がなかったから大丈夫だろう。これからも研究を頑張ってくれ」

「はい。それでは失礼します」

報告に必要なだった書類をすべて渡し、素早く挨拶を終え、トールは学院長室から出ていこうと扉を開けた。

——だが、扉を中途半端に開けた状態でトールの動きは止まった。

「ん？」

トールは扉を開けた先で意外な人間に会った。

おそらく、先ほど扉をノックしていた来客者だろう。

トールにとってその来客者は今まであまり会う機会の無かった人種だ。

トールは養父の仕事の都合上、商人や軍人、ある時は人間以外の種族にも関わったことがあるが、その「職」につく人間には殆ど縁がなかった。

というかトール自身が「彼ら」がいる場所に行くことを極端に嫌っていた所為もあり、久しぶりに見たその職種の人間が持つ独特の雰囲気には面食らってしまったのだ。

「こんにちは」

だが、相手はそんなトールの態度を気にした様子もなく上品な仕草で両手を胸の前で組んで頭を下げて礼をした。

張りのある声質、そしてほどよく調整された声量。

毎日、何人もの人間に同じ言葉を発する事で習得した実に耳に心地よい挨拶だった。

「…こんにちは」

ソレに対して、トールは頭を下げて平凡な挨拶を返した。

「……………」

そして、ゆっくりと頭を上げた。

見えたのは、清潔な白く長い布。

体全体を覆い隠すような白いローブ。

両腕はローブの裾で隠れ、見えるのはほぼ手先だけ。

足も膝まで届く生地ではぼ隠れ、歩くのにすら苦勞しそうな服。

そんな服を着た人間の職業など、ほぼ限られる。

それは教会に所属する人間。

『神官』

トールの目の前にいたのは、神官だった。

それもかなり位の高い人物。

服の質とローブにそれに縫われた金糸の刺繍がすべて証明している。

顔を見れば実に人のよさそうな笑みを浮かべた30代後半の男性神官。

大抵の人間はこのような人間を見れば警戒心を緩め穏やかな気持ちになるのだろうが、トールは違った。

トールは教会が信仰する『神』を信じていない。

その理由として、トールにはすでに自分の『神』がいるからだ。

他の神を信じることは自分の『神』に対しての冒瀆に繋がると思っている。トールは教会などが崇める神を信じることを自ら禁じている。

だから、トールは教会に関係する人間とは距離を置いて接するにとにしている。

彼らの信じている神の教えを、自分が聞いても意味がないと思うし、なにより彼らの話を聞いているうちに『共感し、染まってしまふ』のを回避するためだ。

その所為で故郷にいた頃は街にある教会の神官に何度か説教をされ、居心地の悪い思いをしたことが、トールは今までこの生き方を貫いてきた。

「……失礼、します」

だから、この時もトールは男性神官に軽く挨拶をした後、係わり合いになることを回避するためにすぐに神官の前から消えた。

神官（後書き）

誤字脱字の報告、そして感想を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589m/>

やさしい鍛冶師

2011年10月13日23時11分発行